

文部科学省指定事業

令和2年度「地域との協働による高等学校改革推進事業」

【地域魅力化型】

〈ソピアの旗プロジェクト〉

研究開発実施報告書（第1年次）



令和3年3月

高知県立大方高等学校



## I 巻頭言 「ソピアの旗プロジェクト」実施報告書の発刊にあたって

高知県立大方高等学校長 大西雅人

本年度より、本校は文部科学省が主催する「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受け、『未来の「地域の創り手」人材の育成』を目指して、「ソピアの旗プロジェクト」と銘打って研究開発を進めることとなりました。そしてこの度、令和2年度を取組をまとめた研究開発実施報告書を発行することとなりました。

本校は、平成17年度に「県立高等学校再編計画第1次計画」にもとづき、大方商業高等学校から定時制昼間部・夜間部、通信制課程を併置した、多部制単位制普通科高等学校として創立されました。学校としての歴史は浅いものの、開校の翌年からコミュニティ・スクールの指定を受け、黒潮町と連携した取組を進めてきました。また、県内では当時としては珍しかった、地域の課題を高校生が発見し解決に向けた提案や活動を行っていく「自律創造型地域課題解決学習」を、「総合的な学習の時間」のなかに位置づけて取組を進めてきました。

平成29年度からは、学校設定科目として「地域学」を設定し、南海トラフ大地震への対応という課題を有する黒潮町の理解のもと、高校生に何ができるかを考え、理解促進や魅力の発見、課題発見や解決等の実践につなげたいと考えました。平成28年度に黒潮町で開催された『世界津波の日』高校生サミット in 黒潮のレガシーを引き継ぎながら、防災や地域課題解決学習をさらに発展を！との思いもあり本指定事業に手をあげました。

本年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大もあり、「ソピアの旗プロジェクト」を進めるべく設定したカリキュラムは大きく変更を迫られるとともに、これまで積極的に生徒を地域に出し、地域の方々と触れ合う中で声を聴き、課題を発見していた活動ができなくなりました。しかし学校再開と同時に、生徒たちは積極的にボランティア活動を始め、新入生も主体的に参加し地域の高校としての動きが始まりました。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大は、その後も収まることなく、本事業を推進するために計画していた1年生を対象としたアイデアソンは、感染拡大の影響に加えて台風による影響で、年度内の実施を断念せざるを得ない事態も発生しました。本年度は、生徒たちも教職員も振り回された感はありますが、そのなかでも各学年の教職員はより良い実践を目指し、生徒の持っている力を引き出すことができるよう工夫して取組みました。そして、黒潮町役場の担当者並びに各地区の区長さん方をはじめ、多くの地域の皆様のご協力を得ながら活動を積み重ね、本報告書の作成に至りました。

本報告書をご覧いただいた皆様からは、忌憚のないご意見・ご助言・ご指導をいただくことで、令和3年度以降の活動をさらに発展・充実させていきたいと考えていることをお伝えして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和3年3月吉日

# 目 次

## I 巻頭言

II 本校の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

III 令和2年度 研究開発の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

IV 令和2年度 研究開発実施状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

V 探究活動の柱となる科目のカリキュラムと再構築に向けた取組・・ 24

1 「地域学」における各学年の取組・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

(1) 「地域学」における各学年の年間カリキュラム・・・・・・ 24

(2) 「地域学」における展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

2 「総合的な探究の時間」における各学年の取組・・・・・・・・ 34

(1) 「総合的な探究の時間」における各学年のカリキュ  
ラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

(2) 「総合的な探究の時間」における展開・・・・・・・・・・・・ 37

VI 活動の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

1 地域と連携した活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

2 先進校視察等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

3 アンケート結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

VII 次年度に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

補足資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

## Ⅱ 本校の概要

1 所在地 〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野 5507

### 2 学校の基本理念

(1) 校 訓：「自主」・「努力」・「創造」

#### (2) 目指す学校像

- 生徒を力を持った存在と認識し「意欲を引き出す」ことができる学校
- 人権教育を基盤とした「開発的な生徒指導」を推進することができる学校
- 保護者や地域から信頼され「通わせたい」と思われる学校

#### (3) 学校教育目標（目指す生徒像）

- 授業を大切にし、「意欲を持って学習することができる生徒」の育成
- 目標や志の実現に向けた「進路選択を行うことができる生徒」の育成
- 自己指導能力を身につけ「努力することができる生徒」の育成
- 自己の成長や地域への貢献に「力を発揮できる生徒」の育成

#### (4) 教育方針

- ユニバーサルデザインの授業展開による学力の定着
- 生徒の「意欲を引き出す」生徒指導の推進
- 社会の一員として責任を果たすことができる社会力の育成
- 「夢」や「志」を持たせる指導の充実と、目指す進路を実現できる指導の推進
- 故郷を大切に思う生徒の育成に向けた地域との連携

### 3 コミュニティ・スクールとしての特色ある取組

#### (1) はじめに

本校は、高知県西部（幡多地域）に位置し、太平洋に開けた入野の砂浜がある自然豊かな地域に立地している。

変遷を見ると、当初は高知県立中村女子高等学校大方分校として設立許可を受け、普通科と被服別科を併設した学校として昭和 23 年度に開校を迎える。その後、昭和 24 年度に高校再編により高知県立中村高等学校大方分校と改称し、昭和 38 年度には全日制商業科を併設する。

そして、昭和40年度に大方商業高等学校(全日制的の課程)として独立し、平成17年度の県立高等学校再編計画第1次計画(平成15年11月県教育委員会策定)に基づき、高知県立大方高等学校(通信制を併置した多部制単位制普通科高校)として開校する。この時は、大学のように生徒一人ひとりが自分の進路希望や興味・関心にもとづいて教科・科目を選択できるようにするとともに、学校設定科目を位置づけた新しいタイプの学校づくりを目指して設立され



大方商業高校開校記念の碑

た。平成29年度には、県立高等学校再編振興計画「後期実施計画」（平成26年10月県教育委員会策定）にもとづき、定時制・通信制を併置した全日制単位制普通科と課程転換され今日に至っている。

本校が立地している黒潮町は、平成24年に内閣府が公表した「南海トラフの巨大地震による震度分布・津波高の推計（第一次報告）」において、日本で一番高い約34mの津波が来る町として公表された自治体である。本校は、標高約21mの高台に立地しており、校舎の3階・4階からは入野松原と太平洋が一望でき、海風が心地よく感じられる場所に建っている。



屋上からの景色

平成17年の開校の翌年から、コミュニティ・スクールとして地域密着型の取組を、「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」のなかで、地域の方々の協力を得ながら展開してきた。本校を中心として徒歩5分以内の距離に、

保育所、小学校・中学校が立地しており、交通安全教室や避難訓練等を合同で実施するとともに、キャリア教育の推進においても合同発表会を行うなど、地理的環境を生かした異校種間の連携を行っている。また中学校とは、サッカー部と陸上競技部が定期的に合同練習を行っている。

近年は地域内の児童生徒数の減少に伴い、本校は開校以来、毎年定数未充足の状況となっており、令和2年度の生徒数は80名（全日制課程：3月1日現在）の小規模な学校である。また、厳しい環境の生徒も存在し、高知県西部地域のセーフティネット校的な役割を担っている学校でもあるが、黒潮町との連携を積極的に進め、近年は防災教育の推進を学校の中核として位置づけ、様々な教育領域と関連づけながら展開している。

## （2）特徴的な取組

### ア 「コミュニティ・スクール」としての位置づけ

平成18年度からコミュニティ・スクールの指定を高等学校として全国で初めて受け、地域住民や学識経験者らからなる「大方高等学校学校運営協議会」を設置し、年間3回の協議会を開催している。協議会の内容はホームページ上で紹介するとともに、協議だけではなくワークショップの導入や、生徒会の生徒を交えて学校の魅力化策等について考えることも行っている。

### イ 異校種間で取り組む「ふるさとキャリア教育」

本校は、立地する地域に保育所、小学校・中学校あり、それぞれが5分以内で行き来ができることから、いくつか合同の取組を行っている。なかでも、令和元年度からスタートした「ふるさとキャリア教育」においては、「黒潮町まるごと教育祭」と銘打って、各学校が地域をフィールドとして展開する「総合的な学習・探究の時間」他の取組について、ブースを構えて発表している。



ふるさとキャリア教育の開会式

またこの発表会には、地域の事業所も取組の発表を行い、学校と地域が連携する機会になっている。



## ウ 3つのコースからなる特色化

本校は教育課程に3つのコースを設けており、生徒たちは各コースに応じた教育課程のなかで学んでいる。

文理コース（進学コース）：国公立大学・私立の4年制大学や短期大学への進学を希望する生徒が在籍しており、1・2年生は週2回「黒潮町進学塾 コンパス」において進学補習を受けている。

商業・情報コース：本校の前身は、高知県立大方商業高等学校であり、商業に関する学科を保持していた。その流れを受けて、このコースでは公認会計士や簿記の資格取得を目指す生徒、資格検定への合格を目指す生徒が在籍している。

地域創造コース：本校の校旗（ソピアの旗）の愛称である「ソピア」という学校設定教科に位置づけられている科目として「地域学」があり、1年次は「地域学入門」（2単位）・2年次は「地域学Ⅰ」（2単位）・3年次は「地域学Ⅱ」（4単位）を履修している。このコースでは、地域理解と防災活動を特色とする学習をとおり、地域人材・防災リーダーの育成を目指している。

### 文理コース

文理コース【進学コース】													教育課程（例）		
1年次	国語総合	現代社会	数学Ⅰ	生物基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅰ	家庭基礎	社会と情報	数学A	音楽Ⅰ	ソピアⅠ	探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動
2年次	現代文B	数学Ⅱ	数学B	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	英語表現Ⅰ	日本史B	古典	科学と人間生活	ソピアⅡ	探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動	
3年次	国語表現	体育	世界史A	政治経済	コミュニケーション英語Ⅲ	古典	倫理	数学演習	国語演習	英語演習	地歴演習	探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動	

### 商業・情報コース

商業・情報コース【資格取得コース】													教育課程（例）		
1年次	国語総合	現代社会	数学Ⅰ	生物基礎	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅰ	家庭基礎	社会と情報	簿記	ソピアⅠ	探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動	
2年次	現代文B	財務会計Ⅰ	科学と人間生活	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅱ	世界史A	地理A	原簿計算	数学A	ソピアⅡ	探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動	
3年次	国語表現	体育	数学Ⅱ	コミュニケーション英語Ⅲ	英語表現Ⅰ	英語会話	財務会計Ⅱ	管理会計	書道Ⅰ			探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動	

### 地域創造コース

地域創造コース【人材育成コース】													教育課程（例）			
1年次	国語総合	現代社会	数学Ⅰ	生物基礎	体育	保健	コミュニケーション英語基礎 英語トレーニング	家庭基礎	社会と情報	地域学入門	美術Ⅰ	ソピアⅠ	探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動	
2年次	現代文A	表現のとびら	数学トレーニング	科学と人間生活	体育	保健	コミュニケーション英語Ⅰ	化学基礎	世界史A	ライフセービング	地域学Ⅰ	マーケティング	ソピアⅡ	探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動
3年次	教養国語	体育	地理A	フードデザイン	情報処理	英語表現Ⅰ	広告と販売促進	ビジネス実務	教養数学	地域学Ⅱ		探究の時間	総合的な学習の時間	ホームルーム活動		

### 各コースの教育課程

## エ 学校設定科目を中心とした防災教育の推進

本校の防災教育は、地域創造コースにおける「地域学」・「ライフセービング」での学習活動と、全学年を対象とした「生徒防災委員会」の生徒たちによる活動、黒潮町情報防災課や各地区の区長さん方と連携した活動を行っている。

なかでも、学校設定科目である「地域学」を履修している生徒たちは、各年次のテーマに基づき、聞き取り調査や実地訓練、シミュレーション等を行い、その結果分析や振り返りをした内容を地域住民にフィードバックしている。

近年は、人権教育との関連づけも進み、高齢者・障害者の人権ともリンクさせながら福祉避難所運営や福祉避難所と本校の避難所との連携に係る訓練等も行っている。また、自然災害から守りたいものをテーマとした活動では、「未来へのメモワール」と題して一人ひとりが未来に残したいもの、大切にしたいものを明確化し、「なぜ」それを残したいのか？それにはどのようなエピソードがあるのかなどについて聞き取りを行い、地域の新たな魅力発見にもつなげようとしている。

#### オ 「自律創造型地域課題解決学習」と「起業家精神」の育成を目指す総合的な学習の時間の展開

本校は開校以来、「総合的な学習の時間」において地域の課題を解決するための学習を行ってきた。特に2年次では「ミッション」と銘打った「自律創造型地域課題解決学習」に取り組むことで、「アントレプレナーシップ」（起業家精神）の育成を目指してきた。

「ミッション」の遂行においては、地域に生徒を出し各事業所との連携・支援のもとで生徒の主体性を大切にしながら展開してきた。「ミッション」のなかから、黒潮町の「黒塩」や高知県の特産であるカツオのたたきを活用し、野菜とタルタルソースを挟んだ「カツオたたきバーガー」などの商品を開発してきた。その他にも地元のジーンズ制作業者である「有限会社いんず工房大方 (isa)」とのコラボによるTシャツ作成、黒潮町のグリーンレモンを活用した「グリレモコッタ」（グリーンレモンジュレをのせたパンナコッタ）の商品化などの取組がある。



カツオたたきバーガー



黒潮町の黒塩



グリレモコッタ

これらの商品を開発した生徒たちは、開発における試行錯誤に加えて地元事業所への売り込みや町内外での販売活動の展開等を行い、多くの人との出会いをとおして成長するとともに活動をとおして達成感を味わうことができている。

#### カ 外部人材を積極的に活用する「開かれた学校」づくり

本校は積極的にコーディネーターや自治体などと連携し地域に「開かれた学校」づくりを行っている。防災教育の面では京都大学大学院矢守研究室（以下、「矢守研究室」という）の支援を受けながら展開するとともに、防災学習アドバイザー・コラボレーターの諏訪清二氏、AMDA中学高校生会、JICA等との交流等も行っている。

教科指導においても手話指導講師や防災植物講師、福祉従事者などを積極的に活用するとともに、本年度からは学校内に公設の進学塾を開講し、(株)土佐塾の方が生徒の指導を行って



る。さらに、部活動においても、(一財)セレッソ大阪スポーツクラブから女子サッカー部に監督を派遣してもらうなど、外部人材の積極的な活用を図っている。

また、本校の魅力化・特色化の推進に向けて、「黒潮町と高知県立大方高等学校の防災・課題解決を担う未来の『地域の創り手』人材の育成に係る協定書」を締結し、黒潮町と協働した取組をさらに進めるための教育環境を整えた。

### Ⅲ 令和2年度 研究開発の概要

#### 1 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	こうちけんりつおおがたこうとうがっこう					
令和2～最大3年間	①学校名	高知県立大方高等学校				②所在都道府県	高知県
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	1学年80名定員。教職員数27名 (2020年4月1日現在)	
普通科	27	32	21		80		
⑥研究開発構想名	「地域密着型の未来の“地域の創り手”人材の育成（ソピアの旗）プロジェクト」						
⑦研究開発の概要	<p>本校はこれまで、総合的な学習（探究）の時間において「自律創造型地域課題解決学習」を柱として位置づけ、コミュニティ・スクールの強みを生かした取組を進めてきた。近年は学校設定科目である地域学において地域防災における課題解決に取り組んでいる。生徒たちは、地域に出て地域から学ぶことにより課題解決能力が身につけており、探究力の向上や地域貢献等への意欲も向上している。</p> <p>今後は本事業をとおしてつきたい力を育成するとともに、直接・間接にかかわらず郷土を愛し誇りを持った未来の「地域の創り手」となる人材の育成を目指す。そのため外部の専門家との連携をもとに、新学習指導要領で位置づけられている探究活動を推進し、効果的なカリキュラムの開発を行い、事業終了後も改善を進めながら効果的な取組を継続していく。</p>						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>学校設定科目における「地域学」で推進している町や地域と連携した「防災教育」と、「総合的な探究の時間」における「自律創造型地域課題解決学習」を本研究をとおして深化させ、「生徒の探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」の向上を図る。そのために、コンソーシアム等に町内の各分野の人材と町外の有識者を位置づけ、地域との連携・協働を含めたカリキュラム開発を行う。これらの取組をとおして、広い視野と高い志をもった人材を育成することに資するとともに、将来の地域課題の解決に力を発揮することができ、地域の新たな魅力を創造・発信できる人材の育成を目指す。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>本校が立地する黒潮町は、南海トラフ地震の際の想定において、最大津波高が34mになると推定されており、防災の推進は地域の存続において不可欠の課題である。また、高齢化と若年人口の減少の状況にあり町内への定着・労働人口の確保、町外からの支援人材を育成する必要がある。これらの課題に対して、将来黒潮町や周辺地域において居住し、地域を支える人材となる高校生の資質・能力の育成は大きな課題である。これまでも高校生の若い力と多様な角度からの発想にもとづき、解決策を提案していくことを進めてきたが、更なる効果を生み出すためには、コンソーシアムを核とした幅広い人材との連携のもとで、取組を深化させていく必要があると考える。</p> <p><b>ア 町内外の人材との出会いと交流の機会の創出による自己効力感や自己有用感の育成</b></p> <p>課題：高知県の西部地域という立地条件のため中央部から離れており、高等教育機関との関わりや県内外の取組への参加も限られているため、生徒の視野は狭いものになりがちである。また、本校に在籍する生徒のなかには、自信のなさや存在意義を見出せない生徒もいる。そのため、キャリア意識やアイデンティティの確立が十分ではなく、内向的な傾向にある。</p> <p>仮説：学校外の人材を積極的に活用し生徒と出会わせることにより、外からの刺激を生徒に与えることで多様な価値観を持たせることができ、自身の価値を感じることができると考える。また、学校外の場で生徒が発表したり、交流したりする経験を重ねるポ</p>					

		<p>ートフォリオにもとづく肯定的なフィードバックにより、自己有用感や自己効力感を育むことができる。</p> <p><b>イ 開校当初からのコミュニティ・スクールの強みを生かした、地域連携による生徒の地域理解と貢献への意欲の醸成</b></p> <p>課題：コミュニティ・スクールでありながら、多くの教育活動が学校だけで完結している感があり、地域の企業との連携も個々の事業所の課題解決で終わり、その後につながっていないという閉塞感が存在する。そのため、生徒が地域の将来像を描きにくく、町の未来を考えた発言や自身のキャリアイメージに関連づけた発言も聞かれないという状況である。</p> <p>仮説：地域との交流や各種発表の場に積極的に参加するなど、取組を地域内外に広げていくことをとおして、生徒が地域の将来イメージを持ち郷土愛を育むことができる。また、地域や外部人材と連携した取組をとおして、個々の資質・能力の伸長を図ることができ、直接・間接にかかわらず、地域の活性化や新しい価値の創造などに貢献できる人材を育成することにつながるることができる。</p>
⑧-2 具体的内容		<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>学校設定科目である「地域学」の時間を核として、地域防災・減災をテーマとした高校と地域との連携を進め協働関係を構築する。併せて、1年次から3年次までを、系統的につなぎ取り組んだ内容は地域内外に発信する。また教育課程外の活動では、高知大学との連携により、地域理解をもとにした防災ツアー等を企画し、生徒がガイドを務めることで発信力やプレゼンテーション能力等の向上を図る。</p> <p>総合的な探究の時間における「自律創造型地域課題解決学習」をもとに、アントレプレナーシップの精神の育成を目指して、町内の起業家の事例をもとに「ケーススタディ」を展開する。また、多様な視点や自己のアイデンティティの意識化、イノベティブ思考を育成するために「アイデアソン」に取組み、3年間の学びをとおして、これからの社会を生きていくために必要と思われる力の育成に努める。</p> <p>「地域学」や総合的な探究の時間において、各教科・科目のなかでの横断的な学びによる展開や、地域資源の活用・ゲストティーチャーによる指導等、外部人材を効果的に活用して、生徒の学びの促進を図る。</p> <p>これらの取組を推進するために、校外学習としてインターンシップや他校交流、研究者らとの交流等を行う。また、町役場への訪問や事業所・小中学校との交流、地域の行事への参加等を行い、広く学びの促進に資する。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>外部人材として雇用する「カリキュラム開発等専門家」と密に連携し、学校長をはじめとした校内組織においてカリキュラム開発を推進する。その際、事業統括主任（加配希望ポスト）と管理職や外部人材との連携、事業統括主任の研究の推進、校務分掌や教科横断的な取組の展開により、カリキュラム開発を推進する。</p> <p>作成したカリキュラムについては、取組をとおして振り返りシート、ポートフォリオ、ループリック等を活用し、生徒の成長を確認する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等      特例となる教育課程      必要なし</p>
⑨その他特記事項		<p>○平成23年 文部科学省「学校運営協議会」による地域連携の推進に関する表彰 受賞</p> <p>○平成31年 内閣府主催防災教育チャレンジプラン審査委員会「防災教育優秀賞」受賞</p> <p>○平成30年8月1・2日 平成30年度「第1回全国高等学校小規模校サミット」参加</p> <p>○令和元年7月30・31日 令和元年度「第2回全国高等学校小規模校サミット」参加</p> <p>○令和元年9月10・11日 「世界津波の日」高校生サミット2019in北海道 参加</p> <p>○令和2年度当初に、黒潮町と推進協定を結び。</p>

## 2 研究開発の実施体制

### ア コンソーシアムの構成

機関名	機関の代表者氏名
高知大学次世代地域創造センター	川村 晶子（客員准教授）
合同会社 Noks Labo	山崎 直子（代表）
京都大学大学院矢守研究室	杉山 高志（研究員）
黒潮町観光ネットワーク	森田 俊彦（会長）
黒潮町産業推進室	濱口 無双（産業推進係主任）
黒潮町教育委員会	橋田 麻紀（教育次長）
黒潮町立佐賀中学校	宮崎 宏治（校長）
黒潮町立大方中学校	浜口 和彦（校長）
高知県立大方高等学校	西村 優美（地域学校協働活動推進員）
高知県立大方高等学校PTA	桐島 由佳（会長）
高知県立大方高等学校同窓会	村越 麗（同窓代表）
高知県立大方高等学校	大西 雅人（学校長）
高知県教育委員会	伊藤 博明（教育長）

### イ カリキュラム開発等専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習実施支援員の体制

区分	氏名	所属
カリキュラム開発等専門家	杉山 高志	京都大学大学院矢守研究室・研究員
カリキュラム開発等専門家	川村 晶子	高知大学次世代地域創造センター・客員准教授
地域協働学習実施支援員	松田 真紀	大方高校地域学校協働活動推進員
地域協働学習実施支援員	西村 優美	大方高校地域学校協働活動推進員

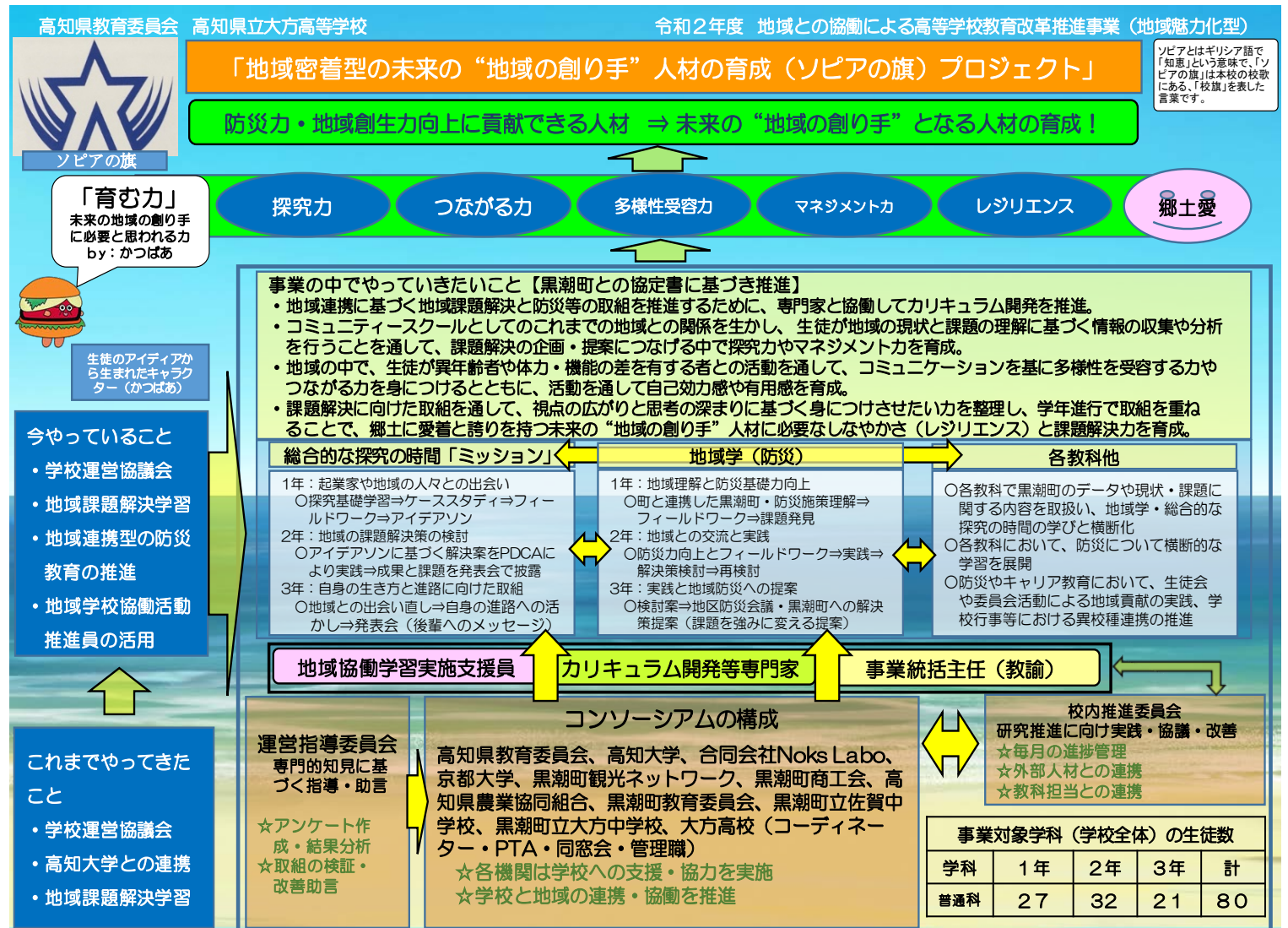
### ウ 運営指導委員会の体制

所属	役職	氏名
黒潮町教育委員会	教育長	畦地 和也
NPO 砂浜美術館	理事長	村上 健太郎
京都大学 人と防災未来センター	教授 上級研究員	矢守 克也
高知大学地域協働学部	准教授	石筒 覚
地域・教育魅力化プラットフォーム		田中 理恵
高知県教育委員会	教育長	伊藤 博明

### 3 「ソピアの旗プロジェクト」の全体イメージ

本研究では、「地域に定住」・「一度は地域外に出るがまた地域に戻って」・「地域外に出て戻ってはこないが、外から応援」する人材の育成を目指し、目的を未来の「地域の創り手」人材の育成として、地域の課題である「防災教育の推進」による「犠牲者0」の思想の実現・地域の「新たな価値の創造」に向けた探究活動を展開する。そして、探究活動をとおして郷土愛を育むとともに、「探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」の育成を目標として展開する。

本研究における中核は学校設定科目である「地域学」と「総合的な探究(学習)の時間」(以下：総合的な探究の時間)である。



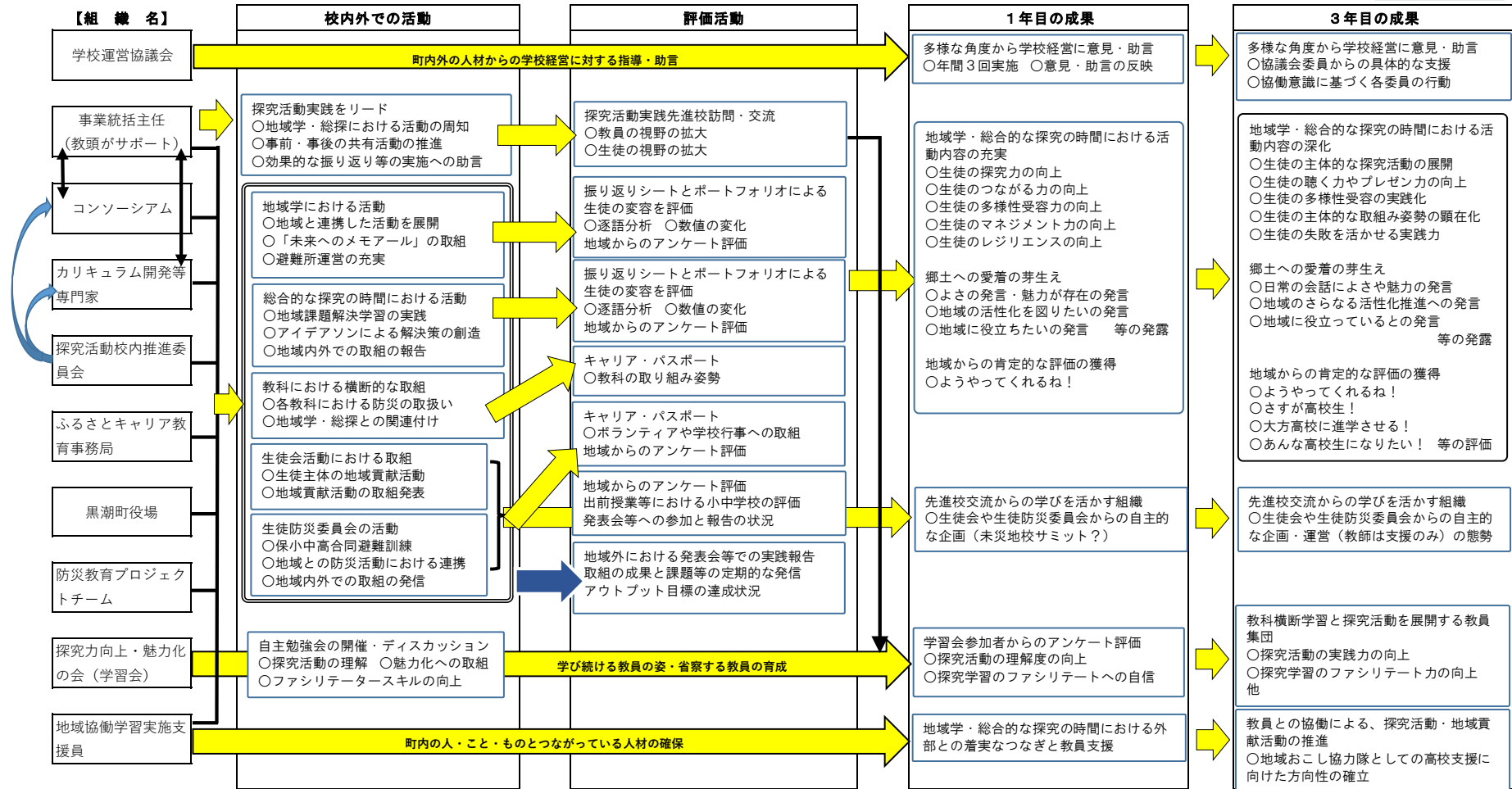


#### 4 「ソピアの旗プロジェクト」のロジックツリー

本研究におけるロジックツリーを以下に示しているが、研究の全体イメージに基づき探究活動や関連する取組を学校内外において展開することで、1年目の成果目標と最終年度の成果目標を設定した。また、その成果を確認するために、どのような評価活動を行うのかについても示している。

大方高校の探究活動における活動と成果の関係図 令和2年度版

4月28日作成



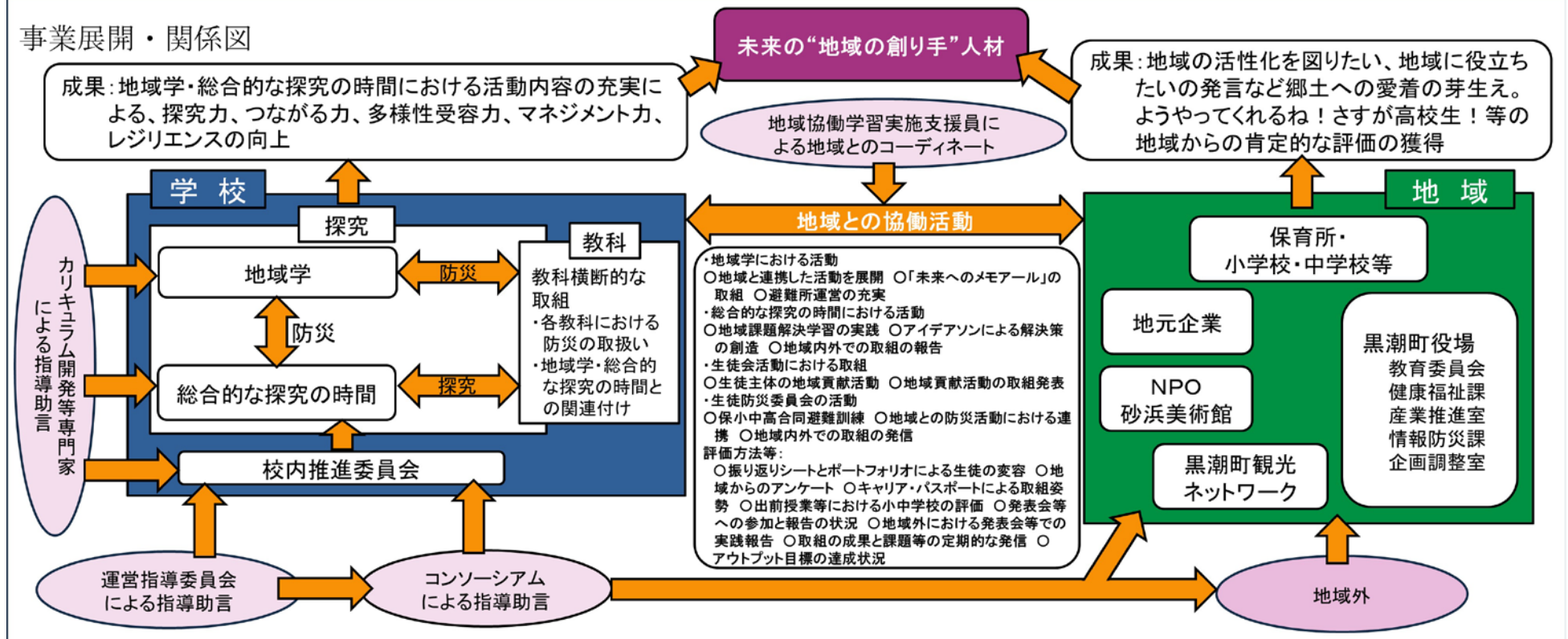
5 「ソピアの旗プロジェクト」の展開イメージ

大方高校「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」  
～未来の「地域の創り手」人材の育成（ソピアの旗プロジェクト）～

事業の目的と目標

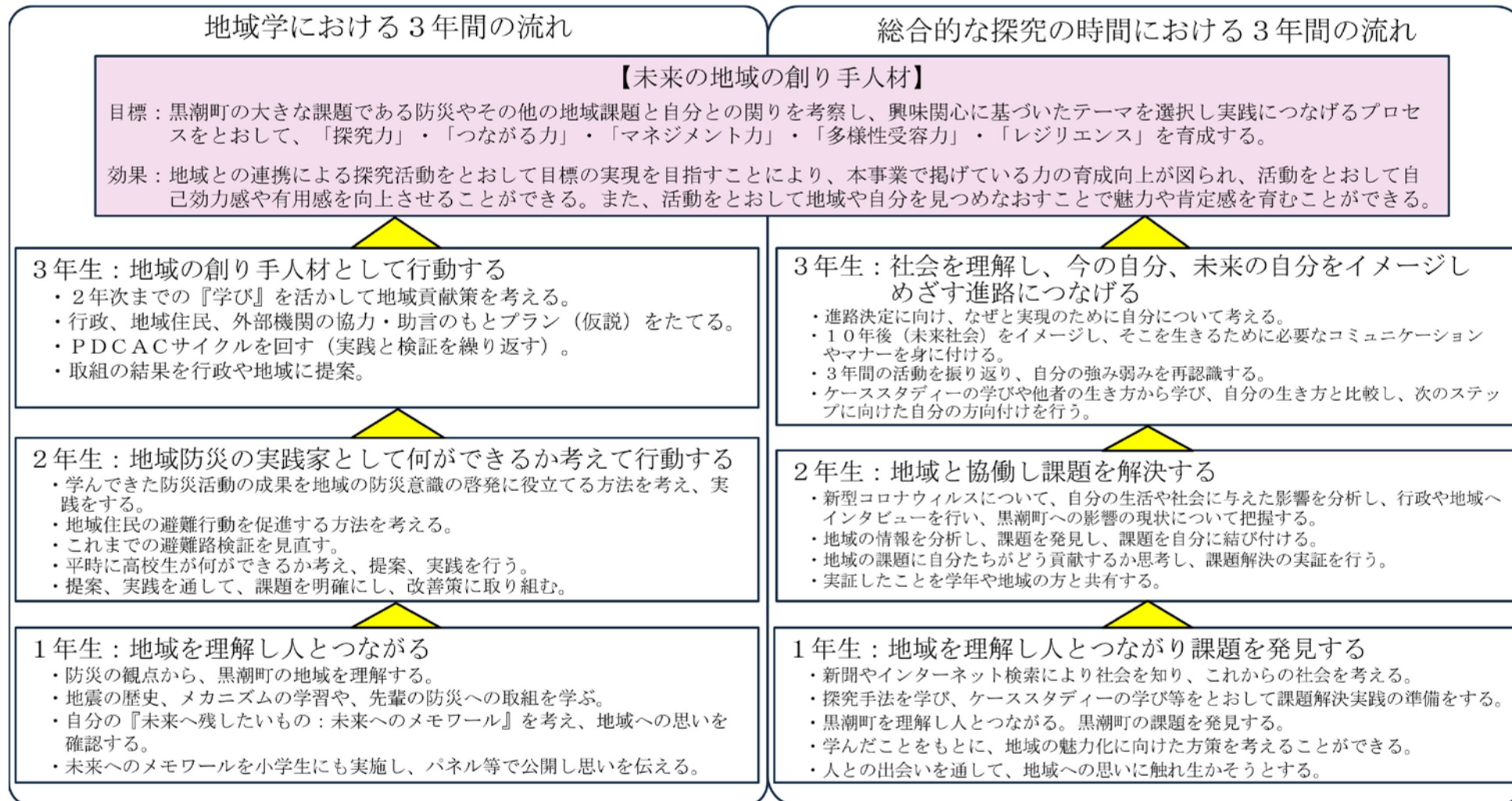
- 1 目的：防災力・地域創生力向上に貢献でき、直接・間接に関わらず郷土に愛着と誇りを持った未来の“地域の創り手”となる人材の育成
- 2 目標：地域への愛着や誇りを持ち、未来の地域を支えるために必要な力の育成につなげるために、探究力、つながる力、多様性受容力、マネジメント力、レジリエンスの向上

事業展開・関係図



6 「ソピアの旗プロジェクト」の3年間のイメージ

地域学と総合的な探究の時間の3年間の流れ（探究力の向上と実践力の向上）（令和2年度）





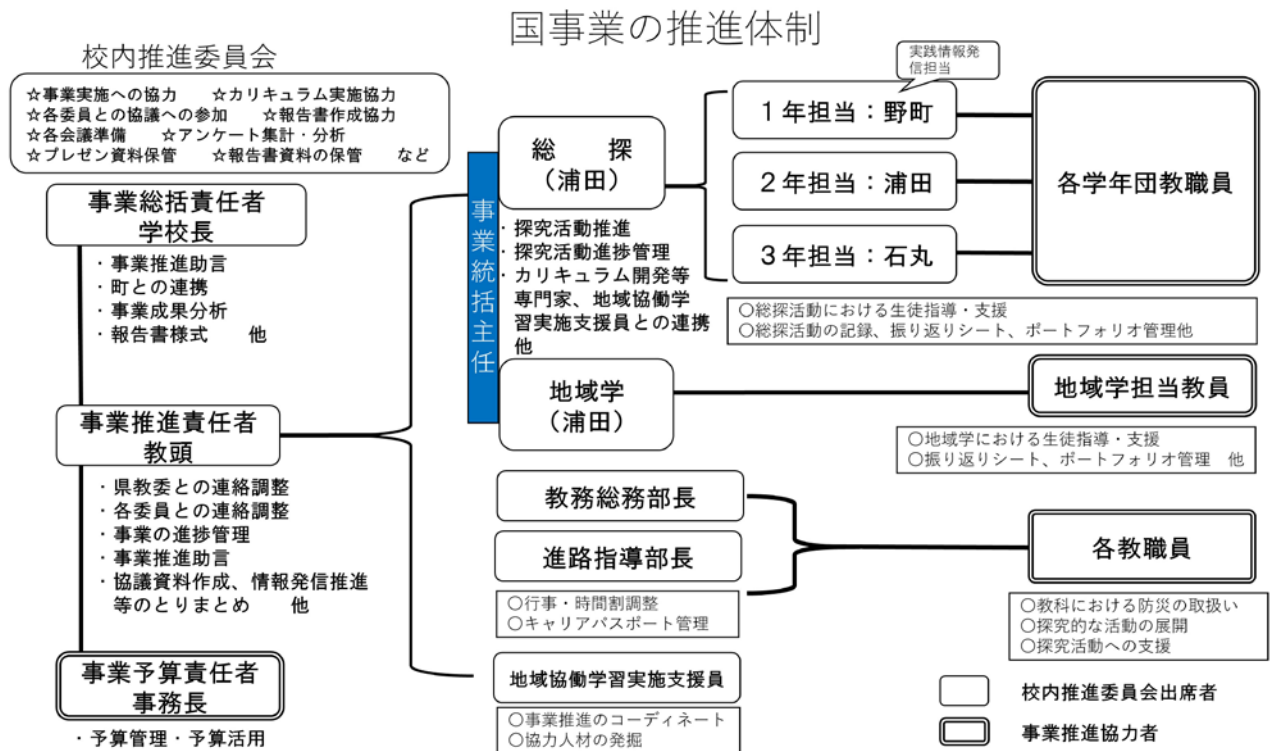
## IV 令和2年度 研究開発実施状況

### 1 ソピアの旗プロジェクトの推進体制

本プロジェクトを推進するにあたり、「地域学」と「総合的な探究の時間」の担当教員だけで展開するのは荷が重く、展開においては学年団で動くことや、学校全体で動くことが必要になる場合もあることを考えて、下記のような校内推進体制を整えた。

そして、「校内推進委員会」を毎月開催し、「地域学」と「総合的な探究の時間」の担当教員と事業の進捗状況や推進上の課題を共有し、スムーズな展開や改善に向けた協議を行うこととしている。また、「校内推進委員会」には地域協働学習実施支援員の参加も要請し、事業推進において教員とは異なる立場から意見をもらうこととした。

年度当初の4月に一度「校内推進委員会」を開催したが、新型コロナウイルスの影響を受け、休校措置や教職員の在宅勤務期間が入ったため、2回目の「校内推進委員会」は7月まで開催できなかった。しかし、事業推進責任者と「地域学」と「総合的な探究の時間」の担当教員との定期的な打ち合わせ会を設定し事業の進捗管理を行ってきた。



### 2 校内推進体制と事業担当者会

#### (1) 校内推進委員会

校内推進委員会は、毎月開催し「地域学」と「総合的な探究の時間」における進捗管理と課題の共有・解決等の協議をする場として設定している。また、地域協働学習実施支援員やカリキュラム開発等専門家にも同席してもらい、生徒たちの活動の様子を見てもらったうえで助言をもらうことを考えていたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響もあり、今年度はそのような形にはならなかった。そのため、4月は学校内の関係者で開催したものの、5・6月と開催できず、7月になって第2回目の校内推進委員会を開催した。本格的な活動は、第1回運営指導委員会とコンソーシアム委員会が開催されることに合わせて動き始めることとなる。

また、校内推進委員会を開催したが、何をやるのかが明確にならず、協議内容を他の教職員と共有することが十分できなかった。

校内推進委員会における協議内容については、次ページのとおりである。

月 日	内 容
4月 22日	事業内容の確認・事業担当者以外の委員の役割について確認 休校中における事業推進に向けた準備やオンライン会議の日程等の確認
7月 31日	事業推進スケジュールと役割の確認 第1回運営指導委員会の振り返りと総合的な探究の時間の進捗状況の共有、生徒に対する教員の関わり方等についての意見交換 学年会でもっと細かい個別のゴール設定が必要であることが出されたこと、コーディネーターとどうつなぐかなどについて意見交換
8月 25日	総合的な探究の時間における各活動の評価についての協議を行い、ループリック評価案を提示 年度当初に確認ができていなかったため、本年度はできるところからループリック評価を行うことを確認
8月 30日	第1回コンソーシアム委員会の振り返りと総合的な探究の時間の進捗状況の共有 推進上の課題となっている評価についての共通理解 生徒のパフォーマンス評価が十分ではないため、単元ごとのパフォーマンス評価が必要であるという意見や、ループリック評価ができていないままでのスタートのため、年度当初に生徒への提示を行い、次年度の取組を指導と評価の一体化が図れるようにすべきことを確認
10月 21日	地域協働学習実施支援員とカリキュラム開発等専門家を含めての校内推進委員会を初めて開催 カリキュラム開発等専門家はオンラインでの参加となるが、取組状況の共有と今後の課題についての意見交換
11月 18日	3年生のケーススタディの発表会の終了後に開催 学年ごとの取組のねらいの再確認や工夫していること、生徒の成長等について共有。地域学における生徒の活動の様子、成長、気づきを今後どのように展開しようとしているか等について報告
12月 11日	三崎高校訪問の振り返りと共有
12月 25日	地域協働学習実施支援員とカリキュラム開発等専門家を含めての校内推進委員会を初めて開催 対面とオンラインによる協議 各担当者から事業の進捗についての説明と併せて、カリキュラム開発等専門家からの助言 各担当者からの質問に基づき意見交換
1月 8日	運営指導委員会に向けた協議題の検討と各学年の進捗状況と課題の共有
2月 5日	運営指導委員会では出された意見や助言の再確認と、第3回コンソーシアムに向けた内容の協議 カリキュラム開発等専門家訪問に向けた確認事項と本年度の課題の共有

## (2) 事業担当者会

担当者会では、「地域学」と「総合的な探究の時間」における進捗状況の確認やカリキュラムの展開についての確認、探究活動に関する研修会の計画立案、ケーススタディやアイデアソンに向けた確認等を行った。

担当者会においても情報交換や次のスケジュール共有が中心となり、指定事業の効果的な推進や生徒に身につけさせたい力をどのようにして獲得させるか、教科横断の取組の状況がどのようになっているのか、効果測定のためのアンケートの実施や分析をいつ行うのかなどを確認するなど、計画的な内容を協議する会議にはならなかった。そのため、タイムリーな調査や、分析に基づく手法やアプローチの改善等について、よりよい取組にしていく協議は十分ではなかった。

事業担当者会における協議内容については、以下のとおりである。

月 日	内 容
6月 5日	総合的な探究の時間における各学年の年間計画の進捗状況を共有
6月 15日	現状の共有とコロナ禍での予定変更等の確認
6月 19日	現状の共有と今後の計画に向けた確認と意見交換
6月 29日	現状の共有と取組状況の確認、探究に関する校内研修に向けた講師との確認内容を共有
7月 3日	7月1日に実施した探究に関する校内研修についての振り返り 講師のカリキュラム開発等専門家である川村晶子氏（高知大学次世代地域創造センター客員准教授）から伝えられたキーワードとなる言葉を確認するとともに、大正大学教授の浦崎太郎氏の言葉などを共有して、今後の取組に活かすことを確認



7月10日	現状の共有と進捗状況の確認
7月17日	第1回運営指導委員会における協議テーマの検討や運営についての意見交換
7月20日	3年生のケーススタディの進め方と、1年生のアイデアソンの進め方についてカリキュラム開発等専門家との協議
8月21日	第1回コンソーシアム委員会における流れと、各学年団担当からの取組状況の説明内容についての確認
8月28日	第1回コンソーシアム委員会の進行の最終確認、ケーススタディ、アイデアソンの準備や進め方についての協議
9月2日	ケーススタディの進め方について共有 1年生のアイデアソンに向けて、9月にミュージアムについての探究活動→10月にアイデアソン（ミュージアムをデザインする）→各自・グループのテーマ設定の流れを確認
9月7日	現状の共有と校内アンケートの内容についての最終確認
9月11日	校内アンケートの実施について確認
9月18日	3年生のケーススタディの推進状況・1年生のアイデアソンについて計画について確認
9月28日	3年生のケーススタディにおけるケースのモデル招聘と、生徒の質問事項や内容の進捗状況を確認
10月9日	各学年の進捗状況の共有と今後の方向性や課題を共有し、スムーズな実践につなげるよう意見交換 3年生のケーススタディの聞き取りを行うグループ編成や順番、記録計画等について共有
10月19日	ケーススタディのモデルへの前半組の聞き取りについての振り返り 今後の計画の確認と各学年の工夫等について共有
10月26日	ケーススタディのモデルへの後半組の聞き取りについての振り返り アイデアソンに向けた外部支援者との交渉状況を確認
10月30日	高校魅力化評価システムの結果をもとにした分析の実施
11月9日	進捗状況の確認 3年生のケーススタディと1年生のアイデアソンについて
11月13日	進捗状況の確認 3年生のケーススタディ発表会と1年生のアイデアソンについて
11月20日	進捗状況の確認 3年生のケーススタディ発表会の振り返り 三崎高校訪問について（質問事項等の確認） アンケートについて 1年生のアイデアソンについて
12月4日	高校魅力化評価システム組織診断ポートフォリオの分析と課題の共有・方向づけの確認作業を実施
12月14日	進捗状況の確認と第2回コンソーシアム委員会
12月21日	進捗状況の確認とアンケートの分析
1月6日	第2回コンソーシアム委員会の内容協議と次年度の計画協議
1月15日	進捗状況の確認と第2回コンソーシアム委員会の振り返り、第2回運営指導委員会の協議内容
1月25日	進捗状況の確認と本年度の課題についての共有
2月4日	カリキュラム開発等専門家の川村晶子氏との協議に向けた協議内容の確認
2月15日	進捗状況の確認とカリキュラム開発等専門家の助言・意見に基づく次年度のカリキュラム編成についての検討
2月22日	第3回コンソーシアム委員会と次年度のカリキュラムと報告書について

### 3 運営指導委員会とコンソーシアム委員会

#### (1) 運営指導委員会

第1回運営指導委員会は7月27日に、第2回運営指導委員会は2月2日に開催した。

回	出席者	会次第・協議内容
第1回	〈委員〉 石筒 覚 委員 田中理恵 委員 村上健太郎 委員 矢守克也 委員 畦地和也 委員（欠席） 〈学校〉 大西雅人 校長 上原 健 教頭	○開会行事 ○会長・副会長選出 ○令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業の取組についての説明 ○協議

	浦田友香 教諭 石丸滉貴 教諭 野町純一 実習助手 北村清土 教諭 土居美都里 教諭 松田真紀 地域協働学習実施支援員 西村優美 地域協働学習実施支援員 〈管理組織〉 高野和幸 高等学校振興課長 市原則和 チーフ 中越啓介 指導主事	1 生徒の意識に火をつけ、教員も意欲的にかかわるために必要なことについて 2 多様な生徒に対する探究活動の支援について 3 「総合的な探究の時間」の少ない時数で探究活動を効果的に進めるために必要なことについて 4 その他 ○閉会
第2回	〈委員〉 畦地和也 委員 石筒 覚 委員 田中理恵 委員 村上健太郎 委員 矢守克也 委員 (欠席) 〈学校〉 大西雅人 校長 上原 健 教頭 浦田友香 教諭 石丸滉貴 教諭 野町純一 実習助手 北村清土 教諭 土居美都里 教諭 松田真紀 地域協働学習実施支援員 西村優美 地域協働学習実施支援員 〈管理組織〉 原 貴 高等学校振興課長補佐 市原則和 チーフ 中越啓介 指導主事	○開会行事 ○令和2年度の取組についての説明及び次年度以降の取組について ○協議 1 生徒が設定した課題と地域のニーズには、合致するものと、ギャップがあるものがある。生徒の課題と地域のニーズにギャップがある場合は、生徒の地域課題へのリサーチや地域の方々との協議が不足していることが一因と考えられるが、そのようなときに教員はどのような助言や工夫をすればよいか。 2 関心意欲が引き出しにくい生徒が課題を自分事として捉えるよう工夫している。例えば、自分自身と向き合わせるため、また自分で思考させるために個人の活動をあえて多くしている。また、自分の生活や生き方に落とし込むことについては、生徒が得意な教科や部活動、防災の取組など自分の強みや環境に関連づけることができるように教員がアドバイスを行っている。さらにより良いものにするために、他校の取組で生徒が主体性を持って取り組んでいる例があれば、どの様な工夫がされているかご教示いただきたい。 ○閉会

第1回は、前半は県教育委員会から本事業の概要説明を行うとともに、学校側から事業をどのように進めていくのかについて、ゴールイメージ・実現に向けたカリキュラム・効果測定としての評価方法などについての説明を行った。

後半は表中の3つの項目を挙げ、運営指導委員からの意見をもらった。各委員からはそれぞれが関連するというので、項目を分けることなく協議を進めた。

以下、各員の発言の概要を示す。

- 取組のなかで生徒の意欲をどのようにして図るのか。ルーブリックなどの作成はあるのか。
- 生徒と教員は活動の視点が異なる。活動のなかで教員がどう生徒にかかわっていくのかが重要。
- 伸び伸びやることが重要。枠を気にしすぎないこと。評価疲れにならないように。
- 教員が夢中になっていることは生徒も乗りやすい。そうではないことには生徒も乗らない。
- 教員に火がつかないと生徒には火がつかない。楽しみ方、楽しむための方法を考える必要がある。
- 体験・出会い・気づきのスイッチは多様にある。高校までの生徒の経験値も大きい。生徒との対話のなかから引き出すことが重要。
- 課題の引き出しは多様。オールOKで行こう。否定をしない。
- ゴール設定は解決を目的としたものではなく、プロセスを拾うことを目指す。プロセス重視を。

- 生徒に役割を与える。役割を考えておく。個人差を活用する。
- 認める行為がたくさんある生徒たち。小さな行為でも認められること。
- 振り返りの実施により、取組の共有化を図ることを大切に。生徒が振り返りで互いの成長を確認し合えるように。
- 協議事項は3年間続くものになると考える（探究支援の変容・教員の支援力の向上）。途中経過をまとめながら、担当者が細かい意見を交わせるように。

第2回は、学校側から「地域学」と「総合的な探究の時間」の本年度の取組について、各担当が報告を行った。そのうえで、現段階における次年度の取組の方向性について示した。続いて、高校魅力化評価システムアンケートの結果報告を行った。

後半は2つの項目をあげ、本事業をより良いものにするための協議を行った。

以下、各員の発言の概要を示す。

- プログラムはいいが、どれだけできているか。
- 自己認識・行動認識が低い。プログラムで高めるような内容・構成になっているか。
- 課題設定においては、生徒側と地域側のすり合わせ（Win-Winになるよう）が必要。
- 被災地（岩手県野田村）と未災地のつながりは大切に。相手側は「伝えたい」の思いがあると思われるので、つながることで互いのニーズが合うと考える。
- 黒潮町のアクションプランは、担当課と直接話をしてみてもどうか。
- 3年生はこれから社会に出るだけに、社会との接点が必要。濱町氏（ケーススタディにおけるケースモデル）との出会いは良い経験になると考える。
- 次年度のプログラムについては、進学してくる中学生を意識して再構築する必要があると考える。
- 学校の取組は魅力的である。教職員の思考の積み重ねが重要。蓄積が重要である。
- 「身近な」というキーワードがあった。地域の事業所の掘り下げも必要ではないか。事業所の掘り下げが、「身近な」につながるのではないか。
- アンケートの結果に基づき、グランドデザインやループリックの見直しが必要と考える。島根県では全校がループリックに基づく評価を行っている。大方高校の生徒だからここを伸ばしたいという項目に絞った取り組みも考えられる。活動の目的は何かに基づき活用するツールを考える必要がある。
- 意欲の上積みが必要だということである。メタ認知の機会を取ることが不可欠である。活動をとおして自分を客観視する取組が必要である。振り返りの場面を確実に確保する。生徒が自分の学びによる成長を確認できるように時間を確保する。
- 地域課題と自分事との結びつけ。地域課題の設定・評価と自分の興味・関心を行き来しながら、生徒はテーマを考えていくが、自分事になるためには行き来する場面に大人の関わりが不可欠である。大人が子どもの興味関心を引き出すために、思いを伝えることも重要。そのことで子どもが「この人に喜んでもらいたい」という思いを持ち、初めて自分事になっていく。そのような出会いを1年次からどのように設定し、結びつけていくかをプログラムにしてはどうか。探究活動において、よくある教職員側の課題が「やらされ感」「時間不足」「アイデアへの口出し」である。「やらされ感」を生徒に感じさせないためには、なぜその課題なのかという問いかけを生徒に対してどれだけできるか、深められるかにかかっている。「時間不足」は教員側のファシリテーション力の課題もあるが、教科横断による取組で同時並行的に進めるカリキュラム・マネジメントが必要である。横断化によりチームビルディングに基づく力の育成を図る必要がある。「アイデアへの口出し」は教えるのではなく、引き出すというファシリテーションを行う必要がある。
- 小規模校ゆえのメリットを生かして。小規模校は同質性が高いという課題がよくあげられるが、同質性が学校内で高ければ、異質性が高い地域に出し、大人と話し合う場を設定すればいい。異年齢での話し合う場を設定することが必要である。
- 取組は積極的にできている。アクションプランについては、黒潮町の各課の担当者呼んで生徒に話を聞かせたらよいと思う。生徒たちを地域に出すというのは効果がある。生徒たちは外に出ることで、答えの無い課題との出会いを経験するようになる。
- 探究や課題解決学習を「なぜやるのか？」の議論が不可欠である。探究活動を行うことで、

君たちのこんな成長につながる。こんなことができるようになるについての共有化を行う必要があると考える。

(2) コンソーシアム委員会

8月28日に第1回、1月12日に第2回、3月15日に第3回を実施した。  
各コンソーシアム委員会の内容については、以下の表のとおりである。

回	出席者	会次第・協議内容
第1回	〈委員〉 川村晶子 委員 山崎直子 委員 杉山高志 委員 森田俊彦 委員 濱口無双 委員 橋田麻紀 委員 宮崎宏治 委員 西村優美 委員 桐島由佳 委員 村越 麗 委員 大西雅人 委員 〈学校〉 上原 健 教頭 浦田友香 教諭 石丸滉貴 教諭 野町純一 実習助手 北村清土 教諭 土居美都里 教諭 松田真紀 地域協働学習実施支援員	○開会行事 ○会長・副会長の選出 ○事業の実施計画について ・全体計画 ・令和2年度の計画 ○運営指導委員会の概要報告 ○協議 ・事業を効果的に展開するために ・生徒の興味や関心に応えるために ○閉会行事
第2回	〈委員〉 川村晶子 委員 山崎直子 委員 杉山高志 委員 森田俊彦 委員 濱口無双 委員 橋田麻紀 委員 宮崎宏治 委員 西村優美 委員 桐島由佳 委員 村越 麗 委員 大西雅人 委員 〈学校〉 上原 健 教頭 浦田友香 教諭 石丸滉貴 教諭 野町純一 実習助手 北村清土 教諭 土居美都里 教諭 松田真紀 地域協働学習実施支援員	○開会行事 ○事業の進捗状況報告 ・総合的な探究の時間（1・2年生） ・総合的な学習の時間（3年生） ・地域学（1～3年生） ・質疑応答 ○事業に係るアンケート結果の報告と考察 ・高校魅力化評価システム組織診断ポートフォリオ（三菱UFJリサーチ&コンサルティング実施） ○協議 ・コンソーシアムとの連携 ○閉会行事
第3回	〈委員〉 川村晶子 委員 山崎直子 委員 杉山高志 委員 森田俊彦 委員 濱口無双 委員 橋田麻紀 委員 宮崎宏治 委員 西村優美 委員 桐島由佳 委員 村越 麗 委員 大西雅人 委員 〈学校〉 上原 健 教頭 浦田友香 教諭 石丸滉貴 教諭 野町純一 実習助手 北村清土 教諭 土居美都里 教諭 松田真紀 地域協働学習実施支援員	○開会行事 ○事業の成果と課題 ・総合的な探究の時間（1・2年生） ・総合的な学習の時間（3年生） ・地域学（1～3年生） ○アンケート結果報告 ・質疑応答、意見交換 ○次年度カリキュラム ○次年度の展開とコンソーシアム委員への要望 ・協力を依頼する事柄 ○閉会行事

第1回は、本事業の目的・生徒に身につけさせたい力・総合的な探究の時間や地域学の時間において何をするのか、ゴールイメージは何かなどについて学校側から説明した。

また、第1回運営指導委員会における協議の内容を踏まえ、取組を充実させるために必要なことについて協議を行った。協議のなかでは、「事業を効果的に展開するために」「生徒の興味や関心に応えるために」をテーマとした。

前者については、事業の効果的な展開に向けて、学びや活動の振り返りを定期的に行うこと、アンケートにおける効果測定に際して、選択解答だけではなくなぜそれを選んだのかについて記載させる記述欄を設ける必要があるといった意見が出された。

後者については、生徒主体の必要はあるが、教員がどこまでかわかり、どのような役割やスタンスで臨むのかについて意見が出された。教職員が準備し主導するのではなく、生徒の興味関心があることを引き出したり、選択肢を示して自己選択と自己決定をさせたりするファシリテーターとしての役割を意識することが必要であるとの意見が出された。

また、カリキュラム開発等専門家と委員からのまとめの意見では以下のことが出された。

○部分部分での相談はあるが、今の総合的な探究の時間の全体が見えない。何が課題になっているのか。方向性がこれでいいのか。カリキュラムは進めつつ変わる、変えなければならぬ部分もある。課題解決学習は正解を求めるものではない。

○教員はかかわる存在。生徒の主体性と教員の介入のバランスが必要である。子どもと一緒に学ぼうとするスタンスが不可欠（放任ではない）である。

○評価も必要。定量的なものとは定性的なものを。アンケートは定量的なものが多いが、その選んだ理由を記述させる定性的なものが欲しい。

○企業人には評価軸がある。定性的なものとしては、「協力」・「チャレンジ」・「敬意（尊重）」の項目がある。それにもとづく評価をしている。どう評価軸をつくるか。

○コーチングにおける立ち位置は「口出しをしない」である。引き出すスタンス。「自由」「ゆだねる」「楽しむ」が必要である。変化を楽しむ。

○表現することについて教育界は言葉に限定するが、表現方法は多様である。定型ではない引き出しを持つこと、表現しやすくするために多様性を認めることが大切である。評価においては、要素や項目をスタート時に明示することが不可欠である。

第2回は、「地域学」と「総合的な探究の時間」における本年度の学年ごとの取組状況について各担当が報告を行い、質疑応答を行った。次に、高校魅力化評価システム組織診断の結果について報告した。

最後に、「コンソーシアムとの連携」をテーマに、各委員が学校と連携して行えることは何かについて協議を行った。協議の際に学校からこんなことができないかという提案をさせていただき、それに基づいて各委員から提案をもらった。各委員からは、以下のようなことが提案された。

○地域総合防災訓練を佐賀地区で、高校生がリーダーとなって推進することはできないか。

○防災学習プログラムを高校生と一緒にしてはどうか。

○10年後の未来を考える取組はどうか。アナリストの紹介やネット通信関係の人材を紹介することができる。オンラインでのやり取りを行うことも考えてみてはどうか。

○企業のプロジェクトの推進者、スパイスになる人材の紹介が可能である。

また、カリキュラム開発等専門家からは以下の助言をいただいた。

○「地域学」・「総合的な探究の時間」の双方がスクラムを組んだカリキュラム開発が必要である。来年度はそこを焦点にしたらどうか。

○次年度はカリキュラム開発をしっかり行うことで、生徒のパフォーマンスを向上につなげる必要がある。

○1年生から3年生までの長期的な実践が求められる。生徒が自分をメタ認知できるようになることが必要である。

○高校魅力化評価システムの質問57の「地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい」の回答率において、1年生の肯定的な回答が多いことに感謝している。取り組んでいることに対する一定の効果はあると考える。

○各学年の回答がプラスの方になることができるよう、カリキュラムの組み換えを考えてもらいたい。



#### 4 探究活動に関する研修会等

##### (1) カリキュラム開発等専門家との事業推進に向けた協議

###### ア 総合的な探究の時間におけるカリキュラム開発等専門家との協議

本校の総合的な探究の時間は、総合的な学習の時間からの流れを汲んでいる。高校再編により大方商業高等学校から大方高等学校に改編された際に、「自律創造型地域課題解決学習」として位置づけられた。そして、2年次における活動を学校内に留めるのではなく地域をフィールドとして展開する活動として位置づけ、地域の課題を解決するための「ミッション」を地元の事業所と連携して進めてきた。

「ミッション」における取組は、商品開発やイベント企画・運営、こども食堂の効果的な運営をはじめとする様々なテーマが設定され、多くの活動を展開してきた。

4月22日に、高知大学次世代地域創造センター客員准教授の川村晶子氏とオンライン協議を行った。

川村氏からは以下のような助言をいただいた。

○今後、社会で求められる対応力としてどのようなものが必要か。

○社会を知ることの必要性と自分と社会の関係を理解する力が必要であり、メタ認知の有無が問われること。

○論理的な思考で感覚的なものを大切にできるデザイン思考と組み合わせた「プログラミング的思考」の育成がますます求められること。

○1年次・2年次でやっておくべきことは、探究のベースづくりから進路に向けたベースづくり。自分がやりたいことの可視化。地域とのかかわりの意識化。それを進路に活かす力が求められること。その上で、実現のために何をしなければならないかの明確化が必要。

○生徒たちには探究活動の全体像やゴールイメージを繰り返し説明していく必要があること。

○大人が「できない！」のバイアスを外すこと。何をすべきか、How to を考えること。無理だというバイアスを外す。アイデアソンはそのツールの一つ。

○探究活動において、教員は「わからない」でよい。しかし、社会を知る必要がある。知ったうえで支援や助言を、一緒に考えるというスタンスでよい。

この他に、各学年のカリキュラムを組むうえで、視覚化したものを活用するとともにそのなかに、課題解決力を強化するためのポイントとして活動を組み込む際は、「視座の拡大」「思考の深化」「行動の自立化」を意識すること。実施時期と実施内容と生徒の成長イメージをクロスさせたマトリックスとして示すことなどの助言を受け、連動教科も明示した展開イメージシートの作成を行った。作成したシートはV章で示しているが、これをもとに本年度の実践を行い、次年度の実践を充実させるための検討を進めていく。

以後は、各学年担当者が必要に応じて川村氏とのやり取りをオンライン会議システムやメールで行い、カリキュラムの修正を行いながら、探究活動を推進した。

###### イ 「地域学」におけるカリキュラム開発等専門家他との協議

「地域学」においては、各学年でテーマに沿った探究活動を行っている。これまでは、黒潮町理解をベースにして黒潮町の現状や課題について学び、防災施策についての学習を深めた。その中で「犠牲者0」の思想が生まれた背景や、防災対策・防災施策等についての聞き取りやフィールドワークを行ってきた。そのなかで、市販のHUG（避難所運営ゲーム）を体験した生徒たちから、地元の状況との差異が指摘されオリジナルHUGを作ることが提案された。

生徒たちは、作成にあたりどの様にすればいいのかを考え、経験者を探し教示を受けた。そして、地域の区長さんの協力のもとで集めた地域住民の情報をもとにオリジナルHUGの作成を始めた。作成後はこれまでの学びを活かしながら、自分たちが実践してみて感じたことや気づいたことを出し合い、イベントカードの追加や季節に応じた避難所運営を考えるような条件を追加するなど、内容の充実を図った。

また、新たな国道ができたことにより、避難ルートが変更となる地域住民の不安を聞き、不安を解消するためには避難路検証が必要であるという結論に達し、矢守研究室が開発した「逃げトレアプリ」を活用して避難路検証を行った。

このような取組のうえに立って、本年度入学した1年生に対して実施するテーマ設定とカリキュラム作りに向けて関係者とオンラインでの協議を行った。

5月8日には、京都大学矢守研究所研究員の杉山高志氏や黒潮町情報防災課係長の宮川智明氏とオンライン協議を行った。協議内容は「未来へのメモワール活動について」「防災委員会の動きについて」「地域学における探究活動の推進について」「地域をフィールドとした展開について」であった。そして今後の方向性について確認し、定期的にカリキュラムに関するオンライン協議を進めることとした。

5月21日には、運営指導委員でもある矢守克也氏、黒潮町教育委員会の畦地和也氏を含めてオンライン協議を行った。協議内容は「地域の大切なものを残す活動としての『メモワール』の目的やゴールイメージの共有」「活動による生徒の変容に関する評価について」「活動をとおして地域の現実を徹底的に深く知ることの大切さ理解と自分との重ね方」「活動と学びの結果・成果の発表方法について」などについて意見交換を行った。

5月28日には、入野小学校の前田校長を加えてオンライン協議を行った。協議内容は「活動をとおして防災教育のイメージ転換を図ること」「災害から自分たちが何を守りたいのかを明確化し、身の回りの大切なものを明確化すること」「自然の二面性を理解し大切にするとともに共存する生き方に気づかせること」「異年齢のかかわりをとおして多様な学びをさせること」などを目指すことが確認された。

6月19日には、入野小学校の6年生を担当している乾教諭にも参加してもらいオンライン協議を行った。

9月28日には、10月5日に実施予定の入野小学校への出前授業についての打ち合わせを行った。後日、担当者と担任双方で展開や時間配分の確認することとした。併せて、使用施設の確認を行うこととした。

10月29日には、5日に実施した入野小学校への出前授業についてのフィードバックを行うとともに、今後の活動についての確認を行う。

## (2) 探究活動の充実に向けた研修会

### ア 緊急 Zoom 講演会

5月2日に、(株)EDO 主催・岐阜みらいカレッジ共催 「緊急 Zoom 講演会」が開催され、本校から5名の教員が参加した。講演会では、前半で大正大学教授の浦崎太郎氏の「with コロナ時代に高校と地域が打つべき一手とは」と題しての講演があり、後半は各グループに分かれてディスカッションが行われた。

浦崎氏の講演では、Society3.0 社会から Society4.0 社会への転換の必要性、「学びの土壌づくり」に向けた地域に開かれたカリキュラム・マネジメントの確立と、それにもとづく生徒の「学びの組織化」の必要性が語られた。そして、生徒の個性や持ち味を最大限に引き出すためにも「学びの個別最適化」が求められており、探究活動を推進する高等学校改革が必要であることなどが示された。

後半のディスカッションは、各自別々のグループに参加し、次のような点が協議された。

- どのグループにおいても地域人材の活用や、大学生などの高校生と斜めの関係にあたる人材などに力を借りること、開かれた学校づくりが必要であることについて。
- 探究活動が苦手な教職員の意識を変容させるアプローチが必要であり、そのための仲間づくりを学校内で進めていくことの必要性について。
- 地域との関係が切れつつある教職員の自分事感をどのようにして意識させるかについて。

### イ 令和2年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（高等学校における研究開発）担当者会議」（7月30日実施）

まず、浦崎太郎企画評価会議座長から Society5.0 の中で活躍できる人材の育成にむけて、学校教育の変革や、自分らしく社会に参加できる生徒の育成のために、個に応じた多様で体験的な

学びが求められており、そのために地域と連携し、地域の現状をから何が活用できるかが課題となることが示された。そのための「大人の探究コミュニティ」を確立していくことが必要という内容であった。

事例発表では、地域魅力化型に取組む宮崎県立飯野高等学校の事例「大人が主体的であれば、主体的な子どもが育つ」という成果が紹介された。

#### ウ 探究活動理解校内研修会

7月1日の校内研修では、高知大学次世代地域創造センター客員准教授の川村晶子氏を講師としてお招きした。川村氏は本校のカリキュラム開発等にも携わっている。今回は「総合的な探究の時間のより良い実践のために、研修をとおして教職員の支援スキルを向上させる」ことを目的として実施した。

講話では、これからの時代で求められるもの、コロナによる今後の社会の変化予想、アフターデジタル時代の到来による変化に耐えられる人材育成が必要という考え方から、PBL（Project Based Learning）をとおして「現実」を知り→思考し→行動するプロセスを身につけることが必要であることが説明された。

講演では、課題解決のプロセスをあげ、「内容把握」→「課題の可視化」→「仮説の立案」→「情報収集と分析」→「実践」（他者との連携や協力にもとづく課題解決の実践）の流れが示された。そしてこのプロセスをとおして生徒が自分にしかできないこと、「私おこし」（アイデンティティの確立）の活動をとおして実現することの必要性が紹介された。そのために、担当する探究内容についてすべてが専門ではない教職員は、生徒と共に学ぶというスタンスで考えることが必要であることや、生徒へのゴールイメージや成長イメージの提示等のスタートでの仕掛けの大切さが示された。そして、「総合的な探究の時間」で探究活動が完結するのではなく、そこでの学びや学び方のスキルが、各教科のなかでも生かされることが必要であるなどが示された。

#### エ 事業にかかわる全国サミットなど

10月30日には、令和2年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミットがオンラインで開催された。本校から学校長・教頭、事業統括主任を含む担当の3名が参加した。

サミットでは、文部科学省から本事業の目的や教育改革の現状などについての説明があった。続いて一般社団法人「地域・教育魅力化プラットフォーム」の岩本悠氏より「学校と地域の連携・協働の在り方について～」と題し、「共学共創」をキーワードとして学校と地域の連携や協働の在り方に関する情報交換、参加校間で協議を行い事業における各校の取組の深化を図ることを目的としていることが説明された。

その後、3分科会に分かれ実践報告と協議を行った。

本校は、「PDCA サイクルの構築による協働活動の推進」の分科会において、島根県の県立平田高等学校の実践発表を聞き協議を行った。

#### 【平田高等学校の実践発表の概要】

- 商工会との連携により展開。商工会とは連携協定を締結して展開
- カリキュラム開発等専門家には商工会の人材を会計年度任用職員として活用
- コーディネーターとしても商工会から5名を確保
- 地域の方のガイドによる地域を知るバスツアーの実施
- 探究活動をスタートさせるにあたり、島根県立大学の教員による講演会を実施
- 生徒の探究活動の発表会は高校で行うのではなく、中学校に出向いて実施
- 1・2年生合同で地域の大人にも協力してもらい、「地域と高校生の未来を語る会」を実施
- ワーキンググループを中心に事業を展開し、毎月運営委員会で進捗状況を報告
- 高校魅力化評価システムの活用
- 成果として、振り返りを行ったことで生徒の主体性が向上したこと、組織的な取組で教職員の意識が変化したこと

## 【協議】

参加校は、いずれもPDCAを効果的に回すことができず、それぞれの学校に悩みが存在していた。しかしながら校務分掌に「探究学習運営部」を設置したり、5教科からメンバーを募り「探究研究部」を設置したりし、PDCAサイクルを構築しようとしている様子が報告された。また、学校外の人材を確保したり協力してもらったりしている学校や、大学と連携協定を結び高大連携のなかで展開している学校もあった。

協議のまとめとして、C（評価）→A（改善）への接続がうまくできていないことから、組織的な対応が必要であることを再確認するとともに、評価の観点の見直しや情報共有の大切さなどが共有された。

全体共有では、他のグループから前年度の課題をどの様に改善して行っていくかが重要であることや、生徒が書いたものや発表したものをもとに、教員がそれらを読み、聞くことで自分のかかわりはどうであったのかを自己内省しなければならないという意見や、それらを教員間で共有して生徒の変容や成長を見とっていく必要があることなどが報告された。

12月8日には、令和2年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミットが開催され、本校からは学校長、教頭、事業統括主任を含む担当3名が参加した。サミットでは、文部科学省から本事業の趣旨説明と、大正大学教授の浦崎太郎氏から学習指導要領にもとづく探究活動についての講演、地域・教育魅力化プラットフォームからの「地域みらい留学365」についての説明があった。その後、各グループに分かれブレイクアウトセッションが行われた。

1回目のブレイクアウトセッションでは、「教科横断の探究活動」をテーマとして協議を行った。税金や消費者問題、テクノロジーに関する問題を教科横断による学習として実践した例が報告されたが、どの学校も教科の壁の高さが感じられるような報告であった。

また、学力的に厳しい生徒への対応についての協議も行われたが、「教員が支援しつつ如何に自分事にするか」「生徒の発想を生かすか」「できないではなくまずはやらせてみる」など、後半は前向きな意見が出されるとともに、共通言語による意思化についても共有された。

2回目のブレイクアウトセッションでは、「考えるための技法の活用」をテーマに協議が行われた。教科内における技法活用はまだまだだが、「ループリックの作成にもとづき実践し、その実践の幅を学校行事などにも広げていること」「生徒が身につける必要がある力について、ループリックと人生曲線を用いて、身につける必要性を理解させる取組を行っていること」などが報告された。

令和3年2月19日には、文部科学省主催で「地域との協働による高等学校教育改革推進事業地域協働推進校及びWWLコンソーシアム構築支援事業拠点校とのオンライン意見交換会」が開催された。

校長、教頭、事業統括主任の3名が参加し、本年度の取組の推進状況やアンケートの結果、成果と課題等についての報告を行った。その後、事業の進捗及び次年度の計画と高等学校改革に関する意見交換を行った。

## V 探究活動の柱となる科目のカリキュラムと再構築に向けた取組

### 1 「地域学」における各学年の取組

「地域学」は学校設定科目として平成 29 年度からスタートした科目である。教育課程上の教科としては「ソピア」として位置づけられ、地域・防災について学ぶ「地域学」とソーシャルスキルトレーニングなどの実施により、社会的スキルを育成する「ソピア」から成っている。

学校設定科目として「地域学」と「ソピア」を設定しようとした背景には、学校の特色を出すということや多様な生徒が在籍しており、なかには対人関係の構築が苦手な生徒も多くいることから、進路保障に向けたトレーニングが必要であるという考えが背景にあった。しかし、教科書もない科目であるため、生徒に身につけさせたい力（目標）や取り扱う教材（内容）、各学年の系統性などをどのようにするのかについては前年度段階では決まっておらず、講座開設当年度に担当教員が考えながら進めるという状態からスタートしている。

「地域学」では、1 年次に「地域学入門」、2 年次に「地域学Ⅰ」、3 年次に「地域学Ⅱ」を受講する。各年次の担当教員は地歴公民科・理科・家庭科・商業科の教員が担当し、主担当は地歴公民科の教員が担っている。

カリキュラム開発等専門家が高知大学次世代地域創造センター客員准教授の川村氏の助言のもと、「課題解決力強化のためのポイント」と「活動」を縦・横に取り、それぞれのステージにおいて、生徒に身につけさせたい事柄を位置づけた表として視覚的なカリキュラムとすることで、教職員間の共通理解を図ることとした。

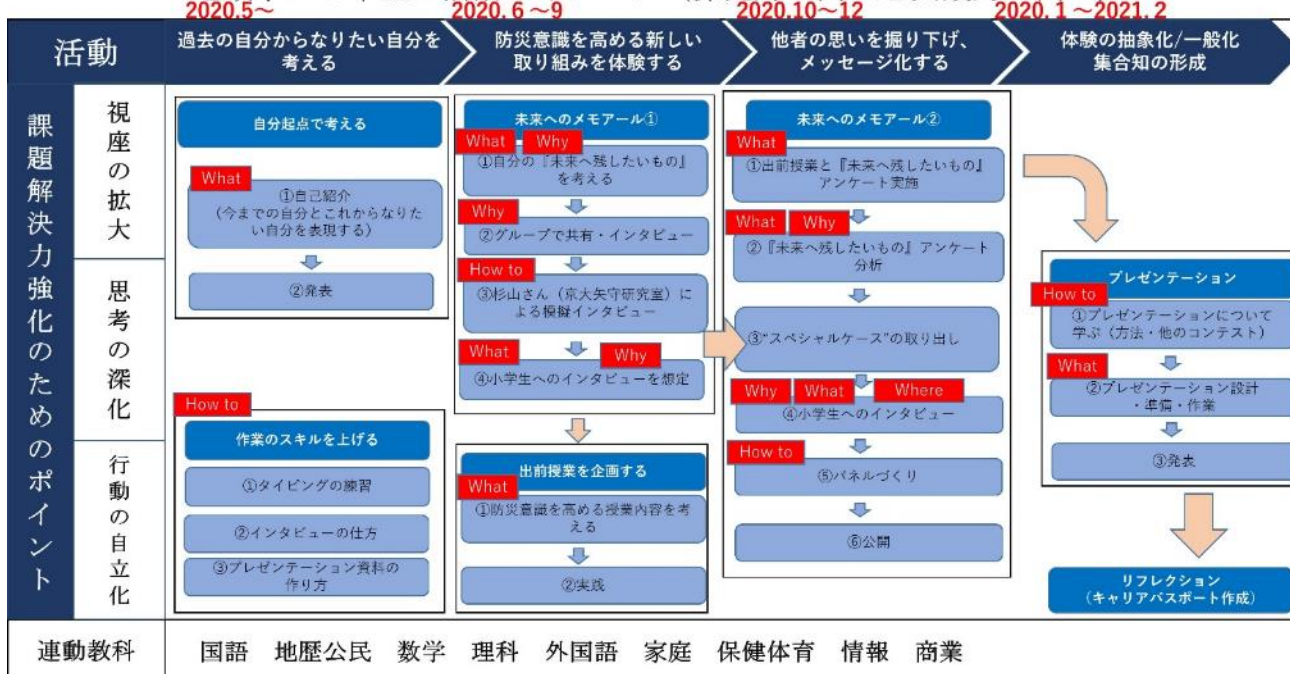
なお、「地域学」における視覚的なカリキュラムの内容については、カリキュラム開発等専門家である矢守研究室の研究者であり、本校の防災教育のアドバイザーでもある杉山高志氏を中心に検討したものである。

#### (1) 「地域学」における各学年の年間カリキュラム

##### ア 1 年次のカリキュラム

1 年次の「地域学入門」では、地域理解と地域の防災への取組を理解し、活動をとおして地域への愛着を生徒が持つことができることをめざした。

#### 地域学の 1 年生の活動のイメージ（探究力の向上と実践力の向上）



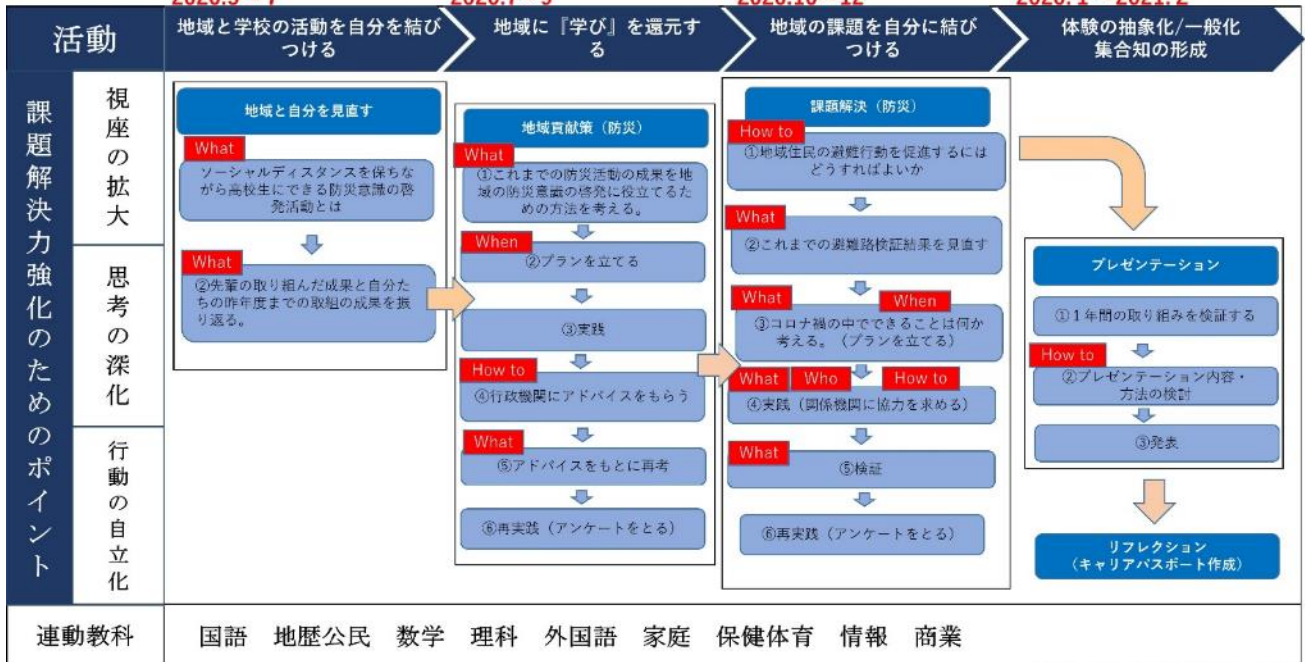
高知大学川村麻子客員准教授作成のシートを活用



イ 2年次のカリキュラム

2年次の「地域学Ⅰ」では、地域と連駆した活動を行うことをとして、生徒たちの防災活動や探究活動の充実を図ることをめざした。

地域学の2年生の活動のイメージ（探究力の向上と実践力の向上）  
2020.5~7 2020.7~9 2020.10~12 2020.1~2021.2

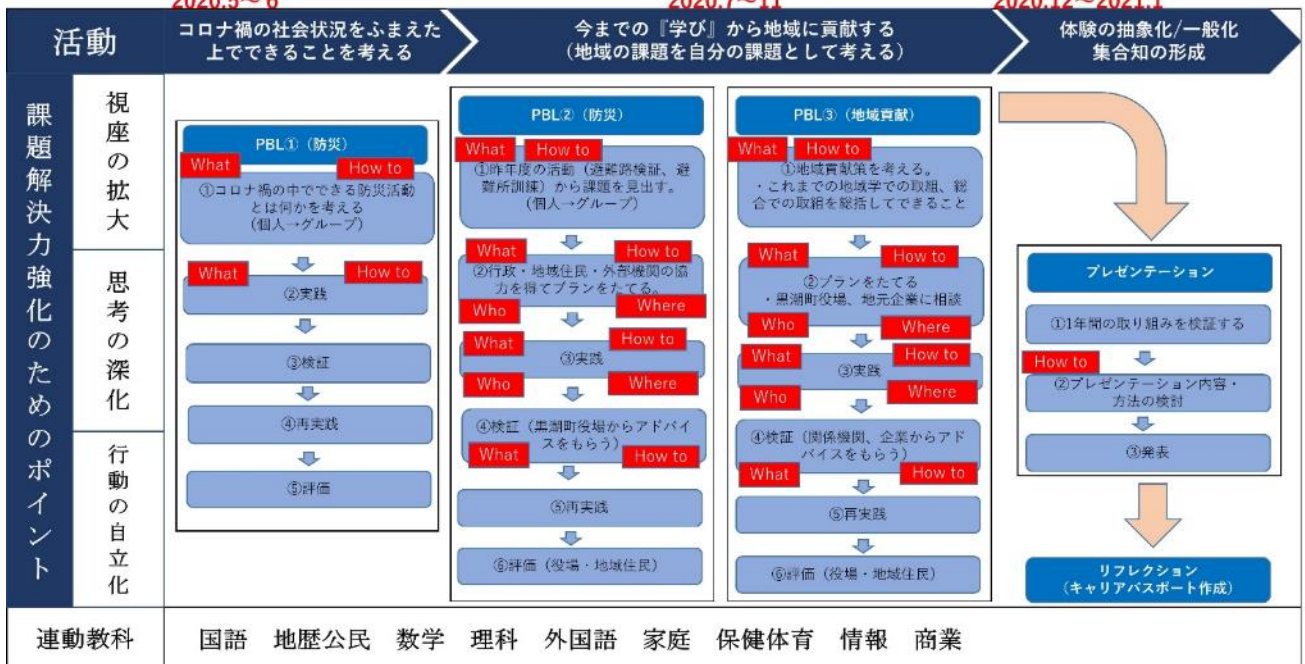


高知大学川村富子客員准教授作成のシートを活用

ウ 3年次のカリキュラム

3年次の「地域学Ⅱ」では、これまでの学びを基にして防災活動に関する行政への提案や、活性化に向けた取組を展開することをめざした。

地域学の3年生の活動のイメージ（探究力の向上と実践力の向上）  
2020.5~6 2020.7~11 2020.12~2021.1



高知大学川村富子客員准教授作成のシートを活用



(2)「地域学」における展開

ア 地域学入門の活動とその具体

表 地域学入門の活動

実施日	テーマ	活動内容
5月13・19日	地域創造コースでの学びへの期待と抱負	自己紹介を兼ねて地域創造コースへの期待記載と記載内容の発表
5月20日	未来へのメモワール	災害から守りたいもの、未来へ残したいものを確認
5月26・27日	未来へのメモワール	災害から守りたいもの、未来へ残したいものを確認
6月2・3・9・10日	未来へのメモワール	災害から守りたいもの、未来へ残したいものを確認
6月16・17・23・24日	出前授業 企画	小学校へへの出前授業の授業案作成
7月7日	出前授業 企画	小学校へへの出前授業の授業案作成
7月8・14・15日	暑中見舞い葉書作成	高齢者への暑中見舞い葉書の作成
7月21・22日	出前授業 準備	小学校の出前授業の準備 授業内容の検討
7月28・29日	//	防災クイズの作成
8月25・26日	//	パワーポイントの作成
9月1・2・8・9日	出前授業リハーサル・準備	出前授業のリハーサル、準備
9月15・16日	//	インタビューの練習
10月6日	出前授業	防災クイズ、『未来へのメモワール』
10月7日	出前授業振り返り	出前授業の振り返り
10月13・14日・20日	避難所研究	学校内見学（備蓄倉庫、備蓄物資の確認）
10月21・27日	避難所研究	オリジナルHUG実践
11月4・10日	避難所研究	オリジナルHUG実践後の振り返り（個人） 疑問点、改善点など
11月11・17・18日	避難所研究	要配慮者の避難生活について考える
12月1・2・8・9日	被災地との交流授業 事前学習	岩手県野田村について、東日本大震災の被害状況調べ（インターネット動画視聴など） 岩手県野田村役場職員（小野寺修一氏）への質問（個人→全体まとめ） 被災地の『未来へのメモワール』感想
12月15・16日	地域住民との交流授業事前 学習・準備	地域住民との交流授業に向けて役割分担 授業内容の検討 シェルパーテント事前学習
12月22日	被災地との交流授業	被災地（岩手県野田村）との交流（Web 授業） ①被災体験について ②被災地の『未来へのメモワール』
12月23日	地域住民との交流授業リハ ーサル	地域住民との交流授業に向けてリハーサル
1月12日	住民との交流授業（中止）	
1月29・20日	マスク収集活動	家庭で未使用のまま眠っている政府配布の布マスクの寄付の お願いと有効活用
1月26日	住民との交流授業	避難所（校内）探索、備蓄倉庫・備蓄品の確認 避難カード作成の提案、シェルパーテントの体験 オリジナルHUG（ディスカッション版）実践
2月 3日	交流授業の振り返り	交流授業の振り返り 避難所としての課題点、改善点共有 シェルパーテントの用途について オリジナルHUG実践でた住民からの声をまとめ
2月 9日	『未来へのメモワール』活 動ふり返し	1年間の『未来へのメモワール』活動を振り返り お互いのメモワールを改めて共有 小学生のメモワールを共有

2月10日	東日本大震災について情報収集	東日本大震災について学習（NHKスペシャルの視聴など）
2月15日	佐賀中学校体験授業	佐賀中学校体験授業（避難所体験）
2月17・24日	1年間の振り返り	1年間を振り返り、レポートを作成

地域学入門は13名が選択しており、本年度は「未来へのメモワール」「出前授業」「被災地との交流」「避難所研究」などの活動を行った。1年生は「地域学入門」において、黒潮町理解や黒潮町の防災の現状理解から活動に取り組んでいる。本年度は黒潮町理解と「未来へのメモワール」を重ねて実施した。

「未来へのメモワール」は、本校において初めての試みであるが、日常の生活や当り前の暮らしの大切さの再認識と、それを奪う災害に対しての備えを進めようとする意識を育むとともに、防災活動は何を守るために行うかということを考えさせることをねらいとした。そして、「未来へのメモワール」をとおして、日常の生活や当り前の暮らしのかけがえのなさや、それを育てている地域への再認識ができることをねらいとして実施した。

まず、生徒たちに「災害が起こったのちに、あなたは何を残したいですか。」と問いかけ、残したいものを明確化させるとともに、なぜそれを残したいのかについて具体的な理由をあげ、残すために自分は何をするのかを明確化する活動を行った。

生徒たちはこの問いかけに対して、「えっ？」と戸惑っている感があった。小学校・中学校と防災学習を積み上げていると思われるが、このようなアプローチは経験したことがなく、初めころに出てきた答えは、「命」や「家族」といった一般的なものであった。これらのことは当然だが、教員側から「なぜ命なのか」「なぜ家族なのか」「それを残したいという思いに至るエピソードは何」などと掘り下げていくなかで、生徒たちは「命や家族は守りたいけど、それだけでは災害後、他のものは何も残らない可能性がある。」「災害復興を考えた時、命や家族がいることは大きな力になるが、復興はゼロからのスタートになる。」などの言葉が出始めた。そして、生徒たちは地域の歴史を伝えるものや、魅力的な自然の姿、家族が大切にしてきた家族の歴史や地域の文化などに目を移すようになった。そして以下のような言葉が出てくるようになる。

- ・「地元の海を残したい」  
→津波をもたらず海であっても、人の心のよりどころになっている存在である。日ごろから海を大切に、汚さないようにしていきたい。
- ・「亡くなった父の卒業アルバムを守りたい」  
→幼いころに亡くなった父の写真が少なく、若いころの父の姿を残しているのは卒業アルバムだけなので、それを守りたい。
- ・「安政津波の碑を残したい」  
→この地域を襲った大津波の教訓から、子や孫の代まで語りつなげることで犠牲者を少なくしてほしいという願いが込められていて、自分たちも次の世代につなげなければならぬので、それを守りたい。

などがあげられていた。その他にも、親の店や自然の中にある名所、近所の風景など生徒の思いが伝わるものがあげられていた。



メモワール作品



メモワール作品

## 【出前授業】

「未来へのメモワール」に取り組んだ生徒たちは、自分たちの世代以外はどんなものを残しておきたいと考えるだろうか？というところから、地域の方に聞いてみたいという声が出てきた。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大もあり、地域の方々を訪問してインタビューしていくことは難しいため、隣の入野小学校の6年生に聞いてみようということになり、高校生の出前授業として感染防止対策を行いながら実施することとした。

今回の出前授業では、小学6年生が未来に残したいものは何か、そしてどのような思いがそこには込められているのか理解すること、また自分たちの思いとの比較をねらいとして行った。

出前授業を行うにあたり、小学生がリラックスしたなかで授業を受けることができるようにするためにはどのようにすればよいか、防災クイズから始めたいがどんな質問であれば6年生が答えられるか、授業を行うためにはどんなものを準備しておけばいいのかなど、生徒たちは知恵を出し合い思考していた。教員側からは、先輩たちが過去に行ってきた出前授業の様子を写真で見せるのみとした。

出前授業は、防災クイズ→「未来へのメモワール」の構成となったが、防災クイズに6年生たちは積極的に取り組み、正解した子どもたちはガッツポーズを取ったり互いにピースサインを送ったりしていた。

「未来へのメモワール」では、6つのグループに分かれて最初に高校生が考えたメモワールの作品を提示し、残したいものについてのエピソードや理由を説明した。その後、6年生に自分だったら何を残したいのかについて考える活動を行った。

生徒たちにとっては、今回が初めての出前授業並びに地域との交流であったため、最初は緊張もあり6年生の考えを引き出すことはできなかったが、徐々に「そうながや。」とか、「ふーん。」といったように、6年生の発言を受け入れるとともに「どんな気持ち？」とか、「どんな面白いことや楽しいことがあったか？」など、エピソードを引き出そうとする方向に変わっていった。しかし、時間切れとなってしまい、6年生が考えたことは小学校でまとめてくれることになった。



出前授業の様子



出前授業の様子



出前授業の様子

## 【被災地との交流】

「未来へのメモワール」の幅を持たせ、多様な年齢層や立場の異なる方の思いを理解し、自分たちの思いと重なることや差異を確認すること、防災への意識や災害に備える意欲を高めることを目的として、東日本大震災の当事者の方との交流授業を行った。12月22日に、岩手県野田村の役場職員の小野寺修一氏と学校をオンラインでつなぎ、被災された方の思いを聞かせていただいた。

小野寺氏の被災時・被災後の思いや考えたことなどについてお話をお聴きするなかで、生徒たちは「思い出したくない出来事を私たちに話してくれたことを無駄にしないようにしたい。」「被災した人でも時間がたつと、震災の記憶が薄れていくと話されていたことが心に残った。」「被災していない私たちが備える意識を持ち続けることは大変難しいけど、防災活動をとおしてみんなに意識を持ち続けてもらえるようにしたい。」などの感想が出ていた。



小野寺さんとの Zoom 面談



## 【避難所研究】

大方高等学校の卒業生が「地域学」の授業の中で作成した、「大方高等学校オリジナル HUG（避難所運営ゲーム）（以下：オリジナル HUG）」を活用して、避難所運営のイメージを生徒たちに持たせること、ゲームをとおして避難所となっている本校の体育館などの施設や運営上の課題を発見し、改善策を考え改善に向けた活動を行うことをねらいとして実施した。

「オリジナル HUG」を初めて体験した生徒たちからは、「難しい。」「どうしたらいいか判断できないことが多かった。」「学校のこと（施設状況）をもっと知らなければならぬと思った。」などの振り返りの声が聞かれた。



活動後は、生徒たちから「学校のことをもっと知らなければならぬ。」といった振り返りの声があったことから、備蓄倉庫の場所の確認や保管されている備蓄品の数量や種類等を確認させた。また、「オリジナル HUG」をやってみて感じた疑問や気づいた課題などをまとめさせ、地域住民の方々と活動を行う際に、高校生からの気づきや提案として紹介していく準備とした。

## 【地域の方々との避難所検証】

1月26日に、発災時に本校の体育館に避難してくる地域住民の方々を集まていただき、避難所と施設紹介、備蓄倉庫や備蓄品についての紹介を行った。また、避難所への簡易テントの設置をとおして、簡易テントの組み立て方や居住スペースの確認等を行った。最後に、「オリジナル HUG」を地域住民の方々と一緒にいき、避難所運営について協議を行った。

この時、生徒たちから地域住民の方々への提案を投げかけた。昨年度、夜間避難訓練を行い、避難所開設訓練を体験した生徒たち（令和元年度卒業）が、避難所開設訓練において受付が混雑し、居住スペースへのスムーズな案内ができなかったことから、受付のやり方を変える必要があると後輩たちに申し送っていた。それを引き継ぎ検討重ねた生徒たちが、他地域の事例などをもとに簡単でより効果的な方策はないかと思ひ、スムーズな受付作業ができる方策として自分たちが考えた案の提案を行った。生徒たちは、各家庭で名前や性別・配慮事項や血液型などの情報を事前に記入してもらい、避難時にはそれを首にかけて避難し受付で渡す「避難カード」の作成を実物を見せながら提案した。地域の方々からは、「これだけでえいがかえ。」「これやったら楽や。」「玄関にぶら下げちゃって、逃げる時に持って行ったらえいがやろう。」などと賛同の声が聞かれていた。

## イ 地域学Ⅰにおける活動とその具体

表 地域学Ⅰの活動

実施日	テーマ	活動内容
5月19日	「コロナ禍の中でできる防災意識啓発活動を考えよう」	オリエンテーション 「コロナ禍の中でできる防災意識啓発活動を考えよう」 ディスカッション
5月19・26日	『防災パンフレット』作成	掲載内容のリストアップ
6月2・9・16・23日	『防災パンフレット』作成	対象者の設定 掲載記事について検討・他のパンフレット等の収集と分析 原稿作成
6月23日	暑中見舞いはがき作成	高齢者への暑中見舞いはがきの作成
7月7日	暑中見舞いはがき作成	高齢者への暑中見舞いはがきの作成
7月7・14・21・28日	『防災パンフレット』作成	原稿作成 掲載する写真選び、撮影他 全体の構成検討（タイトル、フォントなど）
8月25日	『防災パンフレット』作成	京都大学、黒潮町役場情報防災課指摘箇所修正
9月1・8日	〃	説明文の再検討
9月15日	暑中見舞いはがき返信アンケート集計	近隣の高齢者にだした暑中見舞いはがきの返信アンケート（防災について）集計
10月13日	アンケート結果を受け今後できること	アンケート結果を受けて、今後、地域創造コースが取り組めることを検討

10月20日	文化発表会の準備	文化発表会で展示する防災学習コーナーの内容検討
10月27日	避難路検証事前学習	出口地区の確認、ハザードマップの確認（予想津波高など）
11月10日	避難路検証	出口地区の高齢者、障害者の方と「逃げトレ」を用いた避難路検証を実施
11月17日	避難路検証振り返り	避難路検証の振り返りとまとめ
12月1・8日	国土交通省、黒潮町への陳情準備	避難路へのベンチ設置についてプレゼンするためのパワーポイントを作成・発表練習
12月15日	国土交通省、黒潮町への陳情	なぜ、避難路にベンチを置きたいのか、新しい道路が避難路として重要であることをプレゼンし、避難路にベンチを置く許可を得るため国土交通省、黒潮町づくり課へ陳情を実施 国土交通省より幡多信用金庫前のスペースの有効活用策の依頼を受ける。
12月22日	国土交通省依頼内容検討	幡多信用金庫前のスペースの有効活用策を検討
1月12・19日	未来へのメモワール	東日本大震災の被災地、岩手県野田村調べ（地理、特産品、歴史など）被災状況調べ（Youtube 視聴等）
2月2日	未来へのメモワール	被災地の住民の『未来へのメモワール』視聴 『未来へのメモワール』作成
1月26日	避難所体験	避難所の一人当たりのスペースを体感する。シェルパーテントの組み立て体験、活用法を検討
1月26日	『防災パンフレット』の校正	印刷会社から帰ってきた原稿の校正
2月9日	『防災パンフレット』の校正	印刷会社から帰ってきた原稿の校正
2月9日	東日本大震災について情報収集	東日本大震災について学習 （NHKスペシャルの視聴など）
2月16日	1年間の振り返り	1年間の活動をふりかえって、レポート作

地域学Ⅰでは、1年次の学びを基にした地域での防災活動の展開を位置づけている。例年であれば各地区に出向き、地域住民の方々と避難路検証や地区防災会議での課題提起、解決策の提案等を行っているが、本年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、カリキュラムを大きく変更せざるを得なかった。

休校期間後の活動では、生徒たちに「コロナ禍でできる防災啓発活動を考えよう」というテーマを設定した。テーマに基づいて生徒たちは、啓発活動という言葉から「ポスター作製」「啓発CM作成」「標語作成」などの提案があがった。生徒たちはこれまでの取組をとおして地域住民の方々に伝えたいことがあり、それを伝える方法として最終的に「防災パンフレット」の作成に落ち着いた。しかし、作成したパンフレットをどのように、どれくらい印刷するか、紙の厚さをどれくらいにするのか、カラーか白黒かなどで行き詰った。印刷して地域住民の方々に配付しようにも、学校の予算ではカラーでしっかりしたパンフレットを作成する予算がなかったためである。そこで、黒潮町の情報防災課に生徒たちがこんな活動をしたいということを提案し、内容の説明をはじめ、思いを伝えたことで黒潮町の支援が得られ、計画を推進できるようになった。

生徒たちは、パンフレットのなかで伝えたいことをリストアップし、どの様な表現等で表すのか、イラストや写真はどのようにするのか、などについて検討を重ねた。読みやすい内容・伝わりやすい文章・見やすさ等について調べるために、様々な施設のリーフレットやパンフレットの類を集め、伝わりやすい文章、フォント・字体、イラストや写真の効果的な活用等について分析していった。その結果、パンフレットはストーリー性のあるものにする事を決定し、内容の検討を行った。内容については、カリキュラム開発等専門家である矢守研究室研究員の杉山氏や、黒潮町情報防災課長補佐の宮川氏に何度も助言をいただきながら、試行錯誤の結果パンフレットを完成させた。

**ヘルプマークを知ろう**

外見では分からない人が、周りに配慮が必要であることを知らせるために、「援助が必要なこと」を訴えるマークです。

「ヘルプマーク」を見かけたら...  
 ・電車やバスなどは席を譲りましょう。  
 ・駅などでは、声をかける配慮をして下さい。  
 ・災害時は、安全に避難するための支援をお願いします。

ヘルプマークは黒潮町役場の健康福祉課や中村駅でももらえます。

**連絡先**

★大方高等学校  
高知県幡多郡黒潮町入野5507  
0880-43-1079

★黒潮町役場  
高知県幡多郡黒潮町入野5893  
0880-43-2111

災害伝言ダイヤル **171**

伝言を残す  
171に電話します・自分の電話番号・伝言を残す

伝言を聞く  
171に電話します→2→連絡したい

**あなたと家族を守るために**

～ 大方高校周辺のみなさまへ～

災害伝言ダイヤル 171

大方高校地域創造コース2年作成

**避難所で使える手話**

助けてください

助けます

痛い

ありがとう

防災リーフレット 表

**高台安全**

地震が起きた時、状況に応じて避難しましょう。そのために複数の避難先を把握しておきましょう。その一つとして大方高校も避難場所として

ベンチを設置する予定です！  
新しい道路のここまで逃げれば津波から身をまもれます。  
ベンチを設置する予定ですので、毎日の散歩にこのベンチまでくるコースを入れてみませんか？

(イメージ図)

**もしものために...**

逃げトレ (個人用避難訓練アプリ)  
スマホにダウンロードして色々な条件で、繰り返し訓練してください。

地震が起きた時には

逃げトレ

(逃げトレを使った避難路検証)

**避難所はここ**

専門

正門

体育館

これが体育館2階です

これが1階のトレーニング室です

**災害時の備え！**

揺れがおさまって5分以内に避難できたら安全です。

補助金最大110万円  
今、家の耐震工事をしていない人は、地震がくる前に耐震工事をしておきましょう。  
役場が補助してくれる金額は最大110万円です。

家具固定もしておいて！

災害が起きる前に対策をしておきましょう！！

備蓄袋  
地震が起きてすぐに避難してもらうため、大方高校に備蓄袋を置いて下さい。

防災リーフレット 裏

【出口(いでぐち)地区との避難路検証】

新型コロナウイルスの感染拡大が落ち着き、県内では警戒レベルが「注意」の状況となったこともあり、地域住民の方々と避難路検証の活動を行った。黒潮町の人口構成のなかで高齢者が多いことを生徒たちは理解しており、福祉事業所との交流等も行っていったことから、生徒たちは「高齢者の避難にどれくらい時間がかかるか、同じ地域でもルートが変わればどうなるかを検証する必要があるのではないか。」と考え実施をしたものである。実施にあたり、黒潮町の情報防災課と健康福祉課が要配慮者の避難について啓発・推進したいとの思いもあり、合同で実施することになった。

「犠牲者0」の思想を掲げる黒潮町にとって、高齢者や障害者のスムーズな避難は大きな課題であり、本校ではこれまでも福祉避難所との連携や高齢者の屋内避難訓練、視覚・聴覚障害者との避難訓練等を実施してきた。今回は出口地区で毎週月・火に開催されている「あったかふれあいセンターみうら」の活動に参加している高齢者が、地震発生後に避難所まで避難するためにどれだけの時間がかかるか、避難路に危険箇所はないかなどを確認することを目標として実施した。

訓練では矢守研究室が開発した「逃げトレ」アプリを高校生が使用し、避難中に津波到達時間や危険状況等の情報を高齢者に伝えつつ実施した。生徒たちからは「避難路が狭く、塀が倒れてくる



ことでかなり通りにくくなる。」「避難場所には屋根がないので、雨天時は長くそこにはいられない。」「夜の避難は、明かりがつかない可能性があり、塀が倒れたりしていると避難場所までたどり着くのに時間がかかるため、ソーラー式のライトなどの設置が必要。」といった気づきをもとに、情報防災課や健康福祉課の担当者に提案していた。

### 【防災ベンチの設置】

昨年度、黒潮町には新たな国道が建設され、地震発生時には避難路（命の道）として活用できるよう、歩道の幅が乗用車一台分ほど確保されている。しかしその分、新たな国道を横断することは、高齢者にとっては時間がかかることもあり、不安を訴える声が聞かれたことから、昨年度は「逃げトレ」アプリを活用して避難路検証を行った。

新たな国道を横断しての避難であっても、津波到達時間前までに避難が完了することは検証できたが、避難場所に到達するためには、急な階段を上げる必要もあった。そこで、他の地区の住民の方々と、別ルートでの避難路検証を行った2年生の生徒たちが、新たな国道を渡らなくても津波到達区域よりも高い所に安全地帯があることを確認した。生徒たちが安全地帯であると判断した場所は、地域住民の方々が朝夕の散歩コースにしているコースの途中にあることから、ここにベンチを置き、散歩の途中で休んだり集ったりできる場所にしてはどうかと考えた。そこで、ベンチを設置するために必要な手続きについて町づくり課に問い合わせを行った。用地は国土交通省が所管している場所ということがわかり、国土交通省に対して安全地帯へのベンチ設置を許可してもらうために、生徒たちは、検証結果とベンチ設置のメリットを含めた提案を行うこととした。生徒たちの提案は、国土交通省の代表の方にも受け入れられ、今後はベンチ製造と設置してくれる事業所へのアプローチが必要となっている。



国土交通省職員への提案



国土交通省職員への提案

表 地域学Ⅱの活動

実施日	テーマ	活動内容
5月 3日	「コロナ禍の中でできる防災意識啓発活動を考えよう」	オリエンテーション 「コロナ禍の中でできる防災意識啓発活動を考えよう」 ディスカッション
5月14・20・21・27・28日	『防災クロスワード』作成	黒潮町独自のものにするための検討 『クロスワード』の作成の仕方を確認 『防災クロスワード』作成（黒潮町独自の情報を考える。）
6月3・4・10・11・17・18・24日	『防災クロスワード』作成	黒潮町独自のものにするための検討 『クロスワード』の作成の仕方を確認 『防災クロスワード』作成（黒潮町独自の情報を考える。）
6月25日	暑中見舞いはがき作成	高齢者への暑中見舞いはがきの作成
7月8日	暑中見舞いはがき作成	高齢者への暑中見舞いはがきの作成
7月9・15・16・22・29・30日	クロスワード	『防災クロスワード』作成（黒潮町独自の情報を考える。）
8月26・27日	早咲地区避難タワー清掃活動の事前学習	早咲地区ハザードマップの確認など
9月 2日	早咲地区避難タワー清掃活動振り返り	早咲地区避難タワーの清掃活動を実施
9月2・3・9日	黒潮町課題解決学習	オリエンテーション 黒潮町 HP・アクションプランを資料として黒潮町の現状を検討
9月10日	暑中見舞いはがき返信アンケート集計	近隣の高齢者に送った暑中見舞いはがきの返信アンケート（防災について）集計

9月16日	アンケート結果を受け今後 できることの検討	今後が取り組めることを検討 (年度を越えた活動として)
9月17日	黒潮町課題解決学習	課題設定・課題の再定義
11月7・8・ 4・15・21・ 22・28・29日	黒潮町課題解決学習	課題解決策を検討 課題解決に向けてのプランづくり 課題解決プランの遂行
11月4・11・ 12・18日	黒潮町課題解決学習	課題解決活動・事業提案に向けた資料づくり 課題解決活動・振り返り、事業提案に向けた資料づくり 課題解決活動の再検討
12月2・3・ 9・10・16・ 23日	黒潮町課題解決学習	課題解決活動(事業所提案)他 黒潮町役場、マブロックへの質問、提案など 課題解決活動・振り返り 課題解決活動の再検討
12月17・ 23・24日	『クロスロード』作成	3年間の避難路検証、避難所研究の集大成として黒潮町大方 高校ならではの『クロスロード』作成
1月13・14・ 20日	『クロスロード』作成 黒潮町課題解決学習まとめ	『クロスロード』作成 報告書をかねたパワーポイント作成 1年間の成果のまとめ
1月22日	1年間の振り返り	1年間の振り返り、レポート作成

地域学Ⅱでは、防災活動の啓発と黒潮町アクションプランを参考にした課題解決策の提案として、商品開発に取り組んだ。前半は「防災クロスワードの作成」と「早咲地区避難タワー清掃」に取組み、夏休み明けからは商品開発や、課題解決に向けたプロジェクト活動に取り組んだ。

本年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で2カ月遅れのスタートとなり、カリキュラムの大幅な修正が必要となった。そのなかでも何がやれるかを確認しながら取り組んだ一年であった。

#### 【防災クロスワードの作成】

休校明けの最初の授業で、2年生と同様に「コロナ禍できる防災啓発活動を考えよう」という課題を設定した。3年生に対しては2年生と異なり、「これまでの活動や学びを活かした啓発活動として何ができるか考える。」ようにと枠を設定した。生徒たちはいろいろ考えていたが、堅苦しい啓発活動ではなく、小学生から高齢者までのどの年齢層の方でも行え、家族で一緒に行うことができるということで、クロスワードを作成しようということになった。生徒たちは、全ての町民の方にやっていただくことを役場の担当者の方に提案した。

いざ作成を始めると、クロスワードをつくる際に、縦と横の言葉のバランスや、どんな言葉を入れるようになるのかなど、試行錯誤の繰り返しであった。クロスワードの作り方等について、インターネットで情報を集めたものの、生徒たちにとっては苦勞の連続で、何度も弱音を吐く生徒もいた。しかし、広報誌に掲載されることが決まっておき、期日も定められていることから早くできた生徒は、まだできていない生徒に助言を行うなどにより、全員が完成させることができた。完成した作品は、机上ポスターセッション形式により、それぞれの作品を生徒たちが確認したうえで、代表作品を決定し担当者に提出した。代表作品は防災啓発月間の特集が組まれる9月号に掲載された。



掲載された防災クロスワード

#### 【早咲地区避難タワー清掃】

この活動は、夏休み明けすぐの8月27日に実施したものである。

以前から生徒たちは、町内の避難タワーには鳥のフンがたくさんあり汚い状態にあることや、早咲地区の避難タワーの清掃が高齢化による影響もありできていないことを聞いていた。「自分たちが清掃活動をすることも必要なのでは?」といった声が生徒たちから上がっていたこともあり、黒

潮町の情報防災課と連携して、清掃活動を高校生が実施することをとおして、地域住民の方々の避難意識の向上を図ろうと取り組んだ。

早咲地区の区長さんのお話を聞いた生徒たちは、「6年間もそのまま?」「汚いと避難できても嫌や。」「いざというときに使えんで。」などと話していた。生徒たちは避難タワーに上がり、鳥のフンで埋め尽くされたフロアの状況を目の当たりにして、「ゲッ。」「なにこれ!」「汚くない!」などと声をあげていた。作業は、排水対策のため溝に設置されている金属製の格子状の蓋を一つひとつはがし、蓋を下まで降ろして水道水で汚れを落とし、最上階のフロアに上げる作業を行った。次に、最上階のフロアと各階の階段に積み上げられた鳥のフンを、金属製のヘラを使ってそぎ落とす作業を繰り返した。

生徒たちは、「僕たちは先輩たちほど地域の役に立つことができていない」から、避難タワーの清掃活動を行うことで、地域に役立つ存在になりたいという思いを持っていた。これは振り返りのなかで出てきた言葉であるが、生徒たちからは先輩たちと同じ活動をするのではなく、主体的に活動することで地域に貢献したい、という気持ちが伝わってきた。振り返りのなかでは、「ただでさえ避難タワーで過ごす時間は、夏は暑さにやられ冬は寒さにやられる。一時的かもしれないけど、厳しい状況に加えて鳥のフンがいっぱいやったら、逃げてきた人が座ることもできん。これからも高校生が清掃活動に参加する必要がある。」といった言葉も出ていた。

### 【プロジェクト活動】

黒潮町のアクションプランに書かれていることをもとに、どのような課題があるのかを確認した後、個人活動により解決方法についての考察と提案、実施に向けた活動を行った。

すべて個人活動で展開し、地域の特産品を活用した商品開発を提案する生徒や、地域の産業と防災を絡めた防災商品を提案する生徒、空き家のイノベーションを進めるための提案を行った生徒たちもいた。生徒たちが考えた提案は、全て黒潮町役場の各課の担当の方や、地域の事業所さんに聞いていただき、アドバイスを受けてさらに考察を加え、商品化や実現に向けた活動につなげた。

結果としては、防災商品はいくつかの候補が残ったが、最終的にはハーバリウムとLEDライト、笛をセットにした「ハーバリウムホイッスル」が採用され、試作品が事業所から提案された。食材に関する提案のなかでは、町内産のカツオやミョウガを素材として活用し、甘味・辛味バージョンなどを提案した「ご飯のお供」に関心を示していただいた。生徒が作成した試作品の試食と助言を繰り返すなかで、商品化への動きが現実味を帯びてきている。しかし、空き家のイノベーションに関する提案については、黒潮町の施策として空き家の活用については力を入れていないこともありなかなか前に進まず、提案した生徒は「実現は不可能かもしれないが、デザインは完成させたい。」と取り組んだ。



ハーバリウムホイッスル

すべての生徒の提案が受け入れられたわけではないが、生徒たちは黒潮町に貢献したい!という思いをもってそれぞれの活動に取り組んでいた。

## 2 「総合的な探究の時間」における各学年の取組

本校の「総合的な探究の時間」は、商業高校から多部制単位制普通科の高等学校に改編された平成17年度から、「総合的な学習の時間」としてスタートした。

総合的な学習の時間を展開するにあたり、探究活動と地域をフィールドとした課題解決学習を進めること、学校内の力だけではなく学校外の力を借りて展開していくことを基盤としてスタートした。

1年次では、「課題解決手法」の理解や、グループ活動を推進するための「人間関係づくり」などがカリキュラムとして組み込まれ、地域に出るボランティア活動の実施や、2年次に設定されている「ミッション」に向けた、地元企業理解などの活動を展開してきた。

2年次では、「ミッション」の遂行を中心とし、「自律創造型地域課題解決学習」として高知大学と連携して開発したカリキュラムに沿った展開を行ってきた。「ミッション」は地域の課題を解決することを目標とし、その活動をとおして新たな価値の創造を目指す「アントレプレナーシップ」の育成を目的としてきた。これまでの「ミッション」のなかから、黒潮町の天然塩を活用した「黒塩」やカツオたた



きバーガー、「有限会社じいんず工房大方 (isa)」のオリジナルTシャツ、グリーンレモンを使用したグリレモコッタなどの商品が生まれ、地域の特産品として販売されたりしている。

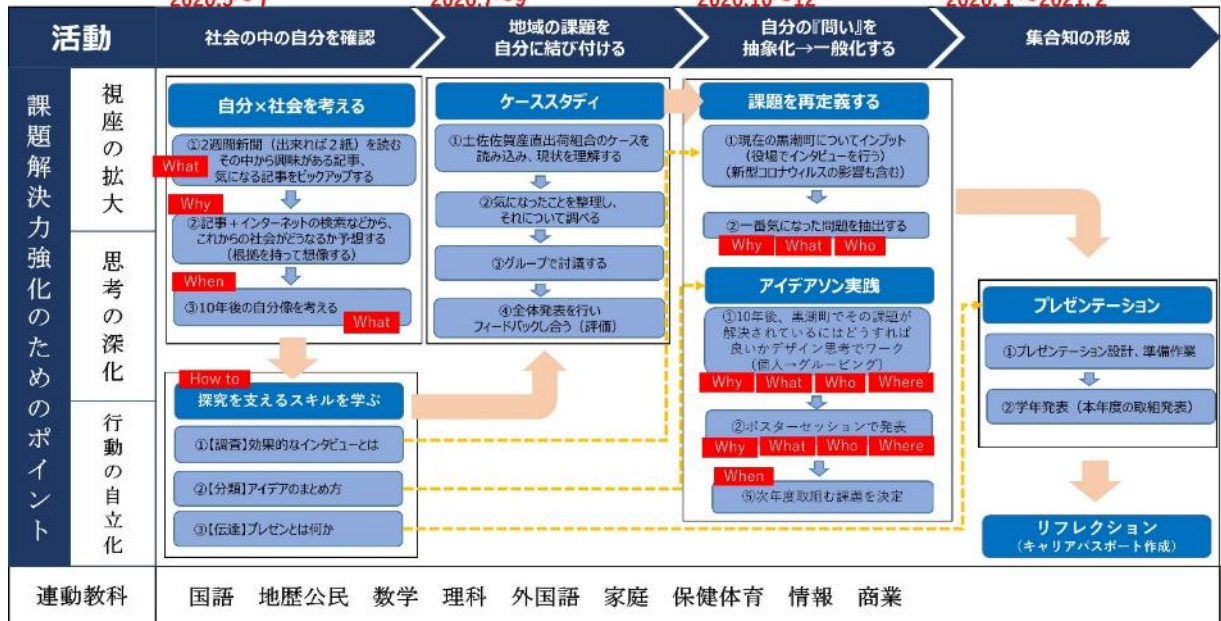
3年次では、これまでの学びを進路につなげることを位置づけ、社会人講話や職業インタビュー、活動のまとめなどを行ってきた。

(1) 「総合的な探究の時間」における各学年のカリキュラム

ア 1年次のカリキュラム

「総合的な探究の時間」における1年生のカリキュラムのねらいとしては、探究活動への理解促進と身近な地域の人々との触れ合いをとおして、地域理解と魅力や課題発見につながる気づきや考える力の育成を目指した。

総合的な探究の時間の1年生の活動のイメージ (探究力の向上と実践力の向上)  
2020.5~7 2020.7~9 2020.10~12 2020.1~2021.2

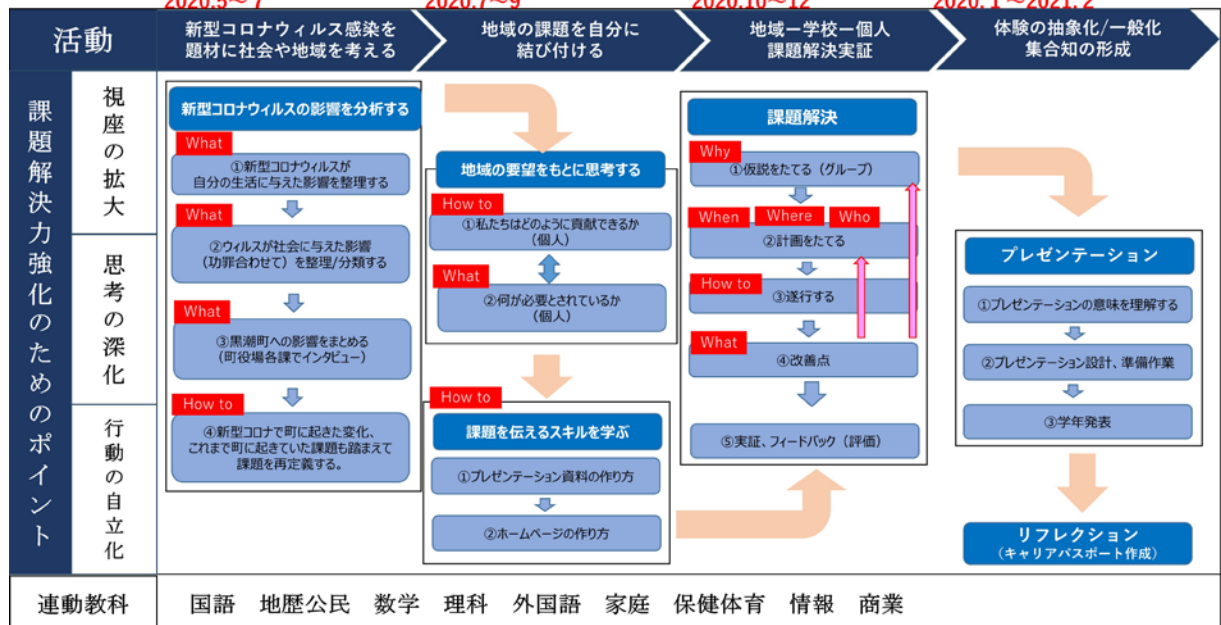


高知大学川村晶子客員准教授作成のシートを活用

イ 2年次のカリキュラム

2年次のカリキュラムのねらいとしては、黒潮町が目指している方向性を「黒潮町アクションプラン」の読み込みをとおして理解させ、地域課題の解決に向けて自分の進路や課題解決への思いと重なるテーマを絞り込み、実践につなげることを目指した。

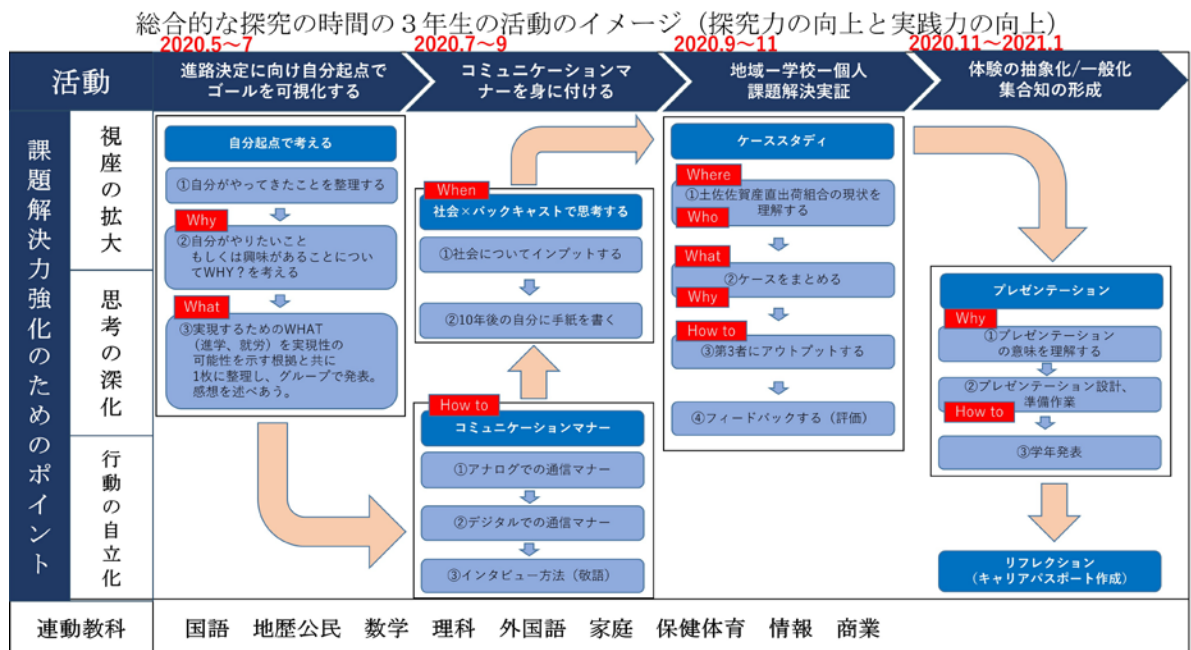
総合的な探究の時間の2年生の活動のイメージ (探究力の向上と実践力の向上)  
2020.5~7 2020.7~9 2020.10~12 2020.1~2021.2



高知大学川村晶子客員准教授作成のシートを活用

### ウ 3年次のカリキュラム

3年次のカリキュラムにおけるねらいとしては、「進路決定に向け、自分起点でゴールを可視化する。」「コミュニケーション力やコミュニケーションマナーを身につける。」「地域・学校・個人を結びつけ課題解決を実証する。」「体験を抽象化・一般化により振り返りつつ学びをフィードバックする。」4つの活動を設定し課題解決力の育成を目指した。



高知大学川村晶子客員准教授作成のシートを活用



(2)「総合的な探究の時間」における展開

ア 1年次の取組内容と具体

表 1年次の「総合的な探究の時間」の内容

実施日	テーマ	活動内容
5月20日	・オリエンテーション	・3年間の取組について ・1年次の取組について
5月27日	・10年後を考える	・10年後の自分像を想像
6月 3日	・新聞記事を読み取る	・数種類の新聞記事の中から気になるものを選び、その記事からデータを読み取り ・記事を読み、感じたこと思ったことを記入
6月10日	・新聞記事の要約	・1週間新聞を読み、選んだ記事について要約 ・次週までに新聞を読み、気になった記事について調査し、レポート提出
6月17日	・10年後の世の中を予想する	・新聞記事やインターネットの情報を元に、10年後の世の中を予想（新型コロナ後の変化、差別問題、SNSでのコミュニケーションの変化、学校（授業）の変化など）
6月24日	・10年後の自分像	・予想した10年後の世の中をもとに、10年後の自分像を考え記入
7月 8日	・地域を知る	・入野松原周辺の探索（安政津波の碑、避難タワー、入野の浜）
7月15日	・アイデアのまとめ方	・自分に必要な防災グッズを発案 ・タワーや野外に避難した場合、室内の場合、暑いとき寒いときに何が必要かをもちに ・発表と共有
7月22日	・アイデアのまとめ方	・ラップの使い方について思考 ・個人でアイデアを考え、グループで共有 ・グループでアイデアをしぼり発表
8月29日	・考える力を育てる	・早寝、早起き、朝ごはんについて思考 ・ネットを使用し情報収集
9月 2日	今の社会、これからの社会のインプット	・講師（高知大学次世代地域創造センター客員准教諭の川村晶子氏）を招いた講演会の実施 ・現在と未来の社会についてのインプット ・ワーク「AIの年齢認証は何を基準に行っている?」「実年齢との差が生まれる理由は?」思考（個人⇒ペア思考）
9月 9日	講演会の振り返り 「Museum」について ・見つける力 ・考える力	・講演会のポイントを振り返り ・「Museum」についての事前学習 「Museum」とは、まわりにあるMuseum、課題説明





10月 7日	アイデアソン事前学習	・自分が作れる「Museum」を検討
10月 14日	砂浜美術館事前学習	・「その日」砂浜美術館誕生までの記録の読み込み ・わからない言葉や感じたことなどの書き込み
10月 21日	砂浜美術館オリエンテーション	・砂浜美術館の考え方 ・これまでの取組 講師：NPO砂浜美術館理事長 村上健太郎氏
10月 28日	砂浜美術館貝殻ひろいボランティア参加	・入野の浜で貝殻収集 ・ひろった貝殻の使い方の説明
11月 2日	Tシャツアート展フィールドワーク	・現地体験 ・自分が気になるものを見つけ記録 ※総合的な探究の時間外の活動
11月 11日	Tシャツアート展振り返り	・フィールドワークの成果をまとめ
11月 18日	3年生の発表会に参加	
12月 2日	イベントを企画する ・グループワーク	・Tシャツアート展をもっと楽しくする方法を思考 ・前日までに個人でアイデアを考え提出 ・アイデアの近いもので班編成 ・班でアイデアを協議、共有 ・アイデアを決定し発表方法を検討
12月 9日	イベントを企画する ・グループワーク	・西村さんにアイデアを説明し、アドバイスをもらい、アイデアの練り直しと発表準備
12月 16日	イベントを企画する ・グループワーク	・発表会 ・各班5分程度で考えたアイデアを発表
12月 23日	3年生後輩へのメッセージ	・発表会視聴
1月 13日	課題設定	・各自で次年度取り組む課題を設定
1月 20日	課題設定	・各自で次年度取り組む課題を設定
1月 27日	課題設定	・各自で次年度取り組む課題を設定
2月 3日	SDGs	・SDGsについての学び
2月 10日	課題設定	・各自で次年度取り組む課題を設定
2月 17日	課題設定	・各自で次年度取り組む課題を設定
2月 24日	1年間の振り返り	・振り返りシートとキャリアパスポート記入

1年次の活動は、前半で探究活動を行ううえで必要となる探究スキルについての習得や地域を知ることで、次年度に向けた課題発見を目標とし、身につけさせたい力としては「気づく力」と「思考力」とした。

本プロジェクトをとおして生徒に育みたいと考えている5つの力のうち、「探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」に関連する力として「気づく力」と「思考力」を位置づけた。そして、2つの力を育成するために1年生では「自分×社会を考える活動」「探究を支えるスキルを学ぶ活動」「アイデアソンに向けた活動」「地域探究活動」の4つを行った。



自分×社会を考える活動の流れ

#### 【自分×社会を考える】

この活動では、生徒たちが10年後の社会がどのようなになっているのかについて想像し、なぜそう考えたのか、その考えに至った根拠などについて発表をさせた。

この活動は、本校の生徒の多くが新聞を読む習慣がなく社会への関心が弱いいため、探究活動や地域課題解決学習を進めるうえで、地域や社会への関心度を高める必要があると考えたためであった。活動の流れは左図のとおりである。

この活動のなかでは、未来を考えるために現在の自分を確認するとともに、10年前の高校生と比較する作業を組み込んだ。生徒たちは、10年前の高校生の興味関心や生活の様相等を理解するなかで、自分たちの今の生活との類似点や差異を感じていた。

新聞記事を読む活動では、本校がNIEの指定を受けていることもあり、地元新聞社の記事や全国誌の記事から生徒たちが気になった記事をピックアップさせ、その記事の内容に関してわからないことや疑問に思うこと、記事の内容が発生している背景等について調べ、レポートとしてまとめた。生徒たちは、自分の興味関心を持った記事を読み込み、それを基に10年後の社会がどうなっているのかを想像し、考えた社会で自分はどのように生きているのかを考える活動を行った。

実際やってみると、生徒たちにとって10年後というのはあまり実感がなく、漠然としたイメージしかもっていなかった。また、未来の社会を想像することに戸惑いを見せる生徒もいた。そこで、生徒たちには10年後の自分を考えるうえで、自分はどのような進路を今考えているのかを基にして想像させることで思考が促進するのではないかと考え、「高校卒業後に就職する」「専門学校や短期大学等で2年間学びその後就職する」「大学に進学し、4年間または大学院を含めた6年間学びその後卒業する」の3つのパターンで考えさせた。

振り返りのなかでは、「10年後を明確な理由や根拠をもって想像することは難しかったが、調べたり意見交換したりするなかで、少しずつ『今がこうだからこんな社会になるのでは』ということが見えてきた。」とか、「新聞を読む活動が新聞を読むきっかけになった。読んでみると、自分の進路につながる記事が出ていることもわかり勉強になった。」といった自分の進路との関わりを見つけた生徒もいた。また、「10年前の高校生の生活から、自分を見つめこれからの高校生活をどのようにしたいのかが見えてきた。」「過去を知ることで未来の自分のイメージづくりにつながった。」などの感想が聞かれた。

#### 【探究を支えるスキルを学ぶ】

ここでは、思考力を育成することを目標にし、クリエイティブシンキングの活動を行った。この活動はテーマを変えて3回実施した。

1回目は、「自分に必要な防災グッズを考える」として展開した。

事前学習として、町内にある「安政津波の碑」と「津波避難タワー」を見学した。見学の際、碑に刻まれた先人の思い、発災時の地域の情景、発災の備えとして何が必要かといったことを想像させることねらいとして展開した。

事前学習の共有後、自然災害は季節に関係なく発生することを説明したうえで、避難時には過去の避難経験者の話でも一般的な避難グッズだけではなく、自分に必要な避難グッズを用意した方が役に立つといった話の後、一人ひとりが自分に必要と思われる品物をリストアップし、グループで共有した後にカテゴリー別にした表を作成した。

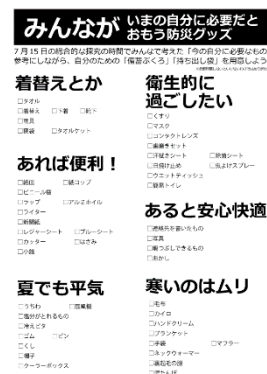
この活動をとおして、生徒たちは地域の災害の歴史を理解するとともに、避難時における避難所のイメージや必要な防災グッズ等について考えることができた。

2回目は、「ラップの使い方について20以上考える」として、日常にあるものから自分のイメージを膨らませてどのような活用方法があるのかについて考える活動を行った。

まず、箱に入ったラップの写真を提示し、「なかにあるフィルムだけではなく箱も活用するとどんなものを作ることができるか？どのような使用方法があるのか？」と問いかけ、個人で考えさせた。そして各自が考えたアイデアを持ち寄り、ランダムに編成されたグループにおいてアイデアを共有した。そのうえで、各グループから「このアイデアは他のグループにはない。」と思われるものを紹介しあった。

生徒たちは、「芯は応急措置の添え木に使える。」「フィルムを切る刃は折った紙を切るができる。」「フィルムは包帯代わりに使える。」「防寒対策ができる。」など防災を意識したアイデアを上げていた。

3回目は、「早寝早起き朝ごはんについて考える」として、一般常識として言われているこの言葉の効果の根拠は何か、この取組がなぜ必要なのかを考えさせるとともに、自分の習慣と比較



自分に必要な防災グッズ

し、自分の就寝時間や起床時間は推奨される時間とどれだけ開きがあるのかなどについて確認させた。

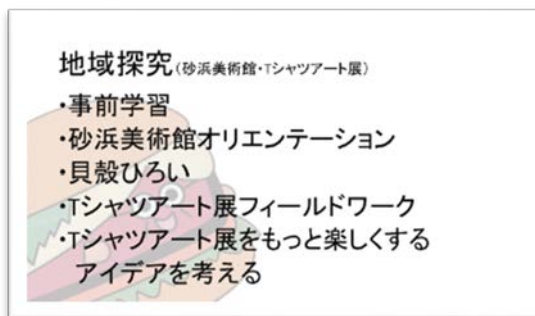
生徒たちは、インターネットを活用して「早寝早起き朝ごはん」に関するサイトを見ながら、効果があると評価しているアンケートや医療健康関係の研修者の言葉などを確認しながら、自分なりに根拠とするところをまとめていた。活動の最後に、グループ内で一般的に言われている「早寝早起き朝ごはん」について批判的に考えていった結果を共有したところ、妥当であるという結論が多かった。自分との比較においては、「寝る時間は自分の年齢では適正な時間だが、起床はもう少し早く起きなければ。」といった声や、「どちらもまずい。スマホの使用時間を減らさねば。」といった声が聞かれていて、一般的に言われていることが本当に正しいのかを再確認することで、自分の生活の見つめ直しにつながる効果もあった。

「探究を支えるスキルを学ぶ」活動をとおして生徒たちからは、「正解はないんだと思い、自由に考えることができた。」「自分と違う考え方を知ることができ視野が広がった。」「場面や季節を創造しながら発想を広げることができた。」「話すのが苦手じゃなくなった。」「身近なことではあったが興味を持つことができた。」「以前よりニュースを見るようになった。」などの感想が聞かれた。

### 【アイデアソンに向けて】

この活動は、カリキュラム開発等専門家の川村晶子氏の提案でカリキュラムに位置づけた活動である。当初は10月に開催予定であったが台風により延期となり、延期とした12月は、新型コロナウイルスの感染拡大により県内に警戒レベルが上げられたため、実施することができなかった。

しかし、生徒たちはアイデアソンに向けた事前学習として、アイデアソンのテーマとして位置づけていた「museum」について、「生徒の身近にあるmuseum・世界にある、知っているmuseum」を出す→「興味を持ったmuseum」について情報（正式名称・設置者・博物館法上の区別）を集め、収集した情報をシートにまとめる活動を行った。



地域探究活動の内容

### 【地域探究活動】

黒潮町を理解するということを目指して、NPO 砂浜美術館とTシャツアート展について学び、そこからアイデアを出し合うという活動を行った。

事前学習では、Tシャツアート展の始まりの話をまとめた『『その日』』そもそものきっかけ・39日間の物語』（発行：砂浜美術館）を生徒たちが読み込み、理解できない言葉や気になった箇所などをマークし、理解するための調べ学習を行った。

砂浜美術館オリエンテーションでは、理事長である村上健太郎氏に学校に来ていただき、砂浜美術館のコンセプトや活動の考え方、これまでのTシャツアート展の取組などについて話していただいた。

Tシャツアート展ボランティア（貝殻拾いへの参加）では、Tシャツアート展終了後に出展者に返却されるTシャツと同封して届けられる貝殻を拾い集める活動を砂浜美術館の職員さん方と一緒にに行った。Tシャツアート展の準備が行われている会場での活動であったことから、生徒たちは地域のイベントに参加している自分を確認していた。

Tシャツアート展の見学では、Tシャツアート展の魅力を発見させるために「気に入ったTシャツを探す」をテーマに課した。また、アイデアソンにつなげるため、その他のテーマとして、「Tシャツ以外の作品を探す」「気に入った風景を撮影する」「あるものと・ないものを探す」といった課題を与え、リサーチをさせ、見つけた事柄をまとめる活動を行った。



Tシャツアートの始まりをまとめた冊子



これらの活動をととして、気づきや学びをもとに「T シャツアート展をもっと楽しくするためのアイデアを考えよう」というテーマを設定し、個人活動→グループ活動につなげ、元砂浜美術館の職員であった、地域協働学習実施支援員の西村優美氏に提案した。生徒たちは、西村氏から助言をもらい、ブラッシュアップさせた案を発表した。

生徒たちは、発表方法を各グループで考え、与えられた5分の時間のなかで自分たちが考えたアイデアが聞き手に伝わるように工夫していた。



イ 2年次の取組内容

表 2年次の「総合的な探究の時間」の内容

実施日	テーマ	活動内容
5月13日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・新型コロナウイルス感染症が自分の社会に与えた影響を整理する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これからの社会で求められる資質、つきたい力、1年間の流れを理解</li> <li>・特に休校中の生活を振り返り、コロナ禍によって、自分の生活がどう変化し、どんな影響があったか思考</li> </ul>
5月20日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の社会の現状を新聞から読み取る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞3紙からコロナが社会に与えた影響について書かれてある記事をピックアップ</li> </ul>
6月3・10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍の社会について新聞を読み込む</li> <li>・予想される社会の変化をまとめる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピックアップした記事の内容を要約</li> <li>・予想される社会、様式、事からの変化についてまとめ</li> </ul>
6月17日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予想される社会の変化をまとめる</li> <li>・インターネット活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予想される社会、様式、事からの変化についてまとめ</li> <li>・新聞記事の内容を補完し、情報を広げるためにインターネットも活用</li> </ul>
6月24日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予想される社会の共有</li> <li>・黒潮町アクションプランを知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分以外の9名と共有し、シートに記入</li> <li>・黒潮町アクションプランを読み込み（グループごとで分野別に）</li> </ul>
7月8・15・22日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒潮町アクションプランを知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒潮町アクションプランを読み込み（グループごとで分野別に）</li> </ul>
8月29日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒潮町アクションプランを知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒潮町アクションプランを読み込み（グループごとで分野別に）</li> </ul>
9月2・9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒潮町アクションプランを知る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒潮町アクションプランを読み込み（グループごとで分野別に）</li> </ul>
10月7・14日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題発見に向けて探究活動（個人）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビューに向けての資料集め</li> </ul>
10月21・28日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題発見に向けて探究活動（個人）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題発見に向けての整理</li> </ul>
11月11日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3年生「ケーススタディ」発表会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表会視聴</li> </ul>
11月18日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題設定（個人）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題設定（コーディネーターとの面談）</li> </ul>
12月2・9・16日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題設定（個人）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題発見に向けての整理</li> </ul>
12月23日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後輩へのメッセージ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表会視聴</li> </ul>
1月13・20日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題の定義（グループ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題を定義</li> </ul>
1月27日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決案策定（グループ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決策を明確化</li> </ul>
2月3・10日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決案策定（グループ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決策を明確にし、PDCAサイクルの計画を立案</li> </ul>
2月17日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビュー（グループ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・黒潮町役場他関係各所へのインタビュー（2時間）</li> </ul>
2月24日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題発表会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度に取り組むテーマについて発表</li> <li>・振り返り</li> </ul>



2年次の活動は、前半で地域課題解決に向けた取組を進めるうえで、自分たちの地域と他の地域とを比較する視点や、世界がどのような方向に進んでいこうとしているのかなどを把握しておく必要があると考え、新聞の活用と黒潮町のアクションプランの活用を組み込んだ。そして、それらの活動をとおして、一人ひとりが取り組む課題設定へつなぐことを目指した。そのため、身につけさせたい力としては「持続力」と「提案力」、「課題設定力」とした。

「持続力」は本事業で身につけさせたいと考えている「レジリエンス」につながるものであり、しんどさや大変さを乗り越え課題設定につなげられる力として位置づけた。また、「提案力」と「課題設定力」については、行政の方々への聞き取りや友達への考えを聞き、それをもとに課題設定へとつなげることができる力の育成を目指して、「探究力」と関連させて設定したものである。

2年生では「新聞を読んで社会を知る」活動、「これからの社会を予想する」活動、「アクションプランの理解と聞き取り」活動、「課題発見と提案」の4つの活動を行い、次年度に向けた取組みたいことをまとめて発表した。

#### 【新聞を読んで社会を知る】

本校では、昨年度からNIEの活動の指定を受けており、生徒たちが新聞を読む習慣を身につけられるよう、新聞コーナーの設置や各学年の教室前の掲示板に生徒に読ませたいと教員が考えた新聞記事の掲示、防災に関する新聞記事の掲示等の活動を行ってきた。また教科学習のなかでも新聞を活用するなどの活動も行ってきた。

カリキュラム開発等専門家の川村晶子氏からも、探究のもとには社会を知ることが必要であり、新聞を読ませることを継続して行き、「なぜ」とか「どうして」といった疑問、「なるほど」といった現状理解の促進が不可欠であると言われ、本年度のカリキュラム検討のなかで新聞を読む活動を位置づけた。

2年生は昨年度の「総合的な探究の時間」のなかで、黒潮町の魅力を発見する活動を行っており、自然の豊かさや人の温かさ、豊かな自然を生かした農業や漁業、ツーリズムなど様々な活動につなげていることを理解している。休校期間明けのガイダンスののちに、生徒たちが最も関心があるであろうと考える「コロナ禍の社会を知る」をテーマとして、新聞4紙（高知新聞・朝日新聞・読売新聞・毎日新聞）から2週間分を用意し、テーマに関連する記事を読ませた。

#### 【これからの社会を予想する】

この活動では、コロナ禍で急速に変化した社会から、新聞を読んで理解したことをもとにアフターコロナ社会を予測し、今後実現されるであろうと考える技術・新しい仕事・文化を考えさせるとともに、逆に消えていく可能性のあるものについても考えさせた。そして、新たに生まれる可能性があるものや消えていく可能性があるものなどから、地方が活性化するために取り入れることができるものはないか？を問いかけ考えさせた。

生徒たちからは、「テレワークが中心になり、地方にいても都会と同じような仕事ができる。」「オンラインショッピングが多くなり、特産品を都市部で販売するときに販売スペースが不要になる。」「移住に対する地理的なハードルが下がる。」「自然を生かした体験型の修学旅行などが増え、黒潮町の自然を生かせるのではないか。」などの意見が出ていた。

#### 【アクションプランを読む】

黒潮町の行政施策とその施策が立ち上がった経緯を理解するとともに、どの様な課題があるのかについて生徒たちにつかませるために、「黒潮町アクションプラン（以下：アクションプラン）」を読ませた。

アクションプランごとに、産業（農林水産業）・福祉・防災・観光などの分野を中心に担当教員を置いた。そして分野ごとに5～6名のグループを編成し読んでいったが、興味を持ったところや質問をしたいと思った箇所に印をつけさせ、ワークシートにそれらの項目について記入させた。

生徒たちは、黒潮町の産業振興に関する計画や移住促進に関する戦略、福祉や防災面における現状や課題等多くのことを理解することができた。難しい言葉や行政用語もあり生徒たちは苦労していたが、読み進めるなかで「カツオだけじゃなくソデイカの販路拡大に力を入れようとしている。」「スポーツツーリズムという言葉は聞いていたが、野球やサッカーで県外から多くのチー



ムが来ている。」「グリーンレモンを売り出しているけど、海外戦略までは広がっていない。」など、いろいろな気づきを得たようであった。

#### 【課題を発見する】

各自が読み込んだアクションプランのなかで、自分が関心を持ち取り組んでみたいと思う分野を生徒たちに絞り込ませた後に、疑問点やもっと知りたいことなどワークシートに記載したことを、行政の担当者の方に聞き取りをするためにまとめさせた。併せて、その課題を解決するためにどのようなことをしようと思うかということを考えさせたが、生徒たちの提案は未熟さが目立っていた。

聞き取りまでの状況では、「タピオカ専門店をつくる」「大型ショッピングセンターをつくる」「インスタ映えするポイントを紹介する」「婚活イベントを考える」「子育て支援策として支援金を出す」などが出されていた。しかし、担当教員が一つひとつに対して、場所はどうか、建設費用はどのくらいかかるか、どんな方法で実施するか、目標人数や利益の目標はどのくらいに設定するか、実現するために必要なことは何かなどと問いかけていくと、生徒たちは解決策の未熟さに気づき、「インタビューして担当の人と相談しないといかん。」といった声が出てくるようになった。

#### 【関係各所へのインタビュー】

2月17日の5・6時限目に黒潮町企画調整室・産業推進室・情報防災課・健康福祉課の職員の方に来校していただき、生徒たちのインタビューに答えていただいた。また、佐賀漁港に出向き漁協から話を聞いた班もあった。生徒たちは黒潮町の課題解決学習の取組のなかで、課題の再定義を行うために、わからないことや現段階で課題として考えていること、解決策としてのアイデアなどを聞いていただき、意見や助言をもらった。生徒たちが課題と考えていることが、課題としては弱いと意見された一方で、同じように役場が課題として考えていることが明らかになるなど、大変参考になった。しかし、思考が深まっていない班は、インタビュー内容が思いつきになってしまったり、自分たちが考えている課題との因果関係が分からなかったりしていた。

#### 【成果発表会】

2月24日に「課題設定、アイデア発表会」として今年度のここまでの学習成果を発表した。関係各署へのインタビューから再検討する時間がほとんどなく、いずれの班も授業時間外に残って発表の準備をしていた。

各班の担当の教職員の感想は厳しいものがあつたが、教職員側が生徒の気づきやアイデアを引き出すことができていないことや、情報提供などもできていないといったこと、広いアイデアを実現可能な方向に収束させることができていなかったことなど、反省すべき点が多々あつた。

後日、本事業のカリキュラム開発等専門家である川村晶子氏に発表の様子を見ていただき、以下のような意見やアドバイスをいただいた。

- その場をやり過ごす高校生の態度や、教職員の自律的に思考し行動するための伴走が放任的になっている班がある。
- やり過ごそうとする生徒たちが思考できる、効果的な伴走とするためには生徒への声のかけ方への配慮が不可欠である。
- 教職員のファシリテート力やコーチング力が求められる。

ウ 3年次の取組内容

表 3年次の「総合的な学習の時」間の内容

回	実施日	テーマ	活動内容
1	5月13日	・オリエンテーション ・「私の履歴書」作成	・1年間の活動をまとめたフロー図をもとに、活動や内容やその目的、身につけたい力を確認 ・2年次から他の科目で行っていた「私の履歴書」を完成
2	5月20日	・高校卒業後の自分について考える①	・将来の夢をもとに短期目標、中期目標、長期目標を検討 ・自分がやりたいことや興味のあることについて「Why」を思考
3	5月27日	・高校卒業後の自分について考える②	・3年生で具体的に行うことをマンスリーで思考
4	6月3日	・高校卒業後の自分について考える③	・3年生で具体的に行うことをマンスリーで思考
5	6月10日	・プレゼンテーション準備①	・発表資料作成に当たっての説明（見やすい、わかりやすい発表資料とは・・・） ・発表資料の作成（発表原稿の作成含）
6	6月17日	・プレゼンテーション準備②	・発表資料の作成（発表原稿の作成含）
7	6月24日	・プレゼンテーション準備③	・発表練習を行い、発表内容の加筆修正（5分という発表時間を意識させる。） ・発表資料の作成（発表原稿の作成含）
8	7月8日	・プレゼンテーション準備④	・発表資料の作成（発表原稿の作成含）
9	7月15日	・発表会	・「これからの自分の人生設計」に関する発表
10	7月22日	・封筒の書き方とメールの打ち方について	・実際に送付先の情報を提示し、封筒に思うままに記載 ・インターネットで調べ、訂正 ・ポイントをチェックリストで再確認（メールの打ち方も同様）
11	8月29日	・オンライン会議システムで会話をしてみよう	・オンライン会議を行う必要性が高まった理由を確認 ・リアルで会話する場合とオンライン会議システムで会話する場合のメリット、デメリットについて思考（個人⇒グループ） ・オンライン会議システムの基本的な操作方法を理解 ・対面式とオンラインで、同じ内容で自己PRを行い、違いを面接官の立場、受験生の立場で意見交換 ・オンラインでの面接の際の留意点を確認
12	9月2日	・今の社会、これからの社会のインプット	・講師（高知大学次世代地域創造センター客員准教授の川村晶子氏）を招いた講演会の実施 ・現在と未来の社会についてのインプット ・「AIの年齢認証は何を基準に行っている」「実年齢との差が生まれる理由は」のワーク（個人⇒ペア思考）
13	9月9日	・10年後の社会について考える	・根拠をもって10年後の社会を予想（個人思考）（インターネットや、前時の講演内容から根拠を探し、推測する。）
14	9月16日	・発表会（学年）	・10年後の社会（自分自身が進む業界）の予想とその根拠について、班内で発表
15	10月7日	・ケーススタディ①	・ケースの内容（ケーススタディのモデルの方がどんな方でどのようなことを行ってきたか）を共有 ・わからない言葉とその意味をグループで共有 ・疑問に思った箇所や自分の気持ちを記入した箇所を共有（グループ思考） ・疑問に思った箇所について自分の意見を個々で思考（個人思考）
16	10月14日	・ケーススタディ②	・自分の考えや、職業観などを組み込んだ質問を設定（個人⇒グループ）

17	10月21日	・ケーススタディ③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各班 10分ずつインタビュー（3人1班、合計7班）</li> <li>・インタビューが終わった班は、インタビュー内容の共有をしたのちに発表会の準備</li> </ul>
18	10月28日	・ケーススタディ④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各班 10分ずつインタビュー（3人1班、合計7班）</li> <li>・インタビューが終わった班は、インタビュー内容の共有をしたのちに発表会の発表の準備</li> </ul>
19	11月11日	・ケーススタディ⑤	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人3分の発表の資料を作成し、プレゼンテーションソフトを使い発表する</li> </ul>
20	11月18日	・ケーススタディ⑥	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ケーススタディ学習成果発表会」</li> <li>・ケース提供者の濱町明恵氏、カリキュラム等開発専門家の川村晶子氏をお招きし、コンソーシアムの委員、運営指導委員会の委員さんにオンラインで配信</li> </ul>
21	12月2日	・後輩へのメッセージ①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・伝えたいことをキーワードとして書き出し、構成を思考</li> </ul>
22	12月9日	・後輩へのメッセージ②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝えたいことをキーワードとして書き出し、構成を思考</li> <li>・発表内容及び資料の作成</li> </ul>
23	12月17日	・後輩へのメッセージ③	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝えたいことをキーワードとして書き出し、構成を思考</li> <li>・発表内容及び資料の作成</li> </ul>
24	12月23日	・後輩へのメッセージ④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表会の実施</li> <li>・コンソーシアムの委員、運営指導委員会の委員さんにZoomで発表会を配信</li> </ul>
25	1月13日	・1年間の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリアパスポートを活用して1年間の活動を振り返り</li> </ul>

3年生の活動は、これまでの取組をとおした自分の成長と、次なるステップに向けた方向づけを意識した。そして、進路決定に向けた自分を起点としたゴールイメージの可視化やコミュニケーションカの向上、活動をとおして自身の課題解決を後輩に伝える、学びのフィードバックを意識して取り組ませた。

3年生は、積極性のある生徒と消極的な生徒の双方が存在する。また、積極的にコミュニケーションが取れる生徒とそれが苦手で自分からしゃべることはほとんどない生徒や、抽象的な言葉でしか目標設定や振り返りができない生徒もいる。しかし、どの生徒も、グループで活動するにあたり自分の役割が明確化されることで一生懸命取り組むことができた。

#### 【進路決定に向け、自分起点でゴールを可視化する】

この活動のなかでは、ワークシート「私の履歴書」を活用し、18年間の人生について生徒一人ひとりが振り返りを行った。高校入学までの自分・高校1年・2年生における学校生活・学習活動・部活動・ボランティア活動での成長と課題を確認した。そして成長と課題をまとめたものをグループ内でアウトプットし、自己の振り返りを行った。

また、自分の進路の目標や興味関心について、「なぜそれなのか」「なぜ興味関心を持っているのか」など、「なぜ」をグループの担当教職員が繰り返し、生徒に考えさせた。「やりたい理由」や「興味関心をもった所」などを考えることで、生徒たちは自己の成長のプロセスとめざす方向を明確化していった。

次にその実現に向けたプロセスを明確化させるとともに、卒業後の人生設計を描かせるために「短期・中期・長期」の目標を設定する「ゴールの可視化」の活動を行った。作成した各自の目標設定は、第三者へのアウトプットにつなげるため発表を行った。発表に際しては、発表者による自己評価と、教職員や他の生徒による他者評価により省察を促すように工夫した。

生徒たちは、この活動をとおして自己の進路希望を深く見つめ直すとともに、自身の進路実現に向けた動機づけにもなっていった。

#### 【コミュニケーションカ、コミュニケーションマナーを身につける】

ここでは、アナログとデジタルによる他者とのコミュニケーションについて生徒に考えさせ、実践させてみた。具体的にはアナログにおけるコミュニケーションとしては、手紙文や報告書等

の作成の仕方について考えさせ、手本との違いについて比較させるとともに、なぜ正確な手紙や報告書の作成が必要かについてグループで考えた。

また、デジタルにおけるコミュニケーションとして、生徒たちは SNS の活用によるコミュニケーションは日常の活動として行っている。しかし、社会人の中には、「休暇」の連絡や「結果報告」、果ては「退職願い」などまでがメール等で送られ、経営者や上司の嘆きが聞かれている。また、正しい報告の仕方やコロナ禍で頻度が高まっているオンライン会議システムへの対応も増えていることから、メールにおける公的なやり取りやオンライン会議における対応力やマナーの獲得という視点から学習や活動を行った。併せて、ケーススタディへのつなぎとして、インタビュー方法についての再確認を行うため、高知新聞社の記者を講師として招聘し、ケーススタディを意識させながらインタビューの仕方やメモの取り方について学習を行った。



オンライン会議システムでの  
面接練習

#### 【地域・学校・個人を結びつけ課題解決を実証する】

ケーススタディに向け、地元の土佐佐賀産直出荷組合の代表取締役である濱町明恵氏のケースを、専門家の手により作成された事例を基に活動を行った。

活動においては、先を見通すためにオリエンテーションを行い、授業の流れやねらい、身につけてほしい力やゴールイメージについて確認した。何よりこの活動においては、事例をしっかりと読み込み、疑問に思ったことや興味関心を持ったこと、気になったことなどをピックアップし書き込む「マーシナリア」により、より深く読み込ませたいと考えた。



インタビューの様子

活動は、個人作業のあとグループ活動を行い、「マーシナリア」をとおして各自がピックアップしたことを共有し、インタビュー内容の検討、インタビューへと展開した。インタビューをとおして、すべての生徒が聞きたいと考え用意していたことを聞くことができた。

インタビューは、10月21日と28日の2週に分けて実施した。インタビュー中は、高知新聞社の記者から学んだことを活かしてメモを取っており、職員間で役割分担やフォローをしあいながら協力してメモを取ることができていた。

ケース提供者である濱町氏からは、「生徒たちが、私が話すことを聞き逃さないよう必死でメモを取っている姿を見て、学習への真剣さと吸収しようとする姿勢が感じられ、いろいろな話をしたいと思った。生徒のインタビューへの受け答えをするなかで、思い起こすことがなくなっていた初心を振り返ることができ、私にとっても良かった。神様が、こらこら初心はどうした！と思い起こす機会を与えているのだと思った。」など、自分の振り返りになった活動であったと話されていた。

#### 【体験を抽象化・一般化により振り返りつつ学びをフィードバックする】

一連の学びをまとめフィードバックするための場として、1・2年生を対象とした発表会を実施した。一つはこれまでの学びをもとにした「ケーススタディ」のフィードバックで、もう一つは高校生活を振り返り、自身の変化や成長を1・2年生に伝える発表会として実施した。

前者については、運営指導委員会の委員さんやコンソーシアム委員会の委員さんにもオンラインで見ただけ、感想や意見をいただいた。本来であれば、地域の方々にも発表を聞いていただきたいところであったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響もありオンライン配信での発表会とした。



発表会の様子

後者については、校内発表会という形での実施となった。しかし、発表した生徒たちは自らの成長を実感するとともに、1・2年生に対して自分たちがやってきたことを、さらに前に進めてもらいたいといった思いを込めた発表を行うことができていた。

## VI 活動の報告

### 1 地域と連携した活動

本年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、年度当初に入学式・始業式を行ってから5月18日まで休校期間となり、学校における教育活動だけではなく地域と連携した活動も行うことができなかった。しかしながら、休校期間中に新型コロナウイルス禍において「自分ができること」「家族と一緒にできること」「黒潮町の経済活動を立て直すためにあなたができること」などについて考えさせる課題を出した。あげられていたことは、ごく当たり前のことから後に全校で取り組むことになる事柄まで、幅広い取組があげられていた。

なお、生徒のアイデアから実践につながったものについては表中に下線を引いている。

表 休校中に生徒が考えた自分たちができるコロナ対策（抜粋）

課題	1年生	2年生
「自分が自分の力でできること」	手洗い・うがい・マスクをする。 必要のない外出をしない。自粛（じしゅく）する。 情報を精査する。 自分の身を守る・ソーシャルディスタンス・三密を避ける。	外出自粛・外出を控える。 手洗い・うがい・マスク＝予防する。 マスクの寄付・マスクを作る。 衛生管理を行う。
「新型コロナウイルス感染症に立ち向かっている人々を勇気づける方法」	折り鶴を作る・笑顔で感謝を伝える。 手伝えることがあれば手伝う。 励ます。花を贈る。 ネット・SNSなどに感謝の書き込みをする。	折り鶴を作る・SNSを使って応援する。 <u>応援メッセージを送る</u> ・募金活動をする。 <u>手紙を書く</u> 。
「新型コロナウイルス感染症の影響で苦しい状況になっている事業所を元気にする策！！」	事業所に <u>応援メッセージを送る</u> 。 誰もが笑顔になれるようなメッセージを送る。 イベント計画・お弁当などをドライブスルーで販売する。 募金活動や購入活動を行う。	励ましの手紙を書く。 SNSなどで応援し続ける。 品物をできるだけ購入する。 ゴミ袋に「ありがとう」を張り紙して出す。 役場に働きかける。

感染者の発生数が増加するなかで、町の取組として進められていた、「Will～あなたの思いを旗に乗せて～」プロジェクト（以下、「『Will』プロジェクト」という）に、生徒たちの思いや願いを乗せようということで、本校独自の活動が始まった。

このプロジェクトは、黒潮町が町のカラーである「青」色の旗をつくり、そこに医療従事者や福祉関係者などの新型コロナウイルス感染症と闘っている人、コロナ禍において社会を支えてくれている人たちに対して、自分たちの未来への意志（Will）を伝えようというものである。学校でも声援を送ろうと協議をしていたところにこの話があり、生徒たちの提案の中にも「応援メッセージ」というものがあつたことから、生徒会の声掛けのもとで全校で取り組むことになった。

本校における「Will」プロジェクトは、生徒一人ひとりが青い旗に、未来への自分の意志や応援等のメッセージを記すとともに、そのメッセージを書いた旗を地元路線を走る「土佐くろしお鉄道」のご当地列車（黒潮町）の車内に飾りつけるというものであつた。さらに、青い旗は生徒たちが使用する駅（中村駅・土佐入野駅・土佐佐賀駅）にも掲示され、「コロナに負けない」意志を示した。

生徒の声から始まった活動として、もう一つが地域の高齢者に「暑中見舞い」を送ろう！の取組であつた。この取組は、生徒防災委員会から出てきたもので、提案した生徒はコロナ対策を考えることを課した休校中の課題で、高齢者の方々が外出できづらくなっている状況から、葉書（メッセージとイラスト入り）を出してはどうかと提案されたものであつた。

その他、コロナ禍ではあるが何ができるかを生徒たちと考えるなかで、「地域学」の活動とも重ねながら次ページの表のような取組を行ってきた。



表 新型コロナウイルス感染症の感染拡大のなかでの地域と連携した活動

時期	テーマ	内容
7月	・暑中見舞いへの返信葉書からアンケート結果を集計！	6月に発送した暑中見舞い葉書の返信欄に記したアンケートを項目ごとに分類し、「家具固定ができていない高齢者が多い」を確認し、啓発活動につなげる。
8月	・津波避難タワーを清掃しよう！	地区内の津波避難タワーが、高齢化の影響もあり長年清掃活動ができない状態にあることを聞いた生徒たちが、清掃活動にチャレンジする。
8月	・グリレモコッタを売り出そう！	地元の事業所である「ぶちどー」さんと連携して、総合的な学習の時間他を使ってグリーンレモンを使用した商品を「グリレモコッタ」と命名し、販売活動を展開する。
8月	・黒潮町総合避難訓練への参加！	毎年実施される黒潮町総合避難訓練に参加し、地震・津波からの避難を行う。避難所となっている本校に避難してくる地域の人々に学校施設を確認してもらうとともに、火災避難訓練を行う。
11月	・高齢者との避難訓練	町内の出口地区の高齢者が交流会を行っている集会所から、巨大地震発生の想定のもと、3方向に分かれて「逃げトレ」アプリを活用して、避難場所までの経路確認を行う。
1月	・避難所見学と施設説明	地域の人々に、避難所となっている体育館を見ていただき、簡易テントの張り方や配置等に関する意見交換を行う。また、使用上の課題についても意見交換を行い、発災時の避難に備える活動とする。

## 2 先進校視察等

11月24日に、愛媛県立三崎高等学校へ教頭と事業統括教員、総合的な探究の時間の担当者が訪問した。

ア 総合的な学習の時間や探究の時間の展開における工夫

イ 生徒への指導・支援の在り方

ウ 活動に関する教職員間の共有等をどのようにしているのか

エ 評価の仕方や評価のスパン

オ 振り返り上の工夫

カ 学力的に厳しい生徒への支援の具体

キ 探究活動推進における教職員をつなぐ工夫

ク 生徒募集上の工夫

・今期の入学生の増加の背景

・地域外生徒の募集上の工夫

ケ 公設塾や町営寮の運営と、遠方から入学した生徒がホームシックにならないための工夫

コ 自治体との連携

以上のことについて質問をさせていただき、丁寧に教えていただいた。

三崎高校の「総合的な探究の時間」では、1・2・3年生が縦割りで班をつくり、上級生が下級生をリードして実施されていた。各班には中心となって取組を進める生徒がおり、月に2回程度の報告会で情報共有のもと、進め方の協議や他の班とのコラボレーション等について話し合われているとのことであった。見学した授業では、地域の専門家が授業に入ってファシリテート役を担っている班もあり、活発に意見交換されていた。

三崎高校では、生徒たちがやりたいことをテーマとして決めて実践させ、教職員も生徒が楽しいと思えることを大事にしているとのことであった。自分たちの行動が認められる事で自己肯定感が上がっているということであった。また、地域の人からのイベントへの参加要請やかかわりも多く、それが生徒たちの喜びにつながっているということであった。

## 3 アンケート結果と分析

本研究の成果を確認するにあたり、3種類のアンケートを実施しその結果をもとに生徒の成長や研究の成果を図ろうと計画した。実施するアンケートは、三菱UFJリサーチ&コンサルティングが実施する「高校魅力化評価システム」、本校で作成した生徒と地域住民に対して実施する「指定事業効果測定アンケート」である。なお、大方高校が作成したアンケートは、生徒用と地域住民用で調査内容が異なるため、2つは異なるアンケートとして位置づけている。

「高校魅力化評価システム」は、年間1回実施される調査であるため年度内で生徒の実態や成長の比

較はできないが、経年変化や学年、他地域の同システムの実施校の状況との比較により、全国と比較して結果の把握と分析ができるというメリットがある。

表 実施したアンケート一覧

項目 アンケート	実施主体	対象	実施時期	実施形態
高校魅力化評価システム	三菱UFJリサーチ&コンサルティング	生徒・地域住民等	令和2年8月	選択
指定事業効果測定アンケート	大方高校	生徒	令和2年9月 令和3年1月	選択・記述
指定事業効果測定アンケート	大方高校	地域住民	令和3年1月	選択

(1) 高校魅力化評価システムの結果（55 ページ参照）

【結果】

本アンケートは、5側面（学習活動・学習環境・生徒の自己能力意識・生徒の行動実績・満足度）、4領域（主体性・協働性・探究性・社会性）から生徒の実態を評価する質問項目が設定されている。また、前年度比較（時間軸）・学年間の比較（学年軸）・他の地域との比較（地域軸）を確認することができるアンケートとなっている。

まず、5側面のうち「学習活動」と「学習環境」は、他地域と比較して恵まれている状況があることが確認できた。4領域のいずれの面においても他地域の平均を上回っていた。

【学習活動】

4つの領域すべてにおいて他地域のポイントを上回っており、なかでも「社会性」に関わる学習活動に関する項目は、他地域を12.64ポイント上回る結果が出ていた。また、「協働性」や「探究性」に関わる学習活動は、他地域を7.17ポイント、5.96ポイントそれぞれ上回っていた。

逆に他地域と比較してポイントの差が少なかったのは、「主体性」に係る学習活動に関する回答であり、「5. 自主的に調べ物や取材を行う」の項目は、他地域より6.13ポイント低くなっていた。また、「社会性」に関わる学習活動における「16. 日本や世界の課題の解決方法について考える」が他地域より5.46ポイント低くなっていた。

表 他地域と比較して差が大きい項目【学習活動】

質問項目 (NO)	質問内容	他地域とのポイント差
5	自主的に調べ物や取材を行う。	-6.13
10	自分の考えや文章を図表にまとめる。	-0.19
16	日本や世界の課題の解決方法について考える。	-5.46

【学習環境】

4つの領域すべてにおいて他地域のポイントを上回っており、なかでも「社会性」に関する項目は他地域を12.99ポイントと上回っていた。また、「探究性」や「協働性」、「主体性」に関わる学習環境は、他地域を7.21ポイント、5.60ポイント、5.32ポイントそれぞれ上回っていた。

しかし、「協働性」に係る学習環境に関する質問項目である「28. 立場や役割を超えて協働する機会がある」が、他地域より0.27ポイント低くなっていた。

表 他地域と比較して差が大きい項目【学習環境】

質問項目 (NO)	質問内容	他地域とのポイント差
28	立場や役割を超えて協働する機会がある。	-0.27

### 【生徒の自己認識】

この側面については、すべての領域において他地域を下回っていた。他地域と比較して10ポイント以上の差がある質問項目が4項目あり、9ポイント以上の差がある質問項目は5項目あった。

表 他地域と比較して差が大きい項目【生徒の自己認識境】

質問項目 (NO)	質問内容	他地域との ポイント差
36	家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する。	-9.93
37	現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる。	-9.79
38	目標を設定し、確実に行動することができる。	-11.06
39	複雑な問題を順序を立てて考えることが得意だ。	-20.41
42	共同作業だと、自分の力が発揮できる。	-18.47
45	忍耐強く物事に取り組むことができる。	-9.82
52	18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う。	-9.23
54	私が関わることで、社会状況が変えられるかもしれない。	-17.19
62	将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい。	-9.28

### 【生徒の行動実績】

生徒の行動実績については、社会性を除いて他地域よりも低い結果となっており、中でも「探究性に関わる行動」に関する質問項目は、他地域より15.73ポイントも低い結果となっていた。

さらに、新設問である「76. 国際社会の課題解決に貢献したい」「77. まだ世の中になく新しい技術やサービスを生み出してみたい」「78. 客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる」という3項目については、他地域からそれぞれ13.93ポイント、16.12ポイント、16.28ポイント低い状況となっていた。

表 他地域と比較して差が大きい項目【生徒の行動実績】

質問項目 (NO)	質問内容	他地域との ポイント差
71	授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った。	-10.77
72	授業で「なぜそうなるのか」と疑問を持って、考えたり調べたりした。	-13.16
73	公式や決まりを習う時、その根拠を自分で考えたり調べたりした。	-18.30

## (2) 高校魅力化評価システムの考察

### 【考察】

今回の診断結果から、「学習活動」に関しては「総合的な学習の時間」において、自律創造型地域課題解決学習に取り組んできたことにより、協働的に学習活動を行うこと・ミッションに基づいて各自の興味・関心にもとづくグループ活動により活動を行ってきたことから、生徒の肯定的回答は高いものとなっていた。また、地域をフィールドとした活動を行ってきたことから、地域の魅力や資源について考えることや、地域課題の解決方法について考えることへの肯定的回答は他地域のそれよりも高いポイントとなっていた。しかし、ローカルの視点を中心に展開してきたため、日本や世界の課題解決という視点の弱さが明らかになった。

「学習環境」に関しては、4つの領域のいずれも他地域より高いポイントとなり、地域を中心とした取組を地域の人々に対してフィードバックしてきたことから、生徒たちが地域とのかかわりの強さを感じていることが確認できた。「地域から大切にされている雰囲気を感じる」や「興味を持ったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる」といった回答の割合が90.0%と87.7%と高いものになっていた。他のカテゴリーにおいても、活動を行う土壌に恵まれており、生徒たちも活動しやすさを感じていることが考えられる。

「生徒の自己認識」に関しては、ほぼすべての領域で他地域より低い状況となっていた。要因としては、支援の必要な生徒が一定数いることから、教職員側に「教え込まなければならない。」という意識が強く、考えさせたり引き出したりするかかわりの弱さが考えられる。それだけに、

日頃の生活のなかで計画し予測をさせて行動させる意図的なかわりや、気づきを促すための機会の提供と獲得させるための方策、プロセスを認めつつ最後までやり遂げさせるような承認の声掛けを行う必要があると考える。そうすることにより、生徒の意欲やできるかもしれないといった意識の醸成につなげ、試行錯誤を繰り返しながらもやり抜こうとする方向に導いていく必要がある。併せて、生徒たちの取組により地域の方々の方々のまなざしや与えた影響等を教職員が意図的にフィードバックすることで、自分たちの行動が地域に変化をもたらしているという実感を持たせることによる、参画意識の醸成を図る必要がある。

今回の高校魅力化評価システムの実施により、本事業で生徒に身につけさせたいと考えている5つの力の設定は妥当なものであることを改めて確認することができた。

「生徒の行動実績」に関しては、主体性や探究性に関する項目において10ポイント以上の差があり、考えさせる活動や調べさせる活動の弱さが如実に表れている。「総合的な探究の時間」を中心として教科学習や特別活動や学校行事、部活動など学校生活のあらゆる場面において、教職員が生徒の主体性や探究性を育むために、教えない場面の創出や「どうしてそう思う」「どこからそのように考えた」といった、根拠を求める問いかけを含むかわりを意識することが必要であると考え。

また、新設問のグローバルな視点やクリエイティブな視点、仮説実証の研究的視点に関する問いの肯定的回答の割合の低さも改善に向けた方策を検討し、教育活動のなかにどう組み込むかを考える必要がある。グローバルな視点については、防災活動をSDGsの視点のなかに位置づけ他国の取組や関連する目標項目と絡めて展開することが可能であると考え。また、クリエイティブな視点や研究的視点を持たせるかわりとしては、カリキュラム開発等専門家の川村晶子氏が提案した社会を理解する視点や10年後の社会を考える活動などの充実が求められると考える。

### (3) 防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケートの結果（61 ページ参照）

#### 【結果】

生徒対象のアンケートについては、第1回（9月）と第2回（1月）の2回実施した。

設問は、本事業で育みたい力としてあげている5つの力（「探究力」「つながる力」「多様性受容力」「マネジメント力」「レジリエンス」）に基づく内容とした。

アンケートの結果を比較すると、1年生から3年生までの全学年で肯定的な回答の割合が向上したのは問3と問9であった。問3は「学習活動をとおして、地域のために活動できる力が身に付いたと思いますか」というもので、有用感を問う設問として設定した。問3においては、第1回と第2回の学年ごとの変化を見ると、1年生 67.9%→71.5%と5ポイント以上の向上、2年生が 58.1%→80.6%と10ポイント以上の向上、3年生が 61.9%→70.0%と5ポイント以上の向上となっていた。

また、問9は「あなたは学習活動をとおして、高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決にかかわる力が身に付いたと思いますか。」というもので、将来の貢献意識を問う設問として設定した。問9においては、第1回と第2回の学年ごとの変化を見ると、1年生が 57.1%→64.3%と5ポイント以上の向上、2年生が 46.7%→71.0%と10ポイント以上の向上、3年生が 47.6%→55.0%と5ポイント以上の向上となっていた。

一方、全ての学年で肯定的な回答の割合が低下していたのは問2であった。問2は「あなたは学習活動をとおして、地域の魅力や良さを理解する力が身に付いたと思いますか」という魅力等の理解を問う設問として設定した。第1回と第2回の学年ごとの変化をみると、1年生 89.3%→89.3%と変化なし、2年生が 83.9%→80.6%とわずかな減少、3年生が 80.9%→75.0%と5ポイントに近い減少となっていた。

学年ごとに見ると、1年生は問1・問4・問6・問7において、5ポイントから10ポイント以上の向上が見られた。2年生は問5・問6・問7・問8において、5ポイントから10ポイント以上の向上が見られた。3年生は、問1・問5・問8において、5ポイントから10ポイント以上の向上が見られた。

また、肯定的な回答をした生徒の理由について記述した内容を、次ページの7つのカテゴリーに分類した。



- 「経験・行動」：学習や情報収集ほか、地域に出て行う活動にもとづく記述
- 「成長実感」：以前と比較してできなかったことができるなど成長を意識した記述
- 「思考活動」：考えたり比較したりする活動にもとづく記述
- 「気づき・理解」：新たな気づきや再確認、理解などに関する記述
- 「意欲表明」：将来に向けた方向づけや「～したい」といった前向きな記述
- 「可換性」：異年齢の者やまだ見ぬ他者を意識した記述
- 「その他」：いずれの分類にも入らない記述

各学年とも、1回目より2回目の方が肯定的な回答が増えていたが、2年生と3年生においては、1回目と比較すると2回目の肯定的な回答の数が若干少なくなっている設問があった。肯定的な回答における理由を記述させたところ、「成長実感」についてはすべての学年で記述数が増えていた。また「意欲向上」に関する記述が1年生と3年生においては増加していた。

#### (4) 防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケートの考察

##### 【考察】

アンケートにおける肯定的な回答の割合が高かった問3と問9については、体験を伴う活動や地域に出て活動することなどにより、自分たちへの地域住民の方々からのねぎらいや賞賛、感謝、激励等の声掛けなどを得たことによるものと考えられる。第1回のアンケートを実施した9月までは、休校期間もあり活動の幅も狭かったが、第2回のアンケートを実施した1月までは地域の方々との活動や出前授業、行事の準備への参加、行政職員他との意見交換など、学校外での活動の機会が増えたことも大きかったと考える。

一方で、問2の肯定的な回答の割合が低下していたのは、例年よりも活動の回数が少なく新たな地域の魅力の発見には至らなかったためであると考えられる。特に3年生が大きく低下しているのは、地域に出て行う活動が9月以降はなく、そのことが大きな影響を与えていると考えられる。

肯定的回答に対する選択理由については、地域の人々と触れ合う活動をとおして学びが展開されることにより、気づきや理解が促進され、意欲や成長の実感につながっていると考えられる。しかし、探究活動において重視しなければならない「思考活動」がどの学年においても伸びていないことは、情報収集や分析方法、個人やグループで考える活動、提案に基づく改善点の存在理由等について、より掘り下げる活動などを位置づける必要があると考えた。

#### (5) 大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケートの結果（70ページ参照）

##### 【結果】

地域住民を対象としたアンケートでは、地域住民178名から回答を得ることができた。肯定的な回答が最も高かったのは、問7「生徒たちの取組は、今後も継続させてほしいと思う」（活動への期待性）で98.3%であった。

肯定的な回答の割合が95%を超えていたのは、問2・問4・問5の各項目であった。これらの質問項目は、生徒たちが行う活動が地域の取組と関連しているかや貢献しているかなどについて質問している項目であり、それらの項目に対しての肯定的な回答の割合が高かった。

一方、肯定的な回答の割合が少なかったのは、問6「生徒たちが取り組む活動は、地域住民が高校の存在を意識するものになっている」（学校の価値化：88.5%）と、問8「生徒たちが行った取組を発表する際は、子どもや孫と一緒に発表を聞きに行きたいと思う」（活動への関心性：87.9%）、問9「生徒たちが行う取組に対して、地域住民は積極的に協力していると思う」（地域の協力性：74.9%）であった。それ以外の質問項目においては、90%以上の肯定的な回答となっている。

#### (6) 大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケートの考察

##### 【考察】

地域住民の方々からの回答から、生徒たちの取組に対して有用性を感じてくれており、認知度も高い状況がうかがえる。これは、マスコミ等が積極的に取り上げてくれていることもあると考えられるが、黒潮町の広報誌においてこれまで以上に、活動や生徒の声などが掲載されていることも

一因ではないかと考える。また、地域住民の方々と一緒に進める活動も増えており、そのことも大きく影響していると考えられる。

また、生徒たちの活動に対して、地域住民の方が積極的に協力しているのかという設問に関しては、課題解決活動や地区別の避難活動などに協力して下さった方や、一緒に活動して下さった方以外は、自分は該当しないと判断した結果、否定的な回答の割合が高くなったことにつながっていると考えられる。

地域住民の方々へのアンケートでは、自由記述として高校の取組に対する提案や意見、感想を書き添えていただくようにしていたが、賞賛や激励のコメントが多数を占めるなかで、高校側からの積極的な発信を提案してくださっている記述も見られた。

## Ⅶ 次年度に向けて

本年度からスタートした指定事業であったが、探究活動を成立させるためにはどうすればいいのか、生徒が持つ意欲を引き出すため、興味関心のある分野とテーマをどのようにして結びつけるか、活動のパフォーマンスをどのように評価していくのかなど、多くのことを協議した一年であった。そのため、実践を行いつつ必要なことを追加していった感がある。まさに走りながらの実践であった。

しかしこの間、「地域学」におけるカリキュラム開発等専門家の矢守研究室研究員である杉山高志氏には、オンライン会議をとおして多くの助言をいただくとともに、生徒たちの学びの場の確保や拡充に向けたコーディネートをしていただいた。また、「総合的な探究の時間」におけるカリキュラム開発等専門家の高知大学次世代地域創造センター客員准教授の川村晶子氏には、メールでのやり取りはもとより、多忙ななかで時間を割いていただき協議に加わっていただいた。地域協働学習実施支援員の松田真紀氏と西村優美氏には、黒潮町内外の事業所や人材を紹介していただくとともに、活動のコーディネートや発表会での助言などをしていただいた。

運営指導委員会やコンソーシアム委員会の委員の皆様には、本事業を進めるうえで大切な助言や提案などをしていただくとともに、次年度の活動への方向づけをしていただくなど、それぞれの所属や専門性を生かしたかわりをしていただいた。

多くの方々のご支援のなかで推進した本事業は、生徒の成長や教職員の探究活動の理解促進、評価方法の研究等の深化につながった。一方、以下のことを推進課題とし、次年度の活動をさらに充実したものすることをめざそうと考えている。そして、生徒が持っている力を引き出し、答えのない社会を生きていくことができる力の育成に向けて取組むことをとおして、地域の学校としての存在感を示していきたい。

### 【推進課題】

- 生徒に身につけさせたい力（3年間・各学年）の全体共有に基づく再設定
- 探究活動における目指す生徒像（ゴールイメージ）の明確化と事業目標の再度の全体共有
- 学びや活動をとおして、自分が気づいたことやできたことを客観的に語らせる振り返りの着実な実施
- 取組のプロセスをとおして、何ができるようになったのかを意図的・意識的にフィードバック
- 生徒の自走性を発揮させるため、教職員側の引き出すアプローチとファシリテーター力の向上
- 研修会や協議等の教職員への確実なフィードバックと共有化（同じゴールを見つめる）
- 教科横断の取組の着実な実施と、探究スキルを活用した教科指導の実施
- 社会に開かれた学校として地域に生徒を出し、異質性のなかでの気づきや理解を自己の興味関心等と結びつけられるようにする機会の創出

# 補 足 資 料





# 資料1 高校魅力化評価システム

## Portfolio of sustainable education and community

### 高校魅力化評価システム 組織診断レポートフォリオ

高校名	高知県立大方高等学校											
年度	2020年度											
回答者数	生徒・学生	81 (内訳)	1年生	28	2年生	32	3年生	21	4年生	0	5年生	0
		(内訳)	1年生		2年生		3年生		4年生		5年生	
	大人	35 (内訳)	教職員	15	(昨年度)	大人	(内訳)	教職員				

【MEMO】

教育目標、育てたい生徒像など

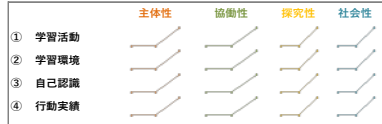
## Summary 総括表

### ■ 今回の結果 (まとめ)

	主体性	協働性	探究性	社会性
① 学習活動	2	4	3	3
② 学習環境	4	4	4	4
③ 生徒の自己認識	2	3	2	2
④ 生徒の行動実績	2	2	1	2

※肯定的回答割合が50%未満=1.50~65%=2.65%~80%=3.80%以上=4

### ■ 前回、前々回からの肯定的回答割合の推移 (まとめ)



※左から前々回、前回、今回。非受検回もグラフに表示されるため読み取り注意。

## How to read 結果の読み取り方

このポートフォリオでは、以下の5側面、4領域、3軸により、高校と地域の学びの「いま」と「変化」を読み取ることができます。

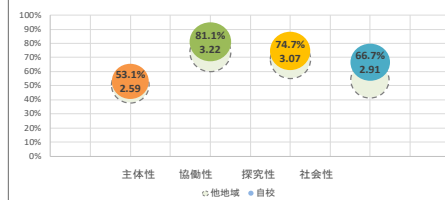
- 5つの側面を → 各校・地域の状況を、「①学習活動」「②学習環境」「③生徒の自己能力認識」「④生徒の行動実績」「⑤満足度」の5つから把握しています。
- 4つの領域から → 各設問を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の4つの資質・能力に関する領域に分類しています。
- 3つの軸で → 上記のデータを「時間軸（前年度からの伸び）」「学年軸（学年による違い）」「地域軸（他地域との比較）」の3つの軸で整理しています。

結果に出てくる数字や言葉は次の意味を表しています。

- 【割合 (%)】 → 各項目で「4、あてはまる」「3、どちらかといえばあてはまる」という肯定的回答をした割合
- 【平均】 → 「あてはまらない=1」～「あてはまる=4」の回答の平均値
- 【他地域】 → 同じ機会に調査を実施した他校の回答の平均値
- 【回答上昇者の割合】 → (個人IDで紐づけを行い、複数回調査を実施した場合に表示) 前年と比べて、各領域の回答平均値が上がった回答者の、全回答者に占める割合

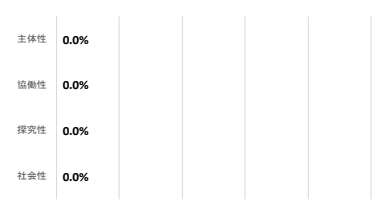
### ① 学習活動 (明示的なカリキュラム)

#### ■ 今回の結果



※上段の数値 (%) : 縦軸) が肯定的回答割合、下段の数値が平均値

#### ■ 前回調査時からの変化 (回答上昇者の割合)

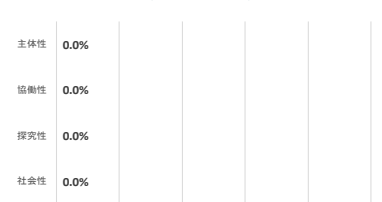


### ② 学習環境 (学びの土壌: 非明示的なカリキュラム)

#### ■ 今回の結果



#### ■ 前回調査時からの変化 (回答上昇者の割合)

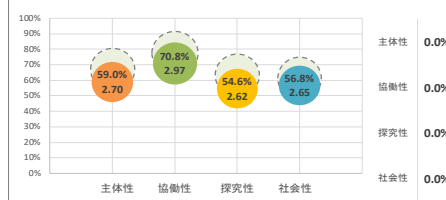


### 【学習活動】 【学習環境】 読み取り・検討の視点

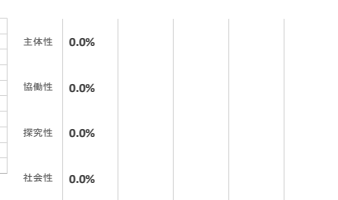
- ・ 学校の強みや課題、それを増進/克服するための、協働のあり方は?
- ・ 普段から意識して取り組んでいる活動の機会や環境づくりは? その成果は出ていますか?
- ・ 協働を支えるコーディネート機能として、どのような役割が必要か?

### ③ 生徒の自己認識 (資質・能力の主観的認識)

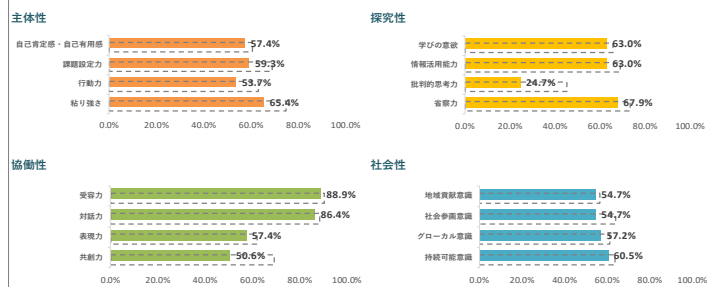
#### ■ 今回の結果



#### ■ 前回調査時からの変化 (回答上昇者の割合)



#### ■ 今回の結果 (詳細)



※点線は他地域における肯定的回答割合

### 【生徒の自己認識】 読み取り・検討の視点

- ・ 普段から意識している、育てたい生徒像や、身につさせたい力に関する指標の結果は?
- ・ 前回からの変化は? その要因として、何が考えられそうか? (学習活動、学習環境と関連付けて)
- ・ 今後、意識して伸ばしていきたいと考える力は? そのために必要な「次の一手」は?

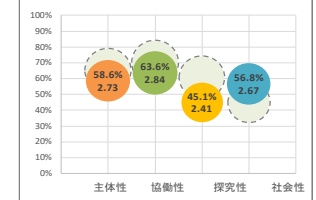
### ■ 総合的な生徒の満足度 (⑤)



※非受検回もグラフに表示されるため読み取り注意。

### ④ 生徒の行動実績 (資質・能力の発揮)

#### ■ 今回の結果



#### ■ 前回調査時からの変化 (回答上昇者の割合)

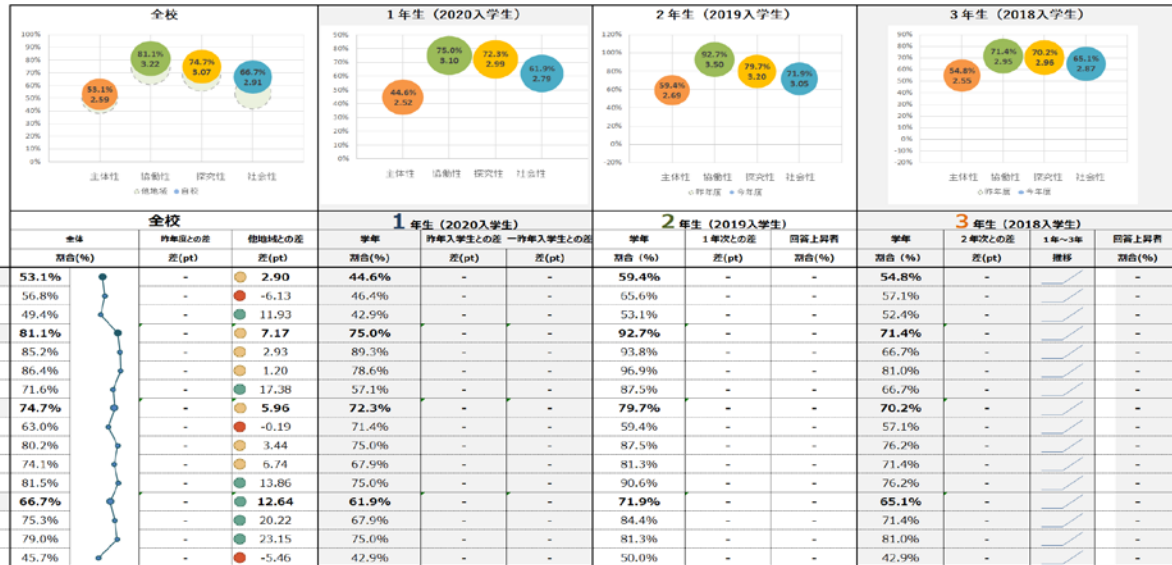


### 【生徒の行動実績】 読み取り・検討の視点

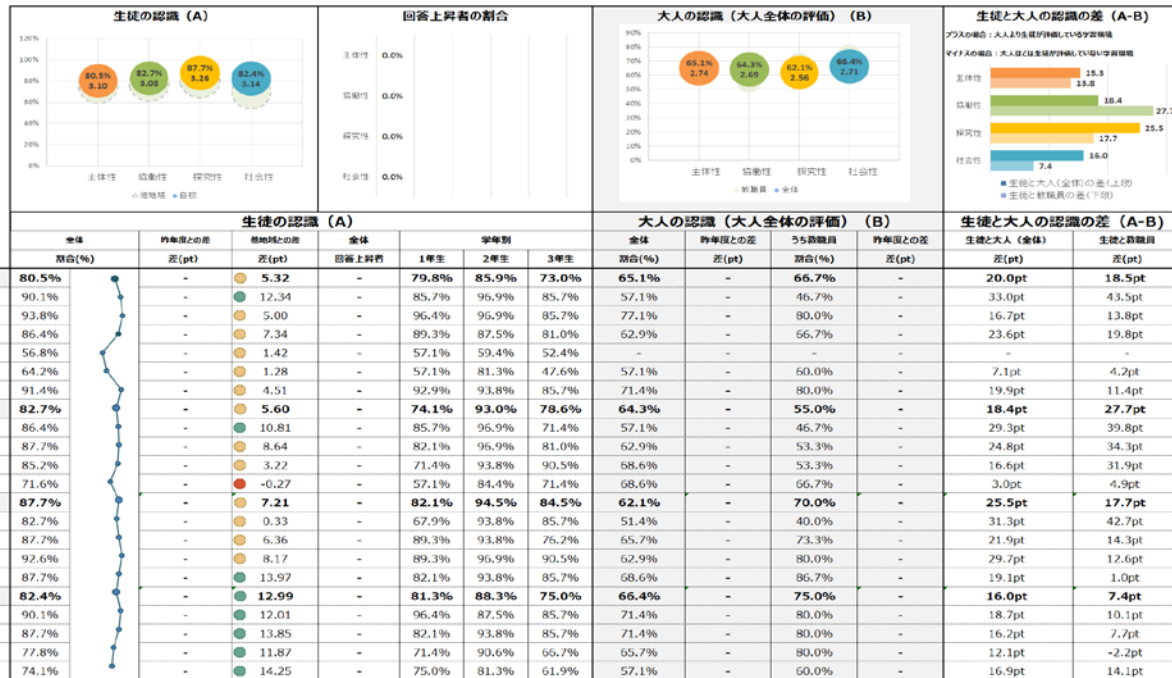
- ・ 生徒に期待する具体的な行動は?
- ・ 生徒の自己認識との関連は?
- ・ 具体的な行動を促すような、学習活動や学習環境づくりはできているか?

Details 詳細結果

① 学習活動 (明示的なカリキュラム)



② 学習環境 (学びの土壌: 非明示的なカリキュラム)



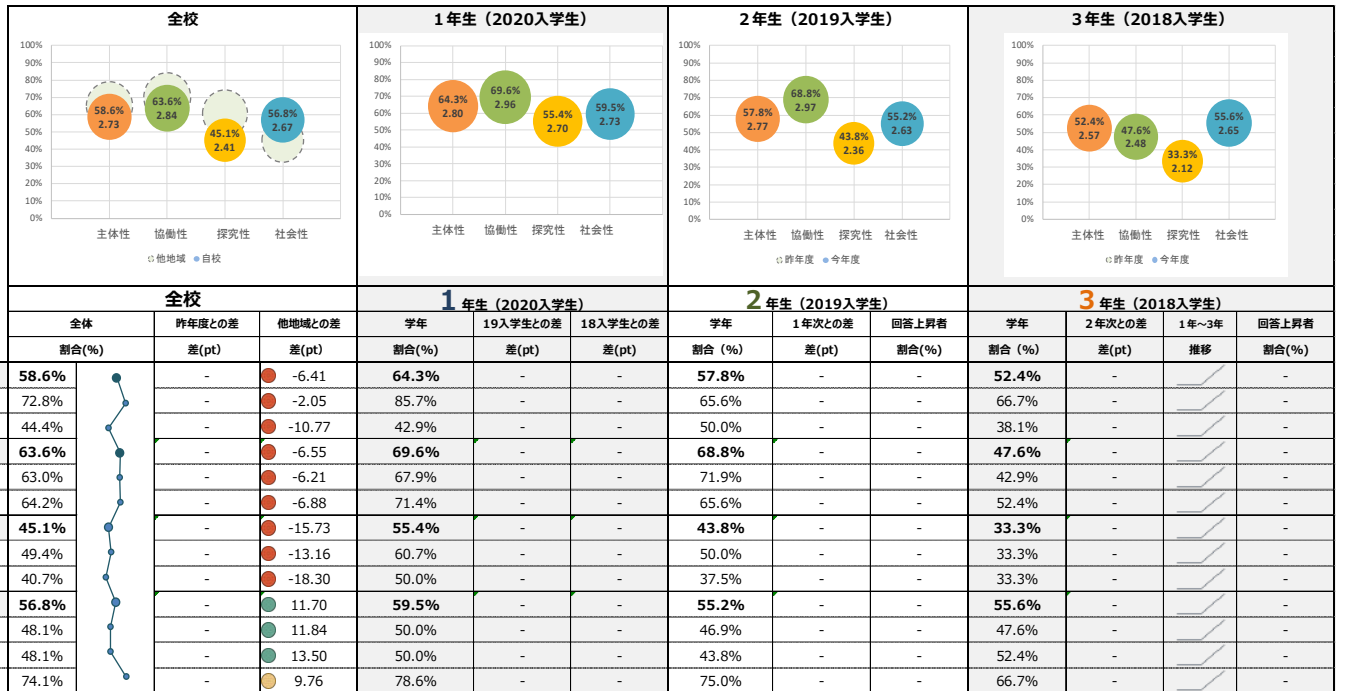
※大人の自己評価は、「2\_大人用」シートでご確認いただけます。

③ 生徒の自己認識（資質・能力の主観的認識）

10pt以上の増加 ●0.00 0～10ptの増加 ●1.00 減少

	全体 割合(%)	全校		1年生(2020入学生)			2年生(2019入学生)			3年生(2018入学生)			
		昨年度との差	他地域との差	学年	19入学生との差	18入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年～3年	回答上昇者
		差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	割合(%)	割合(%)	差(pt)	推移	割合(%)
<b>主体性に関わる自己認識</b>	<b>59.0%</b>	-	● -7.98	<b>57.6%</b>	-	-	65.2%	-	-	51.2%	-	-	
【自己肯定感・自己有用感】	57.4%	-	● -3.29	60.7%	-	-	53.1%	-	-	59.5%	-	-	
49 自分にはいいところがあると思う	66.7%	-	● -4.28	71.4%	-	-	56.3%	-	-	76.2%	-	-	
50 私は、自分自身に満足している	48.1%	-	● -2.30	50.0%	-	-	50.0%	-	-	42.9%	-	-	
【課題設定力】	59.3%	-	● -9.79	60.7%	-	-	68.8%	-	-	42.9%	-	-	
37 現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	59.3%	-	● -9.79	60.7%	-	-	68.8%	-	-	42.9%	-	-	
【行動力】	53.7%	-	● -9.50	50.0%	-	-	64.1%	-	-	42.9%	-	-	
38 目標を設定し、確実に行動することができる	51.9%	-	● -11.06	42.9%	-	-	65.6%	-	-	42.9%	-	-	
51 自分で計画を立てて活動することができる	55.6%	-	● -7.94	57.1%	-	-	62.5%	-	-	42.9%	-	-	
【粘り強さ】	65.4%	-	● -9.32	58.9%	-	-	75.0%	-	-	59.5%	-	-	
35 うまいいか分らないことにも意欲的に取り組む	69.1%	-	● -8.83	64.3%	-	-	75.0%	-	-	66.7%	-	-	
45 忍耐強く物事に取り組むことができる	61.7%	-	● -9.82	53.6%	-	-	75.0%	-	-	52.4%	-	-	
<b>協働性に関わる自己認識</b>	<b>70.8%</b>	-	● -6.65	<b>71.4%</b>	-	-	77.0%	-	-	60.7%	-	-	
【受容力】	88.9%	-	● -1.59	89.3%	-	-	96.9%	-	-	76.2%	-	-	
41 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	88.9%	-	● -1.59	89.3%	-	-	96.9%	-	-	76.2%	-	-	
【対話力】	86.4%	-	● -2.08	96.4%	-	-	84.4%	-	-	76.2%	-	-	
40 相手の意見を丁寧に聞くことができる	86.4%	-	● -2.08	96.4%	-	-	84.4%	-	-	76.2%	-	-	
【表現力】	57.4%	-	● -4.45	53.6%	-	-	64.1%	-	-	52.4%	-	-	
47 自分の考えをはっきり相手に伝えることができる	63.0%	-	● -3.91	57.1%	-	-	68.8%	-	-	61.9%	-	-	
48 友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	51.9%	-	● -4.98	50.0%	-	-	59.4%	-	-	42.9%	-	-	
【共創力】	50.6%	-	● -18.47	46.4%	-	-	62.5%	-	-	38.1%	-	-	
42 共同作業だと、自分の力が発揮できる	50.6%	-	● -18.47	46.4%	-	-	62.5%	-	-	38.1%	-	-	
<b>探究性に関わる自己認識</b>	<b>54.6%</b>	-	● -8.67	<b>55.7%</b>	-	-	59.8%	-	-	45.4%	-	-	
【学びの意欲】	63.0%	-	● -2.72	69.0%	-	-	68.8%	-	-	46.0%	-	-	
36 家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する	55.6%	-	● -9.93	67.9%	-	-	62.5%	-	-	28.6%	-	-	
58 地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	56.8%	● 1.30	57.1%	-	-	65.6%	-	-	42.9%	-	-		
64 学習を通じて、自分がしたいことが増えている	76.5%	● 0.46	82.1%	-	-	78.1%	-	-	66.7%	-	-		
【情報活用能力】	63.0%	-	● -6.13	64.3%	-	-	67.2%	-	-	54.8%	-	-	
43 情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	66.7%	-	● -8.80	64.3%	-	-	75.0%	-	-	57.1%	-	-	
44 勉強したものを実際に応用してみる	59.3%	-	● -3.47	64.3%	-	-	59.4%	-	-	52.4%	-	-	
【批判的思考力】	24.7%	-	● -20.41	25.0%	-	-	31.3%	-	-	14.3%	-	-	
39 複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	24.7%	-	● -20.41	25.0%	-	-	31.3%	-	-	14.3%	-	-	
【省察力】	67.9%	-	● -5.41	64.3%	-	-	71.9%	-	-	66.7%	-	-	
46 自分を客観的に理解することができる	67.9%	-	● -5.41	64.3%	-	-	71.9%	-	-	66.7%	-	-	
<b>社会性に関わる自己認識</b>	<b>56.8%</b>	-	● -4.51	<b>67.4%</b>	-	-	54.9%	-	-	45.4%	-	-	
【地域貢献意識】	54.7%	-	● -1.78	67.9%	-	-	52.1%	-	-	41.3%	-	-	
62 将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい	34.6%	-	● -9.28	42.9%	-	-	31.3%	-	-	28.6%	-	-	
53 地域をよりよくなるため、地域の問題に関わりたい	65.4%	● 5.85	78.6%	-	-	68.8%	-	-	42.9%	-	-		
55 将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい	64.2%	-	● -1.90	82.1%	-	-	56.3%	-	-	52.4%	-	-	
【社会参画意識】	54.7%	-	● -9.11	70.2%	-	-	51.0%	-	-	39.7%	-	-	
54 私が関わること、社会状況が変えられるかもしれない	29.6%	-	● -17.19	35.7%	-	-	25.0%	-	-	28.6%	-	-	
59 地域や社会での問題やできごとに関心がある	67.9%	-	● -0.91	82.1%	-	-	68.8%	-	-	47.6%	-	-	
52 18歳選挙権を取得したら、選挙に行こうと思う	66.7%	-	● -9.23	92.9%	-	-	59.4%	-	-	42.9%	-	-	
【グローバル意識】	57.2%	-	● -4.10	61.9%	-	-	60.4%	-	-	46.0%	-	-	
56 地域の課題と世界での課題は関連していると思う	61.7%	-	● -6.29	71.4%	-	-	65.6%	-	-	42.9%	-	-	
61 将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	67.9%	-	● -1.06	71.4%	-	-	78.1%	-	-	47.6%	-	-	
60 将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う	42.0%	-	● -4.94	42.9%	-	-	37.5%	-	-	47.6%	-	-	
【持続可能意識】	60.5%	-	● -3.05	69.6%	-	-	56.3%	-	-	54.8%	-	-	
57 地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい	49.4%	-	● -6.26	64.3%	-	-	43.8%	-	-	38.1%	-	-	
65 自分の将来について明るい希望を持っている	71.6%	-	● 0.17	75.0%	-	-	68.8%	-	-	71.4%	-	-	

④ 生徒の行動実績（資質・能力の発揮）



● 10pt以上の増加 ● 0.00 0~10ptの増加 ● 1.00 減少

⑤ 総合的な生徒の満足度

項目	全校			1年生 (2020入学生)			2年生 (2019入学生)			3年生 (2018入学生)			
	割合(%)	昨年度との差	他地域との差	学年	19入学生との差	18入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年~3年	回答上昇者
75 今の生活全般に対する満足度	60.5%	-	-2.67	64.3%	-	-	68.8%	-	-	42.9%	-	/	-
63 この学校に入ってよかったと思う	85.2%	-	0.95	92.9%	-	-	87.5%	-	-	71.4%	-	/	-

2020\_新設問（パイロット実施）

項目	全校			1年生 (2020入学生)			2年生 (2019入学生)			3年生 (2018入学生)			
	割合(%)	昨年度との差	他地域との差	学年	19入学生との差	18入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年~3年	回答上昇者
76 国際社会の課題解決に貢献したい	38.3%	-	-13.93	46.4%	-	-	34.4%	-	-	33.3%	-	/	-
77 まだ世の中にない新しい技術やサービスを生み出してみたい	38.3%	-	-16.12	42.9%	-	-	37.5%	-	-	33.3%	-	/	-
78 客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたることできる	27.2%	-	-16.28	35.7%	-	-	21.9%	-	-	23.8%	-	/	-



## 資料2 防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート

このアンケートは、皆さんが防災や総合的な探究の時間などに取り組むことをとおして、自分の力がどれだけ身に付いたのかについて答えてもらうためのものです。問1から問10の各質問をよく読んで、当てはまるものを「4」～「1」の数字から選んで、数字に「0」を付けてください。

また、なぜその数字を選んだのかについて、その理由を「理由」の枠の中に書いてください。

なお、問10は、例を参考にして記入してください。

回答する数字の意味は、以下のようになっています。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

### 【質問項目】

1 あなたは、学習活動をとおして、計画を立てて取り組み、それを実践する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

2 あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを理解する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

3 あなたは、学習活動をとおして、地域のために活動できる力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

4 あなたは、学習活動をとおして、地域の人々の思いや願いを理解する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

次のページに進んでください。

5 あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを、他の地域の人に自分の言葉で伝えることができる力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う 〔3〕：ややそう思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

6 あなたは、学習活動をとおした聞き取りや情報収集により、課題が存在する背景を考え、解決に向けた方法を考え出す力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う 〔3〕：ややそう思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

7 あなたは、学習活動をとおして、自分とは異なる立場の人（幼児や児童・高齢者・自分とは異なる性別・外国人など）のことを意識して、課題解決策を提案する力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う 〔3〕：ややそう思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

8 あなたは、学習活動をとおして地域の厳しい現実を把握し、それをよい方向に変えようと解決策の提案や実践を行う力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う 〔3〕：ややそう思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：

9 あなたは、学習活動をとおして、高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決にかかわる力が身に付いたと思いますか。

〔4〕：強くそう思う 〔3〕：ややそう思う 〔2〕：あまりそう思わない 〔1〕：まったくそう思わない

その理由：



質問は以上です。ご協力ありがとうございました

資料3 防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート（9月実施分・1月実施分 数値のみ）

指定事業効果測定アンケート 【防災活動や地域課題解決学習に関する生徒アンケート】									
第1回結果（9月実施）									
問	設問	学年	4 (%)	3 (%)	肯定計	2 (%)	1 (%)	否定計	
問1	あなたは、学習活動をとおして、計画を立てて取組み、それを実践する力が身に付いたと思いますか。	1年	21.4%	50.0%	71.4%	28.6%	0.0%	28.6%	
		2年	25.8%	38.7%	64.5%	32.3%	3.2%	35.5%	
		3年	14.3%	42.9%	57.2%	23.8%	19.0%	42.8%	
問2	あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを理解する力が身に付いたと思いますか。	1年	32.1%	57.2%	89.3%	10.7%	0.0%	10.7%	
		2年	16.1%	67.8%	83.9%	12.9%	3.2%	16.1%	
		3年	14.3%	66.6%	80.9%	14.3%	4.8%	19.1%	
問3	あなたは、学習活動をとおして、地域のために活動できる力が身に付いたと思いますか。	1年	21.4%	46.5%	67.9%	32.1%	0.0%	32.1%	
		2年	16.1%	42.0%	58.1%	38.7%	3.2%	41.9%	
		3年	14.3%	47.6%	61.9%	33.3%	4.8%	38.1%	
問4	あなたは、学習活動をとおして、地域の人々の思いや願いを理解する力が身に付いたと思いますか。	1年	21.4%	32.1%	53.5%	42.9%	3.6%	46.5%	
		2年	19.4%	54.8%	74.2%	22.6%	3.2%	25.8%	
		3年	9.5%	52.4%	61.9%	28.6%	9.5%	38.1%	
問5	あなたは、学習活動をとおして、地域の魅力や良さを、他の地域の人に自分の言葉で伝えることができる力が身に付いたと思いますか。	1年	10.7%	64.3%	75.0%	21.4%	3.6%	25.0%	
		2年	16.1%	29.0%	45.1%	48.4%	6.5%	54.9%	
		3年	14.3%	38.1%	52.4%	28.6%	19.0%	47.6%	
問6	あなたは、学習活動をとおした聞き取りや情報収集により、課題が存在する背景を考え、解決に向けた方法を考え出す力が身に付いたと思いますか。	1年	14.3%	28.6%	42.9%	42.8%	14.3%	57.1%	
		2年	19.4%	35.5%	54.9%	41.9%	3.2%	45.1%	
		3年	14.3%	38.1%	52.4%	42.8%	4.8%	47.6%	
問7	あなたは、学習活動をとおして、自分とは異なる立場の人（幼児や児童・高齢者・自分とは異なる性別・外国人など）のことを意識して、課題解決策を提案する力が身に付いたと思いますか。	1年	25.0%	46.4%	71.4%	28.6%	0.0%	28.6%	
		2年	9.7%	61.3%	71.0%	25.8%	3.2%	29.0%	
		3年	14.3%	47.6%	61.9%	23.8%	14.3%	38.1%	
問8	あなたは、学習活動をとおして地域の厳しい現実を把握し、それをよい方向に変えようとする解決策の提案や実践を行う力が身に付いたと思いますか。	1年	10.7%	35.7%	46.4%	39.3%	14.3%	53.6%	
		2年	6.5%	54.8%	61.3%	32.2%	6.5%	38.7%	
		3年	4.8%	38.0%	42.8%	42.9%	14.3%	57.2%	
問9	あなたは、学習活動をとおして、高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決にかかわる力が身に付いたと思いますか。	1年	17.9%	39.2%	57.1%	39.3%	3.6%	42.9%	
		2年	3.4%	43.3%	46.7%	43.3%	10.0%	53.3%	
		3年	19.0%	28.6%	47.6%	42.9%	9.5%	52.4%	

第2回結果（1月実施）							
学年	4 (%)	3 (%)	肯定計	2 (%)	1 (%)	否定計	
1年	25.0%	53.6%	78.6%	21.4%	0.0%	21.4%	
2年	12.9%	48.4%	61.3%	32.3%	6.5%	38.7%	
3年	20.0%	50.0%	70.0%	20.0%	10.0%	30.0%	
1年	35.7%	53.6%	89.3%	10.7%	0.0%	10.7%	
2年	25.8%	54.8%	80.6%	19.4%	0.0%	19.4%	
3年	15.0%	60.0%	75.0%	15.0%	10.0%	25.0%	
1年	32.1%	39.3%	71.4%	28.6%	0.0%	28.6%	
2年	25.8%	54.8%	80.6%	19.4%	0.0%	19.4%	
3年	25.0%	45.0%	70.0%	25.0%	5.0%	30.0%	
1年	28.6%	28.6%	57.1%	42.9%	0.0%	42.9%	
2年	19.4%	48.4%	67.7%	32.3%	0.0%	32.3%	
3年	10.0%	50.0%	60.0%	30.0%	10.0%	40.0%	
1年	25.0%	32.1%	57.1%	35.7%	7.1%	42.9%	
2年	16.1%	29.0%	45.2%	51.6%	3.2%	54.8%	
3年	20.0%	35.0%	55.0%	40.0%	5.0%	45.0%	
1年	25.0%	57.1%	82.1%	17.9%	0.0%	17.9%	
2年	22.6%	54.8%	77.4%	22.6%	0.0%	22.6%	
3年	15.0%	35.0%	50.0%	40.0%	10.0%	50.0%	
1年	25.0%	53.6%	78.6%	17.9%	3.6%	21.4%	
2年	25.8%	51.6%	77.4%	22.6%	0.0%	22.6%	
3年	15.0%	40.0%	55.0%	35.0%	10.0%	45.0%	
1年	14.3%	32.1%	46.4%	46.4%	7.1%	53.6%	
2年	16.1%	54.8%	71.0%	29.0%	0.0%	29.0%	
3年	10.0%	45.0%	55.0%	30.0%	15.0%	45.0%	
1年	25.0%	39.3%	64.3%	32.1%	3.6%	35.7%	
2年	19.4%	51.6%	71.0%	22.6%	6.5%	29.0%	
3年	10.0%	45.0%	55.0%	30.0%	15.0%	45.0%	

選択肢：4「強くそう思う」・3「ややそう思う」・2「あまりそう思わない」・1「まったくそう思わない」

資料4 肯定的評価における記述のカテゴリー別の分類（抜粋）

【1年生】

カテゴリー	回・(数)	主な記述内容
経験・行動	第1回 (64個)	ペア活動にしっかり取り組めたから 実際に歩いて行ったりして地域のことを知れたから 地域学などで調べて分かった 黒潮町についてペア活動で伝えることができた 特産物や取り組みなどから良い所を抜き出して伝える事ができるから グループで話し合ったり情報を集めたりしたから どうしたら早く解決できるか考えて行動した
	第2回 (49個)	いろいろな人との関わることで、時間の大切さを知って計画などの重要性を知ったから 地域についてよく調べることができた 地域学で地域の人と関わっての活動ができたと思った 人と話すことで少し慣れてきた、ボランティアなども積極的にした 自分たちなりのアイデアをまとめて発表できたから 地域の人との関わりがたくさんあったからいろいろな人たちの声が聴けた 地域を歩き見てたくさんの活動をしたから グループで協力しながら話し合ったから 情報なども自分で集めて考えることができたから

カテゴリー	回・数	主な記述内容
成長実感	第1回 (14個)	前は何も決めずにしていただけ、計画を立てて取り組めた すぐに何をしたらいいのか自分で計画を立てて活動ができたから 計画を立てるのが苦手だったが、毎日の手帳などに書くようになったから 防災について学んだから、地域のために活動できる力が身についたと思う 周りの人とのコミュニケーションの取り方が分かりだしたから
	第2回 (40個)	計画を立てて取り組むことができるようになった 先生がいなくても自分だけでできると思うから 見通しを立て修正をしながら物事を進めることができているようになってきたから 地域をよく見て気づくことができるようになったから 考え方が変わってきたから、相手の思いを理解して動けるようになった 前よりかは考える力が身についたと思う 学習活動で知った地域の課題解決に向けて十分にに取り組むことができ、それに取り組む力も身につけてきたと思ったから

カテゴリー	回・数	主な記述内容
思考活動	第1回 (16個)	何をするか課題でどう答えを出すのかを考えつくようになったから 地域のために何ができるかを考えることとかが身についたと思う どんな解決法を提案したらいいのかということも考えたから 未来へのメモワールで南海トラフのことを考えたから 解決策をよい方法に持っていくことを考えたから
	第2回 (19個)	発表するためいろいろ考えられたから 黒潮町の特色について考える事ができたから 自分が地域をこのようにして変えて、こんな活動ができれば良いななどと考えることができた いろいろな人のことを考えどうしたらいいか考えることができた 解決策などを積極的に考えたから



カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
気づき・理解	第1回 (20個)	砂浜美術館のことを知ることができた 良さは感じたが魅力はあまり感じていないところがあったから 地域の人々の思いを知ることができたから
	第2回 (25個)	地域の魅力に気づけた 砂浜美術館の「T シャツアート展」を見て、内容や工夫を理解した 地域の課題を知ることができたから T シャツアート展のように地域の復興を強く目指しているという思いが理解できたから 地震にあった人たちがインタビューしている時に、なるほどと思ったから 理解できたし知らなかったことが知れたから 考え方が1つじゃないことを知ったから まだ行う力がついていないと思う

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
意欲向上	第1回 (11個)	地域のためにやってみたい事が増えた 今地域でやっていることはこれからのことにつながると思う 地域のこととかをもっと調べたいと思った 地域の活動に協力していきたいと思ったから 地域の課題で困ったことがあったら協力する
	第2回 (15個)	人と関わって困らないようにしておきたいから 何を大切にしたいかが知れて、それを守っていこうと思う 少しでも解決に近づきたいと思っている 自分の事として考えるよりか地域のこととして考えるようになった できないことは工夫してやろうと色々なアイデアを出せた 人の役に立って防災などでは人の命を守ることができるので卒業しても 関わる力は身につけたい 高校卒業後もボランティアなどを頑張っていきたい 高校卒業後も課題解決したいと思ったから これからも学習活動してきたことを生かしていきたい

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
可換性	第1回 (10個)	自分のことだけを考えている人は防災でもなんでも役に立たないから、人の 事を考えられる力を身につけてきているから 自分と異なる立場の人目線でどのようにしてほしいかを考える力が身につ いてきたから
	第2回 (5個)	他人のことを考えて提案することができたから 自分と立場が違う人でも解決策を提案することができた その人の目線に立って考えることができた 高齢者のことをよく考えられるようになった アイデアを出す時に、異なる立場の人を意識した上で提案できるよう になった

【2年生】

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
経験・行動	第1回 (46個)	計画を立てることによってスムーズに取り組むことができたから 地域のことを調べていくことで、いい所などが見つかったから いろいろな人の考えを聞いたから 地域の人たちの思いなどを聞きそれについて考えることができた 総合で多くの地域の魅力を学んだから アクションプランをとおして地域の現状を把握し、疑問点などをあげることができたから
	第2回 (47個)	学習活動をとおして、その地域で行われていることを知らないことも知れたし魅力を感じた 地域と密着した学習をとおして、今まで気づけなかった地域の魅力に気づくことができた たくさん調べる活動を行ったから 地域のために課題を見つけたりごみ拾いをしたから 総合的な学習で地域のことについて学んだから 地域のためにボランティアなどに参加した インタビューをとおして、人々の思いを理解できたから 総合的な学習で提案した

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
成長実感	第1回 (20個)	意識も変わったし行動に移すこともできているから 役に立つことが楽しい時がある 自分の意見を言えるようになったから グループで解決策を出しあえたから
	第2回 (47個)	計画を考えて行動するようになった 話し合っただけで考えたりする力がついたと思うから 地域の事を考えるようになった 誰かのためにと思い活動に取り組んでいけたと思う 課題を考えたり解決案を出したりできるようになった たくさんの研修をとおしてパワーポイントを作る能力などが上がったと思う 様々な視点から考える能力がついたと思う 考えようと思って意識することが増えたから 課題解決に関わる力がちょっとだけ身についたと思う 何が課題でどうやったら解決できるかを考える力がついたと思う

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
思考活動	第1回 (5個)	どんなことをしたら地域がよくなるか考えることができたから この町に人を呼び込めるためにどんなことをしたらいいか考えることができたから 課題を知り解決策を考えることができたから この地域の課題を考えることができたから
	第2回 (16個)	何をしたらもっとよくできるかとか考えることができたから 課題解決に向けて考えることができたから 少しでもいい方向にと考えることができた 良い方向に行くように多く考えたから 黒潮町の人口減少をどうにかするために考えることができたから 総合の時間で「ゆるキャラ」を使って活性化を考えていた

カテゴリー	回・数	主な記述内容
気づき・理解	第1回 (24個)	災害はいつ、どこで起こるか分からないので常に危機感を持っていないといけないと理解したから 今まで知らなかった黒潮町の所を知ることができたから 地域の魅力を理解することができるようになった 避難する時の高齢者や幼児の大変さを知ったから 地域でどんな活動をしているのか分かったから
	第2回 (31個)	四万十市に住んでいたからこそ黒潮町の良さを知らなかったからよく知れた 黒潮町のすばらしさを知った、魅力を見つけることができた 知らなかったこととか知ることができたから この地域の良さを発見することができたから 高校生は頼られているんだなと感じた 地域の魅力が何かを知ることができたから

カテゴリー	回・数	主な記述内容
意欲向上	第1回 (9個)	個人では難しいけどグループだったらできると思うから 自分も問題を抱えているから共感して解決策を考えようとする事ができる 子どもがいなくて大変だから解決策を考えなければいけないと思う 今からも地域の役に立ちたいと思うから 人のためになりたいから 地域の課題解決に関わりたい
	第2回 (14個)	高校のイメージアップや活気をつけたいと考えている 自分にできることをやろうと思うから 後輩に引き継いでもらおうと思った 授業でやったことを生かせると思うから ボランティア活動などもしていきたいと考えています 人のために役立ちたいから、力になりたいから 卒業後も黒潮町のために頑張りたいからです

カテゴリー	回・数	主な記述内容
可換性	第1回 (4個)	自分以外の立場で考えてみたりした アクションプランをとおして異なる立場の人ことを考えることができたから 津波の時とかに高齢者方がどう避難するかとか考えることができたから
	第2回 (9個)	様々な視点から見ることができた 児童や高齢者についてよく考えたから 視点を変えて考えられた 異なる立場の人の目線で課題を考えているから 自分以外の人のことや外国人の人などのことも考えることができた

【3年生】

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
経験・行動	第1回 (48個)	地域学やミッションなど活動を多くしてきたから ミッションで先を見とおして計画を立てて実際に行っていたから 特産品をPRする時他の事も知ったから 地域について考えたり関わったりする授業が多かった、身についたと思う 地域の方々と関わるが多かったから
	第2回 (40個)	地域の人と多く関わったから 総合の時間などで地域の人のお話を聞き、魅力や良さについて知れたと思うから 地域の人と関わるがあったから 課題を見つけて行動できた 地域の人にインタビューをし、思いなどを聞いたから 地域の魅力や良さを他の地域の人に伝えることができたから 地域の魅力を伝えるためアレンジレシピを考案したりなどしたから

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
成長実感	第1回 (28個)	計画を立てて取り組んでいたから力が身についた 総合的な学習の時間をおして、マイプロジェクトアワード中四国大会に参加したりなど、様々な人との関わりの中で身についたと思うから 以前は計画の立て方すら分からなかったが今では計画を立てて取り組むことができるため 以前はあまり魅力を感じることはなかったが、今ではどこが他県とは違うのか理解できるようになってきているため 以前は難しいと諦めてしまっていたが今では諦めず少しでもいい方向にかえることを考える力が身についてきているため 今まで何をしたらいいかわからなかったがこの活動をおして何をすべきかわかるようになったため
	第2回 (26個)	計画を立ててそれを実践することができたから 以前は苦手だったが、計画通りに進められるようになったと思うから 地域との交流で知らない人であっても、話せるようになった 地域のために活動できる力が身に付いたから 分かってもらえるように話せた 人の話を真剣に聞けるようになった 地域学を学ぶことによって、地域の課題を知ることができ考えることができるようになったため 地域の課題解決には、どのようにしたらいいかについて、考えられるようになったため

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
思考活動	第1回 (1個)	学校に来てくれた方の話を聴く学習をおして、今後の社会をどうやって生活していくか考えたことがあるから
	第2回 (1個)	津波からどう逃げるか考えた

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
気づき・理解	第1回 (7個)	授業をとおして自分の知らない地域の良さなどが知れたから 総合的な学習の時間をとおして、グリーンレモンなどの知らなかった特産品などを知れ地域の魅力を知れたと思うから 以前は地域のこと知らなかったために、どういう思いや願いなどあまり知りませんでした、今では知ることができどういいう思いがあるか理解することができるようになってきているため
	第2回 (12個)	地域の魅力や良さを理解することができたから 地域の良いところを少し見つけることができたと思うから 地域の活動を知ることができた 今までは地域の課題がどんなものがあるのか分からなかったため 地域の人たちがどのような思いを持ってイベント等を行っているかを知れたから

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
意欲向上	第1回 (4個)	役に立てそうなことが少しでもあると思う 授業をとおしてもっと地域の人助けになりたいと思ったから 将来関わって貢献したいから 高校卒業後も何らかの形で地域の課題解決に関わる力が身についたと思ったから
	第2回 (10個)	厳しいことでも頑張っていきたい 大事なことはメモを取って望むようにしたい 話を聞いて活動していく これまで以上に取り組めた

カテゴリー	回・数	主 な 記 述 内 容
可換性	第1回 (2個)	他人の立場に立って考えることが多かったから 異なる立場の人のことも考えて課題解決することができた 地域学などで異なる立場の人と関わってきたから 伝える人によって言い方を変えたり、表現方法を変えたりしていたから 防災学習をするたび幼児や高齢者目線になって考えていたから
	第2回 (0個)	



## 資料5 大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケート



このアンケートは、以下の目的に基づき地域の皆様のご協力をお願いするものです。ご面倒をおかけしますが、生徒の成長や取組の充実に向けて、皆様のご協力をお願いいたします。

目的：1 大方高校の生徒による地域防災の取組や地域課題解決活動、地域行事への参加などの学習活動やボランティア活動について、地域の皆さんからの評価をいただき取組評価を確認する。  
2 生徒の取組をより充実させるために、学校の取組を確認したり改善したりするための資料とする。

### 【注意事項】

◎回答方法：質問は、以下の（ ）問です。各問について当てはまると思う答えを、「4」～「1」の中から選び、選んだ数字を[別紙の回答用紙]にご記入ください。

[4]: 強く思う [3]: やや思う [2]: あまりそう思わない [1]: まったくそう思わない

◎返信方法：同封の封筒（大方高校の住所・学校名を記載している封筒）に回答用紙を入れ、郵送してください。直接学校に届けていただいてもかまいません。

### 【質問項目】

1 生徒たちが、防災や地域課題解決のための取組を行っていることを知っている。

[4]: 強く思う [3]: やや思う [2]: あまりそう思わない [1]: まったくそう思わない

2 生徒たちが行う防災の取組は、黒潮町が掲げる「犠牲者0」を目指す思想の実現につながるものだと思う。

[4]: 強く思う [3]: やや思う [2]: あまりそう思わない [1]: まったくそう思わない

3 生徒たちが防災の取組を行うことで、自分も命を守るために避難しなければならないと意識するようになった。

[4]: 強く思う [3]: やや思う [2]: あまりそう思わない [1]: まったくそう思わない

4 生徒たちの取組は、地域の防災意識の向上や課題解決に役立っていると思う。

[4]: 強く思う [3]: やや思う [2]: あまりそう思わない [1]: まったくそう思わない

5 生徒たちの取組は、小学生や中学生の取組に刺激を与えたり、参考になるものであると思う。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまり思わない 〔1〕：まったく思わない

6 生徒たちが取り組む活動は、地域住民が高校の存在を意識するものになっている。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまり思わない 〔1〕：まったく思わない

7 生徒たちの取組は、今後も継続させてほしいと思う。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまり思わない 〔1〕：まったく思わない

8 生徒たちが行った取組を発表する際は、子どもや孫と一緒に発表を聞きに行きたいと思う。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまり思わない 〔1〕：まったく思わない

9 生徒たちが行う取組に対して、地域住民は積極的に協力していると思う。

〔4〕：強く思う 〔3〕：やや思う 〔2〕：あまり思わない 〔1〕：まったく思わない

10 大方高校の取組について、提案や意見、感想などがあれば自由にお書きください。



質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

大方高校は、地域防災や地域課題解決の取組をさらに充実させるとともに、活動をとおして生徒の意欲を引き出し、力を引き出すことをとおして未来の「地域の創り手」人材の育成※（下記を参照ください。）を目指します。

今後とも皆様のご協力とご理解をよろしくお願いいたします。

※ 未来の「地域の創り手」人材とは、高校や大学等を卒業して地元に住み、地元の活性化に貢献する者・一度は別の地域で生活するがUターンして地元の活性化に貢献する者・地元には戻ってこないが居住地で地元への支援（ふるさと納税・帰省時のイベント等への参加や協力など）をしたり思いを持って生活（地元のニュースへの反応・住んでいる地域での地元の良さの宣伝等）する者を意味しています。

資料6

大方高校の地域貢献活動に関する地域住民アンケート

指定事業効果測定アンケート（地域住民対象 1月）							
問	設問	4	3	肯定計	2	1	否定計
問1	生徒たちが、防災や地域課題解決のための取組を行っていることを知っている。	43.8%	47.2%	91.0%	6.7%	2.2%	9.0%
問2	生徒たちが行う防災の取組は、黒潮町が掲げる「犠牲者0」を目指す思想の実現につながるものであると思う。	52.8%	43.2%	96.0%	4.0%	0.0%	4.0%
問3	生徒たちが防災の取組を行うことで、自分も命を守るために避難しなければならないと意識するようになった。	46.6%	47.7%	94.3%	5.7%	0.0%	5.7%
問4	生徒たちの取組は、地域の防災意識の向上や課題解決に役立っていると思う。	54.6%	43.1%	97.7%	2.3%	0.0%	2.3%
問5	生徒たちの取組は、小学生や中学生の取組に刺激を与えたり、参考になるものであると思う。	50.0%	45.4%	95.4%	4.6%	0.0%	4.6%
問6	生徒たちが取り組む活動は、地域住民が高校の存在を意識するものになっている。	37.9%	50.6%	88.5%	11.5%	0.0%	11.5%
問7	生徒たちの取組は、今後も継続させてほしいと思う。	79.0%	19.3%	98.3%	1.7%	0.0%	1.7%
問8	生徒たちが行った取組を発表する際は、子どもや孫と一緒に発表を聞きに行きたいと思う。	23.6%	64.4%	87.9%	10.9%	1.1%	12.1%
問9	生徒たちが行う取組に対して、地域住民は積極的に協力していると思う。	12.6%	62.3%	74.9%	25.1%	0.0%	25.1%

選択肢：4「強くそう思う」・3「ややそう思う」・2「あまりそう思わない」・1「まったくそう思わない」

資料7 地域住民の方からのコメント

- TV 等で見たり目にすることが何度かあった。社会的弱者に手を差し出すことは重要だと思う。自分たちができることをよく考えていて大人より頼りになると思います
- 地域の方にとって高校生への力は心強いものだと思います
- 防災教育に力を入れている学校というイメージはありますが、具体的には保・小・中・高の合同避難訓練くらいしか分からないので部活内容を学校外にも発信していけば、地域の方にも伝わるのでは・・・と思います
- 新聞で大方高校の取り組みを知っていいなと思いました。小中学生の手本になるよう続けてほしいと思います
- 「避難先周知ベンチ」のような発想をどんどん提案していただきたい。みなさんの取り組みを心強く感じています
- よく新聞に載っているのを見かけます。頑張っていますね。これからの大方高校のみなさんに期待しています
- 防災の訓練時には必ず大方高校さんの姿があります。真剣に取り組む姿は見ていて頼もしいです。これからもお願いしたいです
- 自分の子どもが大方高校に通っていないため、いい取り組みをしても協力して防災のイベント等に参加する際に気まずいので、何か参加しやすい呼びかけがあればいいと思います
- 大方高校の活動についてはほとんど知りません。もっとどんどん入野地区だけでなく活動を広げてみてはいかがでしょうか

- 日頃より、大方高校のみなさん、先生方防災に関する様々な取り組みに力を入れられていると感じています。全国にも発信できる活動などもされていて素晴らしいと感じています。ただ、その内容については私自身が詳しくわかっておらず〔4〕に○がつけられませんでした。今後のみなさんの活動にますます注目したいと思います。頑張ってください
- 活動知らずすみません。錦野団地に住んでいますが、、今後注目してみたいと思います
- 継続が大切だと思いますので頑張ってください
- 地域の貢献につながる。とても素晴らしい取り組みをされていると思います。取り組みの内容を広報と一緒に配布したり、ケーブルテレビで放送する等どんどん発信してほしいなと思います
- 高校で取り組んでいる事を知りませんでした
- 高校が地域に何らかの関りをもった活動をしている事は知っているが、具体的な取り組みまでは知らないです
- これからも防災への取り組みを継続させてほしいと思います
- 大方高校の生徒さんが防災に力を入れている事はこのアンケートで初めて知りました。この取り組みで私たち町民の意識も高まる事だと思います。これからも続けて頑張ってください
- 地道に活動を続けていると思います。
- 活動内容を知らない為評価ができない
- 新聞で大方高校の生徒さんの取り組みは知っています。それを見て感心していますが、自分とはなかなか接点がないように思えます。これからもっとその取り組みが続いて広がっていったら良いなと思います
- 自分たちだけでは後回しにしたり、諦めてしまうようなことに一緒に取り組むことを提案、実行してくれてとても頼りになります。自ら考え行動する力を我が子にも見本としてもらいたいと思います
- 粘り強く継続し広めていってください。地域に根づいていくと思います
- 地域の方にとって高校生力は心強いと思います
- 地域とのコミュニケーションの強化。高齢者をはじめとした訓練参加への呼びかけが必要
- 高校サミットや近年の防災シンポジウムでの大方高校生の防災の取り組みを受けて、年々小学校で出前授業や、避難訓練時に地域の住民と共同しての訓練の実施、又避難所運営、地域活性の取り組みなど地域に根づいた取り組みやその発信がされており、素晴らしいと感じ心強く思います。そんな取り組みに触れるたび改めて自身の防災意識や地域での活動を振り返り問いかけています。これからも期待しています。そして共に頑張りましょう
- 学んだ知見を黒潮町全域で知ってもらうために、全戸の避難訓練時に自主防と行政に提案していく（具体的な取り組み内容を提示する）（高校生が担うべき役割を提案していく）
- 頑張れ！！生徒会長(^)
- 大方高校の生徒さんの地域へ入った取り組み本当に感謝しています。私たちの至らない点をカバーしていただき黒潮町の防災が前に進んでいると実感しています。今後も引き続き協力いただけることを期待するとともに頼りにしています
- 地域を守るため地域おこしのため、色々な取り組みをしていただいて本当にありがとうございます
- 学校の取り組みについてどのような内容であれトップの姿勢や意識が大事だと思います。
- せっかく大方高校が素晴らしい取り組みをしているので隣の大方中学校、入野小学校ももっと連携をとり町一体となるよう頑張ってください
- 住民、小学校はもちろんですが大方中学校との連携を強化してほしいです
- 活動の詳細があまり理解できてない上での回答となりますことをご理解願います。大方高校の防災活動に直接参加したことはありませんが IWK や報道を通じて貴重な取り組みや経験を積まれていることを知り、自分の行動を思い返すことがあります。防災活動をとおして多くの異年齢層の方々と交流を深め、卒業した後はには更に楽しく活動が続けられるよう無理をせずに取り組んでほしいと思います
- 芝地区在住です。地区の取り組みへの協力ありがとうございました。若者が頑張っていると地区の住民も引っ張られてやる気になります。引き続きの取り組みをお願いします
- これからも頑張ってください



文部科学省指定事業

令和2年度 地域との協働による高等学校教育改革推進事業 地域魅力化型  
研究開発報告書 第1年次

令和3年3月発行

発行者：高知県立大方高等学校

〒789-1931 高知県幡多郡黒潮町入野5507

TEL：0880-43-1079 FAX：0880-43-1379

E-mail：ogata-h@kochinet.ed.jp





夢見るちからある限り

たゆまぬ努力ある限り

